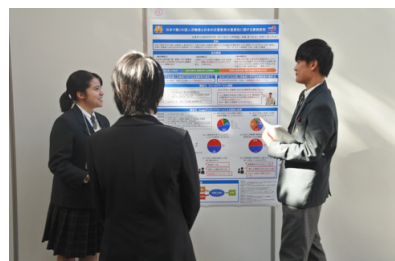
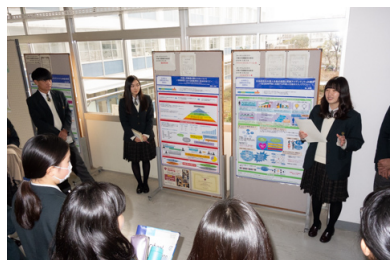
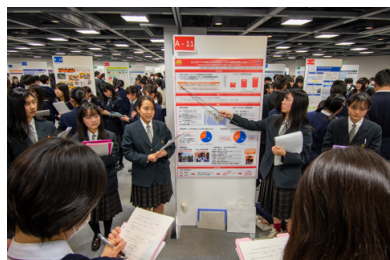
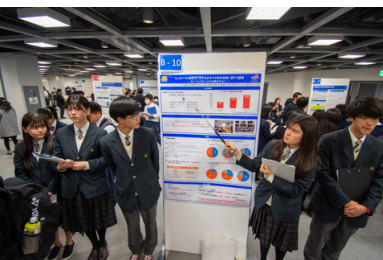
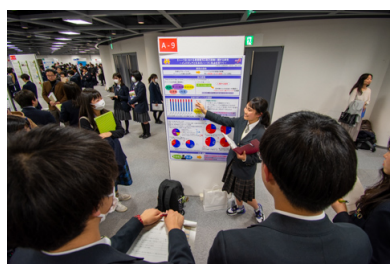
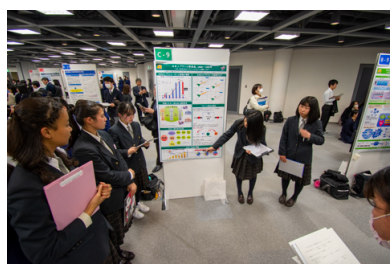


平成27年度指定スーパーグローバルハイスクール

研究報告書 第5年次

令和2年3月



第5年次(平成31年度)SGH研究報告書の発行にあたって

校長 井上 真理

本校は、前身である兵庫県立芦屋南高等学校の国際文化コース、国際文化科の流れを引き継ぎ、平成15年4月1日に開校した国際科のみの専門高校です。教育目標として「国際社会に貢献できる人材の育成」と「自ら発信し、多文化・多言語も受容できる人間の育成」を掲げ、「グローバル人間力」の育成を掲げています。これまでも、学校設定教科・科目や特色ある行事等を通じて、英語や外国語の運用力や異文化と自国文化の相互理解を図ることができる「コミュニケーション能力」の向上に教職員一同努めております。

この本校ならではのグローバル化に対応した教育を更に推進するため、平成27年度に文部科学省のスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けることとなりました。以降5年間、研究開発構想名を「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」として、現在の探究活動の先駆けとなる課題研究に取り組んで参りました。この研究テーマは、日本を取り巻く状況を検討した上で、本格的な多文化共生社会の到来により、国際問題と国内課題を一体的に取り扱う必要があることが重要である、と考え設定しました。そして、本研究をとおして、本校生に、表面上の異文化理解から抜け出し、日本の多文化共生社会化にともなって生じる課題を克服する日本を世界の人々が共に生きる豊かな場所として発展させる役割を担うグローバル・リーダー育成のための教育を行うことが出来る、という認識に至り、様々な活動や学びを広げて参りました。

研究テーマの中心は「移民」ですが、その上に今日的な国内外の課題についての学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての日本の未来の選択肢を導き出し提案する課題研究を実施することで、まず、「高いコミュニケーション能力」、「自国および他国の文化に関する深い知識と理解」、「これからの日本および世界のために献身的に行動ができる実践力」の3つの資質を身につけさせることができる。次に、多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟的にとらえ、未来に向けて建設的な考え方ができるグローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成することを目指しています。

この度、SGH事業の取り組みを終えるにあたり、次への新たな取り組みに向けた資料とすべく、本校1年次生、2年次生、3年次生が取り組んできた課題研究をこの冊子にまとめてご報告いたします。本校のみならず、同様の取り組みや研究を行なっている学校様やこの冊子を手にとられる方々にも、何かの参考となれば幸いです。

最後になりましたが、これまで本校の事業構想にご理解をいただき、ご尽力、ご支援いただいた多くの関係者に心から感謝いたします。

兵庫県立国際高等学校SGH研究構想



移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト



持続的自己開発へ（高等教育に接続、リーダーとしての成長）

【生徒の成長】

【外部支援・連携】

*太字・下線は主たる連携大学

卒業時点

- 主体的意識の醸成
- 研究手法の習得
- 知識の広がりと深まり

発信

提案 日本の選択
”世界の人々が共に生きる場所を目指して”

<発表会参加・評価>

関西学院大学 教員・研究

研究

- 踏み込んだ世界観
- 様々な要因(正・負・矛盾の存在)の理解
- 錯綜したメカニズムの理解
- 答えを求める思索
- 研究に係る評価
- 日本社会への視点

論文 提案 日本の選択

国内問題の学習・研究

学校設定科目の学習活用

生徒間の議論を通じた学

下級生指導 昼休み辻説法

[学校設定科目]
異文化理解(英語)
外国語としての日本語
世界を読み解くための思想
国際ボランティア研究
世界の経済
日本文化
食の文化

<研究支援>

関西学院大学
教員・研究員

米コロンビア大学
経済学研究員
(米国での研究情報)

神戸松蔭女子学院大学

実体験

- 異文化を実体験
- 各自目標設定

- アメリカ、カナダ、イギリスに分かれて2次生全員で実施
- 交流校での活動(共同研究、日本紹介、授業参加、小学校交流)
- 4泊のホームステイ(基本的に1家庭に1生徒)
- カンボジア スタディツアー

<海外交流>

アメリカ:SCS校、TBS校、
カナダ:PCS校、
イギリス:CUS校

調査

- 英文情報検索力
- 海外との交信力
- 大局的な世界観
- 錯綜したメカニズムへの視点
- 国毎の考え方の違いの理解
- 「労働対価」の差異に対する認識

移民マップ研究の日本でのハブ校を目指す

世界移民マップ作成	移民情報収集			
	調査項目	対象国(例)	想定課題	関連情報
受入数と国	アメリカ	職業・賃金	失業率	
出国先と数	カナダ	社会福祉	出生率	
方針と制度	ドイツ	教育	平均賃金	
市民権・参政権	フィリピン	宗教	GDP	
	日本	国民感情	国際収支	

<講義・研究支援>

関西学院大学
国際学部
社会学部
総合政策学部

グローリー株式会社
(海外事業展開企業)

日本赤十字社

米タフツ大学
国際関係学研究員
(米国での研究情報)

慶応大学
つくば言語技術教育研究

学習

- 世界への視野の拡大
- 歴史的認識
- 多様な原因の認識

分類	原因・理由	
	強制移住	人身売買
避難(難民)		災害・飢饉
		迫害・弾圧
		戦争・暴力
自発的移民	職業・賃金	
	気候・生活	
	要請	

入学時

- グローバル化の重要側面への気付き
- 自分の日常との比較

出発点

人はなぜ国を越えて移り住むのか。
生きる場所としての自分の周りの環境を見つめ直す。

国際問題研究者
による基調講演
関西学院大学

文部科学省の研究指定による継続的な実践

プログラムを支える
ファンデーション

「言語技術習得」を通じた論理的思考力の強化

「国際科」専門校としての特色あるカリキュラム

国際高校「言語研究チーム」の設置

目次

PART1: 平成 31 年度 SGH 研究開発完了報告

1	平成 31 年度 SGH 研究開発完了報告	1
---	-----------------------------	---

PART2: 実施報告書

1	SGH 構想調書の概要	6
2	2019 年度スーパーグローバルハイスクール課題研究活動の実施状況	8
3	本校における取組体制	11
4	「第 1 回 SGH 運営指導委員会」記録	13
5	「第 1 回 SGH 研究開発委員会 (企画推進委員会)」記録	14
6	課題研究活動の取組	
(1)	C.C.C. (総合的な探求の時間) におけるディベート課題研究活動	15
(2)	C.C.C. (総合的な探求の時間) における「移民マップ」課題研究活動	17
(3)	C.C.C. (総合的な学習の時間) における海外研修に向けての課題研究活動	19
(4)	学校設定科目「提案日本の選択」における取組	20
(5)	「昼休み辻説法」における課題研究活動	22
(6)	海外フィールドワーク「カンボジアスタディツアー 2019」における課題研究活動	23
(7)	海外研修 (アメリカ合衆国・カナダ・イギリス) における課題研究活動	27
(8)	「SGH フィールドワーク in 姫路 2019」における課題研究活動	29
(9)	国内フィールドワーク「フィールドワーク in 池田 2020」における課題研究活動	32
(10)	国内フィールドワーク「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2020」における 課題研究活動	34
(11)	国内フィールドワーク「フィールドワーク in 六甲「灘わくわく会」」における課題研究活動	35
(12)	国内スタディツアー「スタディツアー@兵庫県立大学・神戸市外国語大学・立命館大学」 における課題研究活動	37
(13)	国内スタディツアー「スタディツアー@関西学院大学×WWL」における課題研究活動 ..	40
(14)	国内スタディツアー「スタディツアー@国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催 大会」における課題研究活動	41
(15)	国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会 2019 年度年次大会」における課題	

研究活動	44
(16) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会 2019 年度冬季大会」における課題研究活動	46
(17) 国内スタディツアー「スタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019」における課題研究活動	49
(18) SGH 講演会における課題研究活動【SGH 基調講演】	51
(19) SGH 講演会における課題研究活動【第 1 回 SGH 特別講演】	53
(20) SGH 講演会における課題研究活動【第 2 回 SGH 特別講演】	55
(21) 「SGH 課題研究最終発表会」における課題研究活動	57
(22) 校外の発表会「全国高校生フォーラム 2019」における課題研究活動	60
(23) 校外の発表会「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2019SGH 甲子園」における課題研究活動	62
(24) 校外の発表会「甲南大学リサーチフェスタ 2019」における課題研究活動	64
(25) 校外の発表会「第 6 回高校生「国際問題を考える日」」における課題研究活動	66
(26) 校外での英語による「SGH 高槻高等学校第 2 回グローバルヘルス高校生フォーラム」における課題研究活動	68
(27) 校外の英語での普及活動「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における課題研究活動	69
(28) 校外の英語での普及活動「SGH プレゼンテーション@国際交流セミナー」における課題研究活動	70
7 課題研究活動以外の取組	
(1) 学校設定科目「言語技術における取組」	72
(2) 科目「社会と情報」における取組	73
8 課題研究活動の評価	
(1) 評価方法	74
(2) 課題研究活動の評価	75
 PART3: 関係資料	
1 平成 31 年度実施教育課程表	100

平成 31 年度 SGH 研究開発完了報告
1 平成 31 年度 SGH 研究開発完了報告

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

1 事業の実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 兵庫県立国際高等学校
学校長名 井上 真理

3 研究開発名

移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト

4 研究開発概要

1年次では、ディベート課題研究活動や「移民マップ」課題研究活動を実施し、移民研究を通して創造的思考力、批判的・論理的思考力の育成に努めた。2年次では、海外研修における課題研究活動を通して移民研究とともに異文化理解を養成した。3年次生ではグローバルリーダーコース(GLC)の生徒が学校設定科目「提案日本の選択」で2年間の移民研究の成果を論文にまとめ、創造的思考力、批判的・論理的思考力の育成と向上に取り組んだ。同時に、国内外でスタディツアーやフィールドワーク、講演会などを実施することで移民研究を進める契機とした。さらに、兵庫県立大学から留学生を招き、本校生によるポスターセッションと質疑応答を英語で行った。成果を校内および校外で発表することで還元した。また、移民政策学会および国際開発学会&人間の安全保障学会において、8人の生徒が研究成果の発表を行った。成果の普及については、西宮市立西宮浜中学校で中学生を対象に英語による成果の発表会や、芦屋ルナホールで保護者や一般来場者を対象に最終発表会、また各種学会やセミナー、国際科設置校長会等で行った。

5 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成31年4月1日～令和2年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ディベート課題研究活動	1年次	1年次	1年次	1年次								
「移民マップ」課題研究活動						1年次	1年次	1年次	1年次			
カンボジアスタディツアー課題研究活動			1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次
「海外研修」課題研究活動	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	1年次	1年次	1年次
「提案日本の選択」課題研究活動	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次
SGH プロジェクトチーム課題研究活動	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次

(2) 実績の説明

ディベート課題研究活動

[実施規模] 1年次生全員対象(121人)

[成果の普及] 成果集にまとめ校外に配布し成果の普及を図った。

「移民マップ」課題研究活動

[実施規模] 1年次生全員対象(122人)

[成果の普及] 校内の発表会で成果発表を行った。また、第7回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表した。

「海外研修」における課題研究活動

[実施規模] 2年次生全員対象(114人)

[成果の普及] 芦屋ルナホールの最終発表会で成果発表を行った。
 学校設定科目「提案日本の選択」における課題研究活動

[実施規模] 3年次 GLC 対象(19人)

[成果の普及] 校内外の発表会で成果の報告をした。このうち、甲南大学リサーチフェスタ2019において、審査員特別賞およびロジカルデザイン賞とアトラクティブプレゼンテーション賞を受賞した。また、移民政策学会2019年度年次大会で3人の生徒が研究成果の発表を行った。

「カンボジアタディツアー」における課題研究活動

[実施規模] 1年次生 GLC 対象(20人)

[成果の普及] 芦屋ルナホールの最終発表会で成果発表を行った。また、甲南大学リサーチフェスタ2019および第7回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表した。

「フィールドワーク in 六甲「灘わくわく会」」における課題研究活動

[実施規模] 1, 2年次生対象(4人)

[成果の普及] 調査結果をまとめた2年次生2人が移民政策学会2019年度冬季大会で成果を発表した。また、第7回高校生「国際問題を考える日」で成果を報告した2年次生が優秀賞を受賞した。

「フィールドワーク in 姫路2019」における課題研究活動

[実施規模] 1, 2, 3年次生対象(17人)

[成果の普及] 校内外の発表会で成果の報告を行った。このうち論文としてまとめた3年次生が甲南大学リサーチフェスタ2019で審査員特別賞を受賞した。

「フィールドワーク in 池田2020」における課題研究活動

[実施規模] 1, 2年次生対象(16人)

[成果の普及] 報告書および調査結果をデータベースとしてまとめ成果集として配布した。

「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル2020」における課題研究活動

[実施規模] 1年次生全員対象(119人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@兵庫県立大学・神戸市外国語大学・立命館大学」における課題研究活動

[実施規模] 1年次生全員対象(121人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@関西学院大学×WML」における課題研究活動

[実施規模] 2, 3年次生対象(3人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@国際開発学会 & 人間の安全保障学会2019共催大会」における課題研究活動

[実施規模] 2年次生対象(2人)

[成果の普及] 研究成果をまとめポスターセッションによる発表を行った。審査の結果、人間の安全保障学会奨励賞を受賞した。

「スタディツアー@移民政策学会2019年度年次大会」における課題研究活動

[実施規模] 2, 3年次生対象(19人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。3年次生3人が研究の成果を発表した。
 また、学会発表した内容は芦屋ルナホールの最終発表会で報告した。3人が甲南大学リサーチフェスタ2019で成果を発表しロジカルデザイン賞とアトラクティブプレゼンテーション賞を受賞した。

「スタディツアー@移民政策学会2019年度冬季大会」における課題研究活動

[実施規模] 2, 3年次生対象(10人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。2年次生3人が研究の成果を発表した。
 また、この3人は第7回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表し、1人は優秀賞を受賞した。

「スタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム・東京2019」における課題研究活動

[実施規模] 1, 2年次生対象(36人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「SGH 基調講演」における課題研究活動

[実施規模] 1年次生全員対象(120人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「SGH 特別講演会(第1回特別講演・第2回特別講演)」における課題研究活動

[実施規模] 全年次生対象(353人)

[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。

「SGH 課題研究最終発表会」における課題研究活動

[実施規模] 全年次生対象(354人) 発表生徒16人

[成果の普及] 各年次の課題研究の成果を芦屋ルナホールにて全校生徒と本校 SGH 運営指導委員・企画推進委員および

保護者・一般来場者に発表した。

「校外の発表会」における課題研究活動

[実施規模] 全年次生対象(65人)

[成果の普及] 移民政策学会 2018 年度年次大会で 3 人、移民政策学会 2018 年度冬季大会で 3 人、国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会で 2 人が研究成果の報告をした。なお、国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会に出場した 2 人は人間の安全保障学会奨励賞を受賞した。全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2019SGH 甲子園のラウンドテーブル型プレゼンテーションに出場した生徒が優秀賞を受賞した。甲南大学リサーチフェスタ 2019 において、審査員特別賞およびデジタルデザイン賞とアトラクティブプレゼンテーション賞を受賞した。第 7 回高校生「国際問題を考える日」において、優秀賞を受賞した。全国高校生フォーラム 2019 に 2 年次生 4 人が参加し、研究成果を英語で発表した。

「昼休み辻説法」における課題研究活動

[実施規模] 全年次生対象(50人)

[成果の普及] 課題研究の成果を下級生に伝達報告することで、研究活動をさらに進める契機となった。

⑲ 「SGH プレゼンテーション@国際交流セミナー」における英語による課題研究活動

[実施規模] 1, 2, 3 年次生対象(42人) アジアの架け橋プロジェクト留学生を含む

[成果の普及] 研究成果を英語でポスターにまとめ、兵庫県立大学の留学生 40 人と学生 4 人、教員 2 人に発表を行った。質疑応答を含めすべて英語で行った。

⑳ 「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における英語による課題研究活動

[実施規模] 2 年次生対象(4人)

[成果の普及] 本校の課題研究の成果を中学生 71 人、教員 5 人、西宮市教育委員会職員 1 人に英語でプレゼンテーションした。

㉑ 「SGH 高槻高等学校第 2 回グローバルヘルス高校生フォーラム」における英語による課題研究活動

[実施規模] 3 年次生対象(2人)およびアジアの架け橋プロジェクト留学生 1 人

[成果の普及] 課題研究の成果を英語で発信した。

㉒ 学校設定科目「言語技術」での取組

[実施規模] 2 年次生対象(20人)

[成果の普及] 授業を通して課題研究の成果をまとめ、3 人が移民政策学会 2018 年冬季大会で、2 人が国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会で発表した。

6 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 検証および評価の方法

本校が作成した「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を活用することで課題研究活動の成果を検証した。このルーブリックは次の 3 つの観点について評価を行うものである。すなわち、(a) 創造的思考力、(b) 批判的・論理的思考力、(c) 異文化理解の 3 つの観点について 4 段階で評価するものである。

この「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を基に、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、学校設定科目「提案日本の選択」における論文用のルーブリックを作成し、それぞれの課題研究活動でこれらのルーブリックを使って評価を行った。なお、これらの課題研究活動では、取り組みを始める最初の段階でルーブリックを生徒に示し、身につけてほしい能力や資質について説明した。

あわせて、本校のルーブリックを基に「発表用ルーブリック」を作成し、これを用いて最終発表会において発表者全員が自己評価を行った。

最後に、本校のルーブリックを基に作成した「異文化理解に関するルーブリック」を用いて、1 年次生は入学前と 2 月に、2 年次生は 2 月に自己評価を行い、その変化を分析した。

(2) 研究開発の成果とその評価

まず、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の 3 年次生(15 回生)と昨年度の 3 年次生(14 回生)の比較分析を行う。学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a) 創造的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 38.9% であった。昨年度の 3 年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a) 創造的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 38.1% であり、今年度の 3 年次生(15 回生)の方が 0.8% 高かった。なお、過去 3 年間に於いて最も高い数値となった。次に、(b) 批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア 4 をつけた生徒は 27.8% であった。一方、昨年度の 3 年次生(14 回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(b) 批判的・論理的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 23.8% であり、今年度の 3 年次生(14 回生)の方が 4.0% 高くなった。最後に、(c) 異文化理解に関してスコア 4 をつけた「提案日本の選択」選択者は 44.4% であった。これに対して、昨年度の 3 年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(c) 異文化理解に関してスコア 4 をつけた生徒は 23.8% であり、今年度の 3 年次生(15 回生)の方が 20.6% 高くなった。なお、過去 3 年間に於いて最も高い数値となった。ちなみに、3 つの観点のうち最も伸びたと思う力は何かという質問に対して、「提案日本の選択」選択者の今年度の 3 年次生は、(b) 批判的・論理的

思考力、(c)異文化理解と回答した生徒がともに38.9%、(a)創造的思考力と回答した生徒は22.2%であった。特に、異文化理解の力が向上したと回答した生徒が過去3年間で最も多くなった。

この結果から、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生は、過去3年間で最も異文化理解の力が向上したといえる。これは昨年度、学校設定科目「提案日本の選択」を選択している生徒の異文化理解の力が向上していないことがわかり、特に3年次生(15回生)の異文化理解の力の向上が今年度の最も重要な課題として様々な取り組みを行った。具体的には、学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動を通して、本校に在籍する他の国にルーツを持つ生徒に焦点を当てて、彼らがどのような困難を経験し、その困難をどのように乗り越えてきたか分析を行った。エスノグラフィの手法を用いて調査分析を行い生徒が論文を作成した。そして、全校生および全職員が対象となる特別講演会に多文化共生を専門に研究している明治大学の山脇啓造教授を招聘し、「多文化共生社会をめざして」というテーマでお話をいただいた。ルーブリックによる調査結果を分析したうえで課題を設定し、計画的かつ戦略的に課題解決に取り組んできた成果が出たと判断できる

次に外部支援員と「提案日本の選択」選択者との比較分析を行う。(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.9%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は58.3%であり生徒より19.4%高かった。昨年度、スコア4をつけた外部支援員は37.5%で昨年度より20.8%高くなった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア4をつけた生徒は27.8%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は47.2%で生徒より19.4%高くなった。ちなみに昨年度、スコア4をつけた外部支援員は42.9%で昨年度より4.3%高くなった。

この結果から、外部支援員からも「提案日本の選択」課題研究活動は(a)創造的思考力および(b)批判的・論理的思考力の育成に効果があり、しかも毎年これらの力は向上していると判断できる。

最後に「3年間のSGH課題研究を振り返り、何が最もかわったか」という質問に対して、「提案日本の選択」選択生徒で、「色々なことに目を向けられるようになり、視野が広がった」、「日本のみならず世界での出来事に興味を持ち、自分から進んで調べようになった」等、物事を多角的かつグローバルな視点で考える力がついたと回答した生徒が19人中8人いた。また、「プレゼン能力が向上した」と回答した生徒が19人中5人いた。特に、「物事に対して見直しを徹底するようになった」という回答に象徴されるように、課題研究活動を通して自分の活動や成果を振り返り分析を行うことができようになった。つまり、「提案日本の選択」課題研究活動は、生徒のメタ認知を高める効果があったといえる。

(3) SGH 中間評価に対する対応状況と改善策

SGH 中間評価では、「なお、『英語を用いて何かをする』事案は詳細な計画やリフレクションがあるが、課題設定とその取組内容の深まりについては、通り一遍の感があるためこの点は改善が望まれる。」という指摘を受けた。この指摘を受け、校内のSGH推進委員会で審議し次の改善策を立案し実施した。

「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」を実施し、中学生を対象に英語で課題研究活動の成果を報告した。

「SGH プレゼンテーション@国際交流セミナー」を実施し、兵庫県立大学の留学生と英語でプレゼンテーションおよびディスカッションする機会を設け、課題研究活動を進める契機とするとともに、英語力の向上に努めた。

7 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

1年次および2年次における総合的な学習(探究)の時間(C.C.C.)において、課題研究活動に取り組んだ。特に1年次の総合的な探究の時間において、ディベート課題研究活動と「移民マップ」課題研究活動に取り組み、生徒の創造的思考力、批判的思考力および論理的思考力、異文化理解の向上を目指した。また、2年次に学校設定科目「言語技術」、3年次に学校設定科目「提案日本の選択」を設置し、課題研究活動の成果を最終的に個人論文にまとめた。

カンボジア、ベトナム、タイ、フィリピンでフィールドワークを行い、移動労働の実態について調査を行った。また、国内でも姫路の企業および大阪府池田市の特別養護老人ホームにてフィールドワークを行い、日本で働く外国人労働の現状を調査した。これらの調査を学校設定科目「提案日本の選択」で個人論文にまとめた。移民政策学会と連携し、学会で生徒が継続して研究成果の報告を行ってきた。

(2) 高大接続の状況について

関西学院大学と連携し、ディベート課題研究活動では、本校の授業に大学の教員や大学院生に参加していただき生徒の活動を直接支援していただいている。また、今年度から関西学院大学 WMLC の連携校としてスタディサプリによる大学の授業を受講している。

次に、今年度より兵庫県による国際力強化モデル校事業として兵庫県立大学と連携し、その専門的な教育資源を活用した発展的な学習を通して、高校段階から高度な英語力と国際的視野を育み、国際化に対応した特色づくりを推進している。将来的には、大学の単位履修制度の設置を予定している。

その他、甲南大学とは課題研究活動発表会の運営を中心に連携し、本校は甲南大学リサーチフェスタの立ち上げに携わり、現在も協働して継続的に課題研究活動を進めている。

大阪大学、立命館大学、神戸市外国語大学とは発表会やスタディツアーで継続的に本校の課題研究活動に支援をいただいている。

(3) 生徒の変化について

本校は課題研究活動に関するルーブリックを作成し、創造的思考力、批判的思考力および論理的思考力、異文化理解の向上を目指してきた。3年次まで課題研究活動に取り組んできた学校設定科目「提案日本の選択」の選択生徒では、創造的思考力でスコア4をつけた生徒が2017年度は20.8%に対し、2019年度は38.9%で18.1%向上した。次に、学校設定科目「提案日本の選択」の選択生徒で、異文化理解でスコア4をつけた生徒が2017年度は37.5%に対し、2019年度は44.4%で6.9%向上した。次に生徒全員をみると、批判的思考力および論理的思考力でスコア4または3をつけた生徒が2017年度は47.5%に対し、2019年度は50%で2.5%向上した。

結論として、本校で3年間の課題研究活動を通して創造的思考力および異文化理解の向上が図られた。また、生徒全員が3年間の課題研究活動を通して批判的思考力および論理的思考力を向上することができた。

このことは、校外の発表会における受賞数にも表れている。2017年度は受賞数0に対し、2018年度は3つ、2019年度は5つの賞を獲得した。本校の課題研究活動が深化し、生徒の力が向上したことがわかる。

(4) 教員の変化について

まず課題研究活動に携わる教員数が増加した。具体的には2016年度は総合的な学習の時間を担当する教員はのべ23人であったのに対して、2019年度は総合的な学習(探究)の時間にのべ28人、学校設定科目「提案日本の選択」に4人、のべ32人の教員が課題研究活動に携わっている。本校の教員数は31人であり、ほぼ全員が課題研究活動に携わる体制を構築することができた。

特筆すべきは、今年度、SGH指定終了後の課題研究活動のあり方を検討するために教員が自主的にワーキンググループを結成し、毎週集まって今後の課題研究活動の企画運営を立案している。

(5) 学校における他の要素の変化について

SGH指定以来、本校の受験者数は増加した。指定前の平成27年度入試の受験者数は140人、指定後の平成28年度入試の受験者数は171人、平成29年度は130人、平成30年度は150人、平成31年度は175人、令和2年度は175人であった。倍率にすると、指定前の平成27年度入試は1.17倍に対して、指定後の令和2年度入試は1.46倍であった。

また、本校では年に3回、主に中学生および保護者に対してオープンハイスクールを実施している。2015年度のオープンハイスクールに参加した生徒・保護者数は合計902人、2016年度は916人、2017年度は1,063人、2018年度は1,128人、2019年度は1,183人であった。この5年間で281人増加した。

以上のことから、SGH指定後、兵庫県下の中学生や保護者の本校への関心や期待が高まったことがわかる。

(6) 課題や問題点について

学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が44.2%であった。昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が50.5%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が6.3%低かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒でスコア4または3をつけた生徒は41.8%であった。一方、昨年度の3年次生(13回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が44.3%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が2.5%低かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒は60.5%であった。これに対して、昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた生徒は76.3%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が15.8%低かった。

この結果から、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒が昨年度よりも(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解のすべての力が昨年度より低下した。今後は、学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動の成果が、学校設定科目「提案日本の選択」を選択していない生徒にも波及できるよう普段の取り組みを改善していくことが課題といえる。

(7) 今後の持続可能性について

2年次全員を対象に実施している海外研修は継続して行う。訪問先は、イギリス、カナダ、アメリカ合衆国を予定している。新たに2020年度より西オーストラリア州海外研修を実施する。1・2年次生20~30人を対象に西オーストラリア州のパスで研修を行う。

管理機関である兵庫県教育委員会による兵庫県立大学との高大接続改革推進事業は継続して実施する。2020年度より課題探究能力、高度な英語力、幅広い国際的教養の習得をめざした「グローバル・アントレプレナー」等の3つの講座を立ち上げる。

移民政策学会との連携を継続し、課題研究活動を実施する。具体的には移民政策学会における本校生の課題研究成果の発表を継続して行う。

最後に、総合的な探究の時間(C.C.C.)におけるディベート課題研究活動と「移民マップ」の成果を継承したポスター作成は継続して取り組む。また、学校設定科目「言語技術」および「提案日本の選択」における課題研究論文作成も継続して行う。

実施報告書

1 SGH 構想調書の概要

指定期間	ふりがな	ひょうごけんりつこくさいこうとうがっこう				所在都道府県	兵庫県
27～31	学校名	兵庫県立国際高等学校					
対象学科名	対象とする生徒数					学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	国際科 総在籍者数 351名	
国際科	118	116	19		253		
研究開発構想名	移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト						
研究開発の概要	移民研究の上に今日的な国内問題の学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての日本の未来の選択肢を導き出し提案する課題研究を実施し、グローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成する。						
研究開発の内容等	- 1 全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>本格的な多文化共生社会の到来により、私たちは国際問題と国内課題を一体的に取り扱わなければならない。共生社会に生じる課題や困難を克服し、この国を世界の人々が共に生きる豊かな場所として発展させる役割を担うグローバル・リーダーの育成を目指す。国際高校が目指すグローバル・リーダーとは、多文化を受容し、自ら発信し、社会に貢献できる人材のことである。多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟にとらえ、未来に向けて建設的な考え方ができるグローバル・リーダーとしての資質を培うことを目的とする。</p> <p>この目的のため、国を越え人々が移り住む国際社会の重要側面である「移民」に焦点を当て、“安全に、幸せに暮らす”という生活に根ざした視点から国際問題の諸相に迫るとともに、国内問題に視点を移し、この国の可能性、役割、ニーズ等を取り出し、未来の選択肢を提案する課題研究を実施し、社会に発信することを目標とする。</p> <p>課題研究の過程で「世界移民マップ」を作成し、日本における移民マップ研究のハブ校を目指す。そして、これらを進める教育活動をプログラム化し、成果を評価する手法と合わせて研究開発する。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>開校以来12年の教育活動を通して、国際貢献や世界を志向する意識の醸成と高い英語力の育成が達成できている。これに、グローバル・リーダー育成の要素を加える教育プログラムを本校において開発するための仮説は以下である：</p> <p>「人はなぜ国を越えて移り住むのか」の問いに始まり、国際問題と国内課題を結びつけて研究を進め、その先にこの国の選択肢を描く課題研究を通して、グローバル社会の諸課題を生徒のそばに引き寄せ、知識意欲と継続的な自己開発意欲を醸成する。異文化理解を重視する教育方針、外国籍・多重国籍の生徒の在籍、20か国以上の国籍の児童生徒が学ぶ兵庫県立芦屋国際中等教育学校との施設の供用、など他にない学習環境のもと、この環境に則した研究テーマを掲げることで、学校全体が国際科である強みを生かした生徒総がかりの活動を展開し、リーダー育成につながる厚みのある人材層と知識基盤を築く。</p> <p>「世界移民マップ」作成の過程で、膨大な英語の情報源から有効なデータを探し当てる力、海外の交流校や関係団体と交信する力、データを集約して有効な情報を構築する力を育てる。同時に、マクロ的な世界観の醸成を図る。</p> <p>6つの第二外国語、「外国語としての日本語」等の言語に関する授業に重点を置く中、言語技術の習得により、論理的な思考力と言語活用力を強化する。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>SGH課題研究発表会を開催し、保護者、地域住民、教育関係者に公開する。SGH指定校と「提案日本の選択」の発表内容を共有し、提案の価値を高める。ホームページ、研究報告冊子、オープンハイスクール等を通して広く公開する。</p>					

<p style="text-align: center;">- 2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 関西学院大学の国際学部、社会学部、総合政策学部との連携を軸に以下を進める。 【目的】 移民研究を通して、日本の未来の選択肢を提案する。 【導入】 「人はなぜ国を越えて移り住むのか」を始まりの問いとし、「安全で幸福な生活」を求める人々の素朴な願いを生徒の日常と比較させる。[基調講演、グループ討議] 【学習】 「移り住む」諸形態をその理由と関連付け、歴史上または現存する課題を調査する。(強制：奴隷貿易、難民：パレスチナ、ミャンマー、スーダン、雇用：米国、欧州、アジア、要請：企業戦略、国家ニーズ、など) [大学教員講義・指導、協力企業への訪問調査・講義、発表会による相互学習] 【調査】 各国の人の流出と受入れの実態を調査して「世界移民マップ」を作成、同時に移民の背景と課題を抽出する。[グループ研究、大学教員指導、海外交流校連携] 【体験】 海外交流校を訪問、課題研究を共有し、意見交換や情報収集をする。ホームステイを通して異文化を実体験する。[5泊7日の海外研修、4泊ホームステイ] 【研究】 移民研究の成果を基盤に国内課題に着眼、両者を総合して、世界の人々が生きる場所として発展するための日本の選択肢を考察し論文としてまとめる。学校設定科目の学習成果を活用することで、研究内容の深化を促進する。 [各自研究、大学各学部教員による指導、下級生への成果還元、辻説法] 【発表】 「提案日本の選択」として論文をまとめ、発表する。 [SGH課題研究発表会、研究支援者による評価、SGH指定校との共有]</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 【1期】 1年次1、2学期に全生徒が導入、学習、調査を実施する。並行して、調査、研究に必要な基本的スキルの育成を図る。世界の諸課題とその解決に携わる人々、大学での研究について学習し、進路、高等教育への意識付けを行う。 [科目「社会と情報」と連携を図りつつ、「総合的な探求の時間」2単位をSGH課題研究として実施する] 【2期】 1年次3学期から2年次2学期に全生徒が海外研修と連動して実施する。移民研究を進める班と日本の紹介と外国から見た日本を調査する班に分かれて交流校との共同学習を進める。[総合的な学習の時間1単位をSGH課題研究として実施する] 【3期】 2年次3学期から3年次2学期に、グローバル・リーダー・コース(GLC)選択生徒20名が実施する。選択する学校設定科目と関連して課題設定し、全生徒で築いてきた移民研究の成果をもとに、日本の選択肢を研究し論文としてまとめる。この間、下級生の課題研究に参加し研究成果を下級生指導に活用する。 [2016年度に3年次生を対象とした「提案日本の選択」科目を開設] 【検証】 「パフォーマンス評価」を活用、生徒の自己評価による自律した学習者の育成を図る。英語教育のCan-Doリスト活用実績を参照し、課題研究への拡大展開を図る。教育評価を専門とする大学研究員と共同で評価法を開発する。</p>
<p style="text-align: center;">- 3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 【言語技術習得】 世界基準の言語教育である「言語技術」習得を目指した研究開発を行う。国語教育に言語技術を導入し、ロジックの「型」を学びながら、読解、対話、説明、報告、記録、議論、論文作成を行う。また、国語版Can-Doリストを作成し活用する。英語教育は、Can-Doリストを活用した授業改善を継続し、連携大学等によるスピーチ、プレゼンテーション等の指導を受ける。[2016年度学校設定科目として選択科目「言語技術」を開講] 【議論創出空間】 特徴ある幅広い中央廊下を、生徒の議論が生まれる相互学習空間とする。GLC選択生徒が分担して、定期的に課題研究のテーマに関する「昼休み辻説法」(公開プレゼンテーション)を行う。(中央廊下は、県立芦屋国際中等教育学校との共用空間)</p>

実施報告書

2 2019年度 スーパーグローバルハイスクール課題研究活動の実施状況

[対象]兵庫県立国際高等学校平成 29～31 年度入学生(1 年次 17 回生 118 人、2 年次生 116 人、3 年次生 117 人)

No	実施時期	内容	備考(実施場所等)
1	4 月 15 日(月)	SGH 課題研究に関するガイダンス	1 年次生(社会科教室)
2	4 月 22 日(月)	SGH 基調講演 大阪大学 名誉教授 津田 守 氏	1 年次生(国際交流ホール)
3	5 月 13 日(月)	ディベート課題研究活動 全体ガイダンス	1 年次生(社会科教室)
4	5 月 20 日(月)	ディベート課題研究活動	1 年次生(各 HR 教室など)
5	5 月 24 日(金)	フィリピンスタディツアー2018 報告会	1,2 年次生(体育館)
6	5 月 25 日(土) 26 日(日)	スタディツアー@移民政策学会 2019 年度年次大会	2,3 年次生(立教大学)
7	5 月 27 日(月)	ディベート課題研究活動	1 年次生(各 HR 教室など)
8	6 月 1 日(土) 2 日(日)	スタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム東京 2019	1～3 年次生(日本教育会館、東京都千代田区)
9	6 月 3 日(月)	ディベート課題研究活動	1 年次生(各 HR 教室など)
10	6 月 7 日(金)	第 1 回「昼休み辻説法」 ディベート	1,2 年次生(PC ルーム)
11	6 月 10 日(月)	ディベート課題研究活動	1 年次生(各 HR 教室など)
12	6 月 17 日(月)	ディベート課題研究活動 予選	1 年次生(各 HR 教室など)
13	6 月 24 日(月)	ディベート課題研究活動 決勝	1 年次生(国際交流ホール)
14	7 月 1 日(月)	ディベート課題研究活動 まとめ	1 年次生(各 HR 教室など)
15	7 月 5 日(金)	プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校	2 年次生(西宮市立西宮浜中学校)
16	7 月 10 日(水)	カンボジアスタディツアー2019 選考 作文	(SQ ルーム) 放課後
17	7 月 11 日(木)	カンボジアスタディツアー2019 選考 面接	(PC 室・SQ ルーム) 放課後
18	7 月 12 日(金)	第 1 回 SGH 特別講演 UNHCR 特別顧問 滝澤三郎 氏	全年次生(体育館) 3,4 時間目
19	7 月 18 日(木)	スタディツアー@兵庫県立大学・神戸市外国語大学・立命館大学	1 年次生全員(各大学)
20	7 月 19 日(金)	第 1 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム) 放課後
21	7 月 23 日(火)	第 2 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム) 夏季休業中
22	7 月 31 日(水)	第 3 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム) 夏季休業中
23	8 月 1 日(木)	スタディツアー@関西学院大学×WWL	1,2 年次生(関西学院大学)
24	8 月 7 日(水)	第 4 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム) 夏季休業中
25	8 月 26 日(月)	フィールドワーク in 姫路 2019	1,2,3 年次生(サワダ精密株式会社・梶原鉄工所株式会社)
26	8 月 28 日(水)	第 5 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム) 夏季休業中
27	9 月 3 日(火)	第 6 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(SQ ルーム)
28	9 月 9 日(月)	「移民マップ」課題研究活動 講演会 1	1 年次生(国際交流ホール)
29	9 月 10 日(火)	第 7 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(PC ルーム)
30	9 月 21 日(土)	フィールドワーク in 六甲「灘わくわく会」	1,2 年次生(六甲地域福祉センター)
31	9 月 30 日(月)	「移民マップ」課題研究活動 講演会 2	1 年次生(国際交流ホール)
32	10 月 1 日(火)	カンボジアスタディツアー2019 保護者説明会	1 年次生(SQ ルーム)
33	10 月 7 日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1 年次生班別行動(各教室)
34	10 月 8 日(火)	第 8 回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1 年次生(PC ルーム)

35	10月18日(金)	第9回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会・結団式	1年次生(PCルーム)
36	10月21日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
37	10月21日(月)	第10回カンボジアスタディツアー2019 事前学習会	1年次生(PCルーム)
38	10月22日(火) ~26日(土)	カンボジアスタディツアー2019	1年次生(カンボジア、プノンペン・シュムリアップ)
39	10月28日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
40	11月7日(木)	SGH 特別講演事前学習	全年次クラス講義(各教室)
41	11月11日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
42	11月14日(木)	第2回 SGH 特別講演 明治大学 教授 山脇啓造氏	全年次生(体育館) 6,7時間目
43	11月16日(土) 17日(日)	スタディツアー@国際開発学会&人間の安全保障学会2019 共催大会	2年次生(東京大学駒場キャンパス)
44	11月18日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
45	11月25日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
46	12月2日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
47	12月7日(土)	スタディツアー@移民政策学会2019年度冬季大会	2年次生(長崎大学)
48	12月18日(水)	SGH 課題研究最終発表会	全年次生(芦屋ルナホール)
49	12月18日(水)	SGH プレゼンテーション@国際交流セミナー	全年次生(芦屋ルナホール)
50	12月22日(日)	甲南大学リサーチ・フェスタ2019	全年次生(甲南大学)
51	12月22日(日)	全国高校生フォーラム2019	2年次生(東京国際フォーラム)
52	1月15日(水)	第2回「昼休み辻説法」論文課題研究活動	2,3年次生(中央廊下)
53	1月16日(木)	「移民マップ」課題研究活動 発表会	1年次生(各教室)
54	1月20日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
55	1月25日(土)	SGH 高槻高等学校第2回グローバルヘルス高校生フォーラム	3年次生(高槻高等学校)
56	1月27日(月)	「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル2020」事前学習	1年次生(社会科教室)
57	2月1日(土)	「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル2020」	1年次生(扇町カンテレスクウェア)
58	2月3日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
59	2月8日(土)	SGH フィールドワーク in 池田2020	1,2年次生(池田市特別養護老人ホーム「ポプラ」)
60	2月10日(月)	第7回高校生「国際問題を考える日」	全年次生(神戸ファッションマート)
61	2月11日(火)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
62	2月24日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
63	3月21日(土) 中止	「SGH・WWL x 探究甲子園2020」(全国課題研究成果発表会)	1,2年次生(関西学院大学)

[備考] 第1回 SGH 企画推進委員会 2019年7月4日、第1回 SGH 運営指導委員会 2019年7月26日
第2回 SGH 企画推進委員会・運営指導委員会 2020年3月12日

【対象】 兵庫県立国際高等学校平成30年度入学生(2年次16回生116人)

実施時期	内容	備考(実施場所等)
4月 11日(木)	海外研修学校交流ガイダンス	
18日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別リサーチ, 小学校交流企画考案	
25日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別リサーチ, 小学校交流企画考案	
5月 9日(木)	海外研修 プレゼンテーションアウトライン作成, 小学校交流小道具作成	
16日(木)	海外研修 プレゼンテーションアウトライン作成, 小学校交流小道具作成	
24日(金)	フィリピンスタディツアー報告会	体育館
25日(土), 26日(日)	SGHスタディツアー@移民政策学会2019 年次大会	2,3年次生(立教大学)
30日(木)	海外研修 プレゼンテーションPP・原稿作成, 小学校交流日本語デモンストレーション練習	
6月 1日(土), 2日(日)	SGHスタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム 東京2019	1~3年次生(日本教育会館)
6日(木)	海外研修 プレゼンテーション発表内容紹介, 小学校交流日本語デモンストレーション	
20日(木)	海外研修 プレゼンテーションPP・原稿作成, 小学校交流小道具作成	
27日(木)	海外研修 プレゼンテーションPP・原稿作成, 小学校交流小道具作成	
7月 5日(金)	SGHプレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校	2年次生
12日(金)	SGH特別講演 UNHCR特別顧問 滝澤三郎氏	全年次生(体育館)
16日(火), 18日(水)	海外研修 プレゼンテーションPP・原稿作成, 小学校交流英語デモンストレーション練習	
22日(月)	国際交流セミナー	
8月 1日(木)	SGHスタディツアー@関西学院大学(WWL)	1, 2年次生
9月 2日(月)	海外研修 プレゼンテーション発表予行	
5日(木)	海外研修 プレゼンテーション発表, 小学校交流英語デモンストレーション	
12日(木)	海外研修 プレゼンテーション修正, 小学校交流企画修正	
21日(土)	スタディツアーin六甲「日本語教室 蕪わくわく会」	1, 2年次生(六甲地域福祉センター)
26日(木)	海外研修 保護者説明会(保護者対象プレゼンテーション発表)	
10月 3日(木)	海外研修 プレゼンテーション・小学校交国別準備	
10日(木)	海外研修 プレゼンテーション・小学校交国別準備	
24日(木)	海外研修 プレゼンテーション・小学校交国別準備	
31日(木)	海外研修 プレゼンテーション・小学校交国別準備	
11月 1日(金)	海外研修 結団式	
2日(土)~8日(金)	海外研修 ※7日(火) 海外研修アンケート実施	イギリス・アメリカ・カナダ
14日(木)	SGH特別講演 明治大学教授 山脇啓造氏	
16日(土), 17日(日)	SGHスタディツアー@国際開発会議&人間の安全保障学会2019	2年次生(東京大学)
21日(木)	海外研修 感想文作成	
28日(木)	海外研修 感想文作成	
12月 7日(土)	SGHスタディツアー@移民政策学会2019冬季大会	1, 2年次生(長崎大学)
13日(金)~17日(火)	海外研修 感想文PC入力	
18日(水)	SGH課題研究最終発表会・海外研修報告会	全年次(芦屋ルナホール)
22日(日)	「リサーチフェスタ」甲南大学課題研究発表会	1~3年次生(甲南大学)
	SGH全国高校生フォーラム	2年次生(東京国際フォーラム)
1月 9日(木)	海外研修 研修報告全体ガイダンス	
16日(木)	GTEC speaking test	
23日(木)	海外研修 研修報告作成	
25日(土)	SGHフィールドワーク in 池田2020	1, 2年次生(池田市特別養護老人ホーム「ポプラ」)
30日(木)	海外研修 研修報告作成	
2月 6日(木)	海外研修 研修報告作成	
13日(木)	海外研修 研修報告作成	
20日(木)	海外研修 研修報告作成	
3月 21日(土)	「SGH・WWL×探求甲子園2019」(全国課題研究成果発表会)	1, 2年次生(関西学院大学)

実施報告書

3 本校における取組体制

目的

校内に次の組織を作り、各組織が互いに連携し学校全体での取組とすることで生徒の課題研究活動の充実を図ることを目標とする。

- 1) 運営指導委員会
- 2) 研究開発委員会 (企画推進委員会)
- 3) SGH校内推進委員会
- 4) 1年次C.C.C.担当グループ、2年次C.C.C.担当グループ
C.C.C.は本校における総合的な探求の時間の名称である。



課題研究活動における教員の支援

各委員会の概要

- 1) 運営指導委員以下
p.13に会議記録掲載
- 2) 研究開発委員会 (企画推進委員会)
p.14に会議記録掲載
- 3) SGH校内推進委員会
課題研究活動の企画と運営について協議。本校の教員16人で構成されており、定期的に委員会を開催した。内容は、それぞれの課題研究活動の報告と検証である。本年度も昨年度同様にSGH校内推進委員会の全体会の回数を減らし、一方で校内推進委員会の担当者が定期的に1年次の年次会議および2年次の年次会議に出席し、その中でSGH課題研究活動の企画運営の方針や授業の進め方および指導方法について説明を行ったうえで協議し、C.C.C. (総合的な探求の時間) の運営を行った。
- 4) 1年次C.C.C.担当グループ、2年次C.C.C.担当グループ
生徒の課題研究活動の指導およびファシリテーションを行う。1年次C.C.C.担当グループは教員9人で構成されている。2018年度よりC.C.C.の時間を週2時間に増やしたので、のべ18人の教員が1年次のC.C.C.の授業に携わった。ディベートおよび「移民マップ」課題研究活動において、1人の教員が1つの生徒グループを担当し、ファシリテーターとして生徒の課題研究活動を支援した。
2年次C.C.C.担当グループは教員10人とALT3人で構成されている。生徒を8班に編成し、それぞれ訪問国(アメリカ合衆国、カナダ、イギリス)ごとに移民研究に関する調査や日本紹介などの課題研究活動に取り組み、各班に担当教員が付きファシリテーターとして生徒の課題研究活動を支援した。

本年度の課題研究の方針

2018年度まで課題研究活動を通して、創造的思考力と批判的・論理的思考力の育成に焦点を当てて取り組んできた結果、これらの力の向上が図られ一定の成果をあげることができた。一方、学校設定科目「提案日本の選択」を選択している生徒の異文化理解の力は向上してないことがわかった。本校には他の国にルーツを持つ生徒が多く在籍し、本校の教育目標の一つである異文化理解の力の育成は必須である。そこで、今年度は異文化理解の力の向上を目指して、次の2点を軸に課題研究活動に取り組むことにした。

- 1) 学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動を通して、本校に在籍する他の国にルーツを持つ生徒に焦点を当てて、彼らがどのような困難を経験し、その困難を乗り越えてきたかを分析する。具体的にはエスノグラフィの手法を用いて調査分析を行うことにより論文を作成する。この論文を全校生に発表し成果を共有することで異文化理解の力の向上を目指す。
- 2) 全校生を対象とする特別講演会の講師として多文化共生の研究者である明治大学の山脇啓造氏を招聘し、多文化共生に関する講演を実施することで多文化共生に関する理解を深める契機とする。

成果

SGH校内推進委員会に関しては、今年度は16人で構成した。これは31人の教員数の半数にあたる。学校設定科目「提案日本の選択」を含め生徒の課題研究に係る教員はのべ32人であり、本校の教員31人の全員がSGHの運営に関わり、本年度も学校全体の取組として課題研究活動が実施できた。

2019年度SGH校内推進委員会の役割分担

1 役割分担の内容

- 「渉外担当」 文部科学省、企画推進委員、運営指導委員、および外部支援者との交渉
- 「ディベート担当」 ディベートの企画・運営
- 「移民マップ担当」 移民マップ作成の企画・運営
- 「海外フィールドワーク担当」 海外フィールドワークの企画・運営
- 「プロジェクトチーム担当」 プロジェクトチームメンバーの指導(例)校外の課題研究活動発表会の企画・運営および生徒の指導など
- 「国内スタディツアー担当」 国内の大学訪問等、スタディツアーの企画・運営
- 「国内フィールドワーク担当」 国内の企業訪問等、フィールドワークの企画・運営
- 「評価担当」 ポートフォリオおよびループリックの作成および運用、評価の実施・分析
- 「ホームページ担当」 本校ホームページに SGH 課題研究活動の報告を掲載
- 「講演会担当」 講演会の企画・運営、講師との打ち合わせ、会場準備(垂れ幕作成を含む)
- 「提案日本の選択」 論文作成の指導および発表の指導、論文の発信
- 「移民政策学会」 移民政策学会でのスタディツアーの企画・運営
- 「最終発表会」 SGH 最終発表会の企画・運営
- 「報告書等担当」 文部科学省等に提出する報告書、論文集、成果集等の作成

2 SGH 校内推進委員会の役割分担

- 「渉外担当」 教頭・前川・渡辺
- 「ディベート担当」 前川・渡辺・山崎・坂田・桂
- 「移民マップ担当」 渡辺・前川・山崎・坂田・桂
- 「海外フィールドワーク担当」 教頭・前川・桂・山崎・坂田・高木・渡辺
- 「プロジェクトチーム担当」 前川・渡辺・坂田・池本・向江
- 「国内スタディツアー担当」 前川・渡辺・坂田・池本・向江・森田・坂部
- 「国内フィールドワーク担当」 前川・渡辺・坂田・池本・向江・森田・坂部
- 「評価担当」 前川・牧野・丸山・坂部・長村・山崎・上林・奥田
- 「ホームページ担当」 高木・丸山
- 「講演会担当」 前川・山崎・上林・奥田・坂部・丸山・向江・森田・高木・桂
- 「提案日本の選択」 前川・渡辺・奥田・向江
- 「移民政策学会」 前川・坂田・池本・向江・森田・坂部・渡辺
- 「最終発表会」 前川・山崎・上林・奥田・長村・坂部・高木・森田・向江・牧野・丸山・桂
- 「報告書等担当」 前川・渡辺・向江・高木・森田・坂部

SGH 課題研究活動の円滑な運営のため、SGH 校内推進委員会を定期的を実施する

3 備考

2019 年度 SGH 校内推進委員会メンバー

前川(委員長)・渡辺(副委員長)・教頭・桂・牧野・高木・丸山・長村・坂部・森田・山崎・上林・奥田・坂田・池本・向江 以上 16 人

実施報告書

4 「第1回 SGH 運営指導委員会」記録

日程 令和元年7月26日(水)

出席者 芦屋市教育委員会
教育長 福岡 憲助
神戸大学大学院
国際文化学研究科
教授 岡田 浩樹
兵庫県教育委員会事務局
高校教育課主任指導主事
辻 登志雄
国際高等学校
校長 事務長
前川 裕史
渡辺 伸勝
森田 豊考

1 学校長より

2 委員選出

3 開会挨拶(委員長)

4 自己紹介

5 協議事項

本年度のSGH課題研究
推進計画について
これまでのSGH課題研
究活動の取り組みにつ
いて
SGH事業指定終了後
について

質疑応答

岡田委員:このSGHは文科省の
政策の中であるという中で、
この報告をしたときに、文科
省からどのような質問と要
望が出たのか。

前川:文科省の職員から言われ
たのは一言だけで、「そもそ
も移民研究をやられている
けども、そもそも論で誰も中
学生や職員は移民研究に
ついて知らないですよ。そ
れをそもそもどうやって始
めたのですか」だけで、質
問に対する回答の機会を
与えられなかった。

岡田委員:SGHをしたことの実績
をもとに次の展開をするとき
に、その説明をした方が

よい。新指導要領の高校の
地理と現代社会、特に地理
の改変のところは外国人の
問題が入ってきている。文
科省としては、過程の変更
に伴うところを受けて研究し
ているという説明が欲し
かったのかもしれない。

福岡委員:国際高校に入学した
ら、これを必ずやる。海外
研修とセットとしてやる、
というもの。国際高校生と
して、求める人物像、育
てたい人物像を明白にし
ておく。今までは文科省
からお金ももらえていた
から海外に行くことが
出来ていた。保護者に
国際高校では、このよ
うな生徒を育てるので、
これくらいのお金が必要
であるとか、アピールす
る要素として必要であ
るので、そのあたりを
視野に入れておけば、
継続的なものとなるの
ではないか。また、将来
の種まきとして、地域
の小学校の事業に参
加することが大事では
ないか。

福岡委員:高大連携に関して、
窓口や運営について、
大学側は負担にならない
のか。

岡田委員:高大連携の窓口は
広報委員会、広報委員
会は教育カリキュラム
に関係していない。だ
から、広報感覚になっ
ているところは否めな
い。そして、大学側と
して、高大連携、高
大接続はどのような形
が成功なのかイメージ
が持てない。また、高
大接続をすることによ
って、いい生徒が大学
に入学してくれると大
学側も一生懸命に行
うが、ほかの大学に
進学されると、大学
側も正直困る部分
があるので大変である。

福岡委員:私もそのあたりが
気になっているところ
である。以前に高大
接続で高校生に大学
の授業を受けさせ
に行っていたことが
ある。その

時は、広報だけでなく、
学部をあげて熱心にし
ていたが、国際高校
で高大接続を行って
いくときに、1年間
だけでとこではなく、
継続していくために
どうしていくのか
気になっている。

岡田委員:特に兵庫県という
か阪神間は大変である。
例えば、国公立大学
でも九州や四国では
地域密着で大学があ
るので、学生が地元
に残りたいというモチ
ベーションがあるが
阪神間は流動的であ
るので難しい。

岡田委員:ルーブリックが
個人個人の評価にな
っている。全ての生徒
がアントレプレナー
できるわけではなく、
それを支えたり、デー
タを集めたり、グル
ープでも評価できな
いか。ルーブリック
も一人一人の能力
向上も重要だが、
グループの活動を見
ての評価もあっても
よいのではないか。
グローバル化を考
えたときに、英語
力を強調しすぎない
ほうがよいのでは
ないかと思う。英
語力も必要だが、
その他の部分とい
うところを作らな
いと思う。地域の
貢献で、小学校や
中学校に行くこと
も良いが、高齢
者の方に研究した
ことを発表する
ことは大事では
ないか。世代を
超えた対話が
可能となる。

辻主任指導主事:どのような
生徒を育てるのか。移
民を勉強するだけ
ではないので、移
民を通していろ
んなことをする。
なぜ小学校に行
くのか。中学校
に行くのか。そ
こに行くとど
のような生徒
を育てたいの
か。それを
継続して常に
考えてほしい。

6 連絡事項等

7 閉会挨拶(副委員長)

実施報告書

5 「第1回 SGH 研究開発委員会 (企画推進委員会)」記録

日程 令和元年7月4日(木)
出席者 大阪大学国際教育交流センター
准教授 西村 謙一
姫路経営者協会
専務理事 村瀬 利浩
関西学院大学社会学部
教授 鳥羽 美鈴
社会デザイン学会
理事 佐野 敦子
神戸松蔭女子大学
助教授 大下 卓司
兵庫県教育委員会事務局
高校教育課主任指導主事
辻 登志雄
国際高等学校
校長 事務長
前川 裕史
渡辺 伸勝
森田 豊考

- 1 学校長より
- 2 開会挨拶 (委員長)
- 3 自己紹介
- 4 協議事項
本年度のSGH課題研究推進計画について
これまでのSGH課題研究活動の取り組みについて
SGH事業指定終了後について

質疑応答

西村委員: 移民マップの作成を初年度から行ってきて、生徒がいると積み重ねて来ているが、それをどのような形でまとめ上げるのか。フィードバックしながら改善点をさがすのか、移民マップそのものに関して成果をフラッシュアップしてどのような活動を考えているのか。

前川: 移民マップ作成にあたり、生徒に身に付けさせたい能力の1つが多面的理解。それを踏まえて進めてきたが、今後のテーマは移民に特化しない方がよい。本校の教育目標である「多文化共生」にかかわるようなテーマで、なおかつこれまでの移民マップで培ってきたものを1つのポスターという形で発表できればと考えている。

西村委員: 移民マップを1年次で作るので、それをベースとして自分自身の物事の見方、多角的な見方をさらに発展させていくような活動を継続してはどうか。その成果を2年次で形作り、3年次で論文を書く人は論文の形で出てくる。そうでない人は、別の活動の中で物事を多角的に考え、エビデンスが重要であることが理解できたのであれば、それをベースにしてほかの活動に生かす。そのようなことが出来たら良いのではないかと。

鳥羽委員: 移民研究につなげるかつ拡大するようなテーマとして「外国人」にすると、もうすこし広がるのではないかと。多くの学生は移民についてピンとこないが外国人問題になると、ごみの問題など見聞きしている学生も増えている。これまでの研究を生かしながらすすめるのであれば、観光客や技能実習生といった「外国人」にテーマを変え、もしくは移民・外国人問題という形にしてみてもどうか。

佐野委員: 研究発表会に卒業生を呼んで、タテのつながりを作ることはできないか。タテのつながりを作ることで先輩の大学生の知見を得て、循環するような試みができるか。そして、その延長で多文化共生ということも含めていて、外国人とか一時的に滞在している人とかを巻き込んでいけたら良いと思う。

西村委員: これまで、研究したものを学会で発表してきたが、今後の継続として今までやってきたことを続けていけば、学会そのものも盛り上がる。加えて、研究者の裾野も広がるし、良いことであると思うが、将来の見通しは、どのように考えているのか。

前川: 学会の参加は生徒にとっても学校にとっても大きな役割を果たしていると考えている。これまでの成果は、移民政策学会の支援なくしてはならない。生徒の成長を考える上でも、個人的には学会発表は続けていきたいと考えている。

大下委員: 今後の研究について、移民研究からテーマを広くするとの意見があったが、テーマを広げるとすると、移民政策学会はもろちんのこと、近場での学会も多くあり、1つの学会でも様々な発表がある。最初の関係作りは難しいが、アプローチをかけていくことは良いことだと思う。意見の中で外国人というテーマがあったが、共生ということになると、コミュニティなどの問題が出てくると思う。移民の人が入ってくるとコミュニティはどう変わるのかというテーマにつなげられるので、そのような点から、学会も1つだけでなく、複数の学会にアプローチがかけられるので継続性は保たれるのではないかと考える。また、卒業生も巻き込んでという意見があったが、今後の案として、生徒の追跡調査みたいなものもやってみると良いのではないかと。学校と生徒の共同研究としてまとめていけば、教育研究としての蓄積が出てくるのではないかと。

大下委員: 今後のキーワードとして外国人という言葉が出てきたが、日本人というテーマも入れてほしい。改めて、自分たちの目で外国人というのを考えるのと同じように日本人に焦点を当てて考えることで、全体がもう少し分かりやすくなるかと思う。

佐野委員: グローバルの問題の中に入るかは分からないが、社会学を入れておいた方がいいのではないかと。理由としては、グローバルを考える上で海外では、社会学がベースになっている人が多いので入れておくべきだと考える。また、背景を知るためには、社会学が非常に良くて、海外の方と話をしている中、社会学的な話もあり、カリキュラムにも社会学が入っている。ゆえに、見せ方はグローバルビジネスなので経営学や経済学をメインに持ってくるのは仕方がないが、社会背景を考えるとということでは、社会学というかそのところの知見が必要なのではないかと考える。移民社会学をずっとやってきたと思うので、社会学を入れておいた方がよいと思う。

西村委員: 社会学的な知見とか思考方法の授業はグローバルアントレプレナーでよいのか。

渡辺: 1年次のC.C.C.の授業の何単元かの中に入れる必要があると考えている。

鳥羽委員: 「学」をつけなければならないのか。

社会学となると結構狭くなってしまふ。移民研究をされていたのは制度だと思うが、それは政治学に関わってくる。むしろ「学」を入れずに、地域研究とか外国人問題のようにした方がよいのではないかと。

西村委員: 今年度は、大学の授業に参加するのに加えて、カリキュラム開発が主な活動でそれを来年度以降運用していくことではないか。

渡辺: 今年中にシラバスを完成して、運用は来年度と考えている。

西村委員: これまで、SGHとは別に修学旅行を海外研修に変えて行ってきた。また、海外の生徒を学校に迎えたり、逆に少人数ではあるが海外に短期派遣したりしている。そのようなSGH以外の普段の活動の中にこれまでのSGHの活動で取り込めそうなものを取り組むとか、そのようなことをされているのか。

前川: 海外研修の中では、聞き取り調査という課題研究はしてきた。SGHの活動を従来の学校の活動の中に反映させるかは今後の課題であると考えている。

西村委員: 移民だけでなく概念的にも外国人にまでテーマを広げていくということであれば、移民に特化する形での探究活動に限らなくてもよいのではないかと。これまでの海外研修先は移民受けが多い国で、移民受けに関する色々な問題関心をもとに生徒は研修の中で、色々な探索をしてきたと思う。そういうことに加えて外国人と日本人というような分け方がいかにどうかは別として、どのように文化的背景が違う人々と交流するのかがといったところの観点にまで問題関心を広げて、具体的な海外研修活動の中に落とし込めることができれば良いのではないかと。

佐野委員: society5.0で経団連は、SDGsと組み合わせるようになってきている。その中で、例えばグローバル型を考えたときに、SDGsの推進と何かを組み合わせるような形でできないか。SDGsの後半目標に地域創生などが入ってくるので、そこが何か上手く力を握って、例えばダイバーシティとか社会包摂などと上手く絡めていければよいのではないかと。中学校の学習指導要領の一番最後のところが持続可能な開発で、公民の範囲の中にSDGsが扱われるようになったので、その発展形として高校では、具体的にSDGsの推進について、どのように進めていくかを具体的に高校の中で取り組んでいくということも作戦の1つとして考えられるのではないかと。

辻主任指導主事: SGHが5年で終了するが、その後の事業として地域との協同による高等学校教育改革推進事業がある。その中に3つの型があり、国際高校が今後の事業として進めていくのであれば、グローバル型が適しているのではないかと。また、兵庫県でも兵庫スーパーハイスクールという事業もあり、国際高校が今後どのような道に進むのか関係の先生方と相談をしていきたいと考えている。

5 その他

6 開会挨拶

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(1) C.C.C.(総合的な探求の時間)におけるディベート課題研究活動

目標

- ・移民研究に役立てる。
- ・日本の未来の選択肢に対して、考える契機とする。
- ・情報収集選択能力、協働性、批判的・論理的思考力、およびプレゼンテーション能力を養う。

対象学年

1 年次生 121 人

内容

- 1) 「ディベートについてのガイダンス」2 時間
- 2) 「ディベートに向けてグループ課題研究活動
～ 」8 時間
- 3) 「ディベート大会予選 1 および 2」2 時間
- 4) 「ディベート大会決勝」2 時間



ディベート大会決勝の様子

経緯

2016 年度のディベート決勝において、審査員の大学教員より「応答力」および「論理的思考力」の育成の必要性が指摘された。そこで、2017 年度より「応答力」の育成を目指してディベートに取り組んだ結果、ルーブリック評価では 2017 年度そして 2018 年度と「応答力」の向上が見られた。また、相手の論理に則したディベートができようになった。そこで、2019 年度は「論理的思考力」のさらなる向上を目指して取り組むことになった。

内容の詳細

今年度は「日本はアメリカ合衆国よりフランスの移民政策を取り入れるべきである」というテーマを設定した。昨年度、ディベート決勝において、特別審査員より共通教材は肯定側の立場で書かれており否定側には不利であったという指摘があった。これを受け肯定側・否定側ともに不利にならないテーマ設定をすべきであるという意見が SGH 校内推進委員会から出た。そこで、今年度、肯定側はフランスの移民政策を、否定側はアメリカの移民政策を取り上げ、それぞれメリットとデメリットを探し出すことをディベートの課題研究活動の軸にすることでお互いに不利にならないように配慮した。共通教材は、ミュリエル・ジョリヴェ著「移民と現代フランス - フランスは「住めば都」か」(2003 年、集英社新書)と西山隆行著「移民大国アメリカ」(2016 年、ちくま新書)の 2 冊として、全員が 2 冊を読むことで、フランスおよびアメリカ合衆国の移民政策のメリットとデメリットを探し出すことを課題研究活動の中心とした。

ガイダンスにおいて、今回のディベート学習の目的や意義、その方法等を説明した。なお、ディベートの目標については、ディベート用ルーブリックを生徒に示し、説明した。また、ディベート本番に向けての取り組み等のスケジュールを示した。

次に、各班の役割分担を決定した。班長・副班長を各 1 名、立論担当者を 2 名、質問担当者を 2 名、反論担当者を 2 名、結論担当者を 2 名とした。立論の根拠となる資料を 1 人 1 つずつ集めてくるように指示した。

今年度は立論となる根拠は、肯定側はミュリエル・ジョリヴェ著「移民と現代フランス - フランスは「住めば都」か」から、否定側は西山隆行著「移民大国アメリカ」から引用することにした。また、これら 2 冊の書籍を肯定側および否定側の全員が読むことで、生徒が相手の立論を予想しやすくし、相手の立論に則した質問および反論を構築することにつなげていくことを目標とした。また、根拠となる共通教材を用意することで、教員が資料を常に手元に置いておくことができ生徒の指導をしやすくなった。最終弁論は、立論を補強する根拠を探して構築させた。根拠として使用できる資料は次の通りとした。

- a) 書籍および文献
- b) 新聞記事

c) 論文

d) 公的な機関の資料 政府関係資料や国連関係資料

なお、班別の活動に先立ち、全体講義を行った。内容は、移民の定義、移民のカテゴリー(在留資格)、および基礎となるデータ収集の方法について教示した。具体的には、移民の定義は「通常の居住地以外の国に移動し、最低でも12か月間当該国に居住する人」(国際連合、1998年)とし、移民のカテゴリーは法務省入国管理局が定める「短期滞在」を除く24の「活動に基づく在留資格」とした。基礎となるデータは、e-statから政府の統計データを収集するように指示した。

まず、肯定側はミュリエル・ジョリヴェ著「移民と現代フランス - フランスは「住めば都」か」を読み、否定側は西山隆行著「移民大国アメリカ」を読み、各自で立論を作成した。次に班で各自が作成した立論を持ち寄り、班として立論の根拠を3つ作成した。

次に、肯定側が西山隆行著「移民大国アメリカ」を、否定側がミュリエル・ジョリヴェ著「移民と現代フランス - フランスは「住めば都」か」を読み、相手の立論を予想した。班で各自が作成した相手側の立論を持ち寄り、相手側の立論リストを作成した。続いて、班員で分担して相手側の立論リストに則した反論の根拠を探した。これらを班で持ち寄り、相手側のあらゆる立論の対しても対応できる反論を作成した。同時に、反論に結びつく質問を作成した。今年度はこの作業に多くの時間をかけた。最後に、自チームの立論を補強する根拠を探し、班で持ち寄り最終弁論を作成した。

ディベートの予選を2時間に分け、それぞれ3つの会場で行った。予選の対戦相手はくじ引きで決定した。会場ごとに、その日に対戦がない生徒20人から司会(1人)、タイムキーパー(1人)、集計係(2名)を決め、残り生徒16人と特別審査員として招いた関西学院大学大学院生1人がジャッジを行った。

決勝は予選で最もスコアが高かった肯定側チームと否定側チームとの対戦とした。対戦がない生徒100人から司会(1人)、タイムキーパー(1人)、集計係(2名)を決めた。残り生徒96人と特別審査員として招いた関西学院大学大学教員1人と兵庫県教育委員会人権教育課子ども多文化共生センター指導主事1人がジャッジを行った。ジャッジにはSGH課題研究活動のルーブリックを基礎に作成したディベート用ルーブリックを使用した。

結果、予選、決勝ともに難しいテーマと難解な共通教材に対して理解に努め立論を構築したことを評価していただいたとともに、反論と最終弁論も十分な資料を用意し相手に論に則してディベートが展開できていたと講評を受けた。

成果および成果の発信

ルーブリック評価の分析の結果、論理的思考力の指標となる調査力に関して、スコア4およびスコア3をつけた生徒は90.8%であった。特別審査員2人はスコア3をつけた。今年度は共通教材を2冊に増やしたことで生徒はこれらの教材から多岐にわたる様々な資料を収集することができた成果の結果といえる。成果は報告集にまとめ校外に配布し知識の共有を図った。

肯定側 1年1組A班

立論の根拠	根拠を裏付ける資料名
人口減少を抑制でき、生産年齢人口を増やすことができる。	ミュリエル・ジョリヴェ『移民と現代フランス—フランスは「住めば都」か—』鳥取絹子訳、集英社、2003年。
移民の公教育を保障する制度により、就労率が高くなり、経済が安定する。	中谷真憲「フランスの移民政策とそのディスカール」『産大法学』第42巻2号、2008-2009年、pp.153-196。
フランスの公的扶助の制度により、移民の最低限度の生活は保障され、社会の発展につながる。	ミュリエル・ジョリヴェ『移民と現代フランス—フランスは「住めば都」か—』鳥取絹子訳、集英社、2003年。

否定側 1年2組A班

立論の根拠	根拠を裏付ける資料名
アメリカには移民の子どもの教育を支援する制度がある。	山崎啓造「難民及び移民に関する国連サミット」『多文化共生の新时代(メルマガジン)』第19回、2016年10月26日。 https://www.jiam.jp/melmsaga/kyosel_newera/newcontents19.html 。
移民の勤労意欲を向上させる仕組みがある。	西山隆行『移民大国アメリカ』筑摩書房、2016年。
移民が個人・土地・州・国に財政的・経済的に好影響を与える。	米園科学医学アカデミー(2017)「移民による経済的・財政的影響(The Economic and Fiscal Consequences of Immigration)」 https://d279m997dpfwgl.cloudfront.net/wp/2016/09/0922immigrant-economics-full-report.pdf 。

ディベート大会予選 立論の例

<立論2>

フランスでの教育は無料で義務、また受入統合計画(CAI)の制度があるため外国人の最低限度の知識、その国の言葉を身につけることができ外国人の学力、技能が向上し、優秀な人材が増える。

■ 受入統合計画(CAI)とは
フランスで長年にわたり、生活するために最低限度必要な知識とフランス語能力を身につけることを目的とし、移入国であるフランスが移民に対して研修を実施し、移民はその研修を修めるという国と移民との間に結ばれる契約。

フランス本土における15歳以上65歳未満の年齢階層人口のうち、400万人が移民であった。これは、生産年齢人口の10%に相当するが、この比率は上昇傾向にある。(独立行政法人労働政策研究研修機構 2019)

ディベート大会決勝のパワーポイント例

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(2) C.C.C.(総合的な探求の時間)における「移民マップ」課題研究活動

目標

「移民マップ」作成の目的は、第一に現在世界でどのような人の移動が生じているかを地図にすることで可視化し理解を深めることである。第二に、地図化を端緒として、なぜ人の移動が生じるか原因について考察する手段とすることである。また、「移民マップ」の作成を通して、今後の研究に向けての基礎的な資質や能力を身につけることを活動の目標とする。具体的には次にあげる 3 つの資質・能力を身につける。

- 1) 情報を的確に理解し効果的に表現する力
- 2) 社会的事象について資料に基づき考察する力
- 3) 日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力

対象学年
1 年次生全員(122 人)

内容

- 1) 「移民マップについてのガイダンス」 1 時間
- 2) 「移民マップについてのグループ課題研究活動
～ 」 17 時間
- 3) 「移民マップ発表会」 1 時間



「移民マップ」発表会の様子

経緯と本年度の活動目的

2017 年度、生徒の「移民マップ」の考察について一部に論理の飛躍がみられた。これは 3 年次において「提案日本の選択」で生徒が作成した論文についても同様の論理の飛躍が見られた。そのため、2018 年度の「移民マップ」作成の目標を今後の研究に向けての基礎的な資質や能力を身につけるための活動とした。具体的には(a)情報を的確に理解し効果的に表現する力、(b)社会的事象について資料に基づき考察する力、(c)日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力の育成に焦点を絞ることにした。ルーブリック評価の結果、多面的理解でスコア 4 または 3 をつけた生徒は 94%であり 2017 年度より 1%向上した。また、課題であった論理的飛躍の解消には一定の効果があった。しかし、論理性のスコア 4 または 3 をつけた生徒は 90.9%で 2017 年度より 4%減少した。この結果を受け、校内推進委員会で今年度の「移民マップ」課題研究活動の目的を多面的理解力の向上とあわせて論理的思考力の向上を目指すこととした。具体的には、対象国をブラジルと日本の 2 か国に絞り、ブラジルと日本における人の移動の歴史を 3 つの時代に分け、その時代ごとに「移民マップ」を作成し、最終的にはブラジルと日本における 120 年間の人の動きがストーリーとして完結することで、生徒自身の研究が全体につながりとして反映されることで論理的思考力の育成につなげることを目指した。

内容の詳細

- 1) 「移民マップ」調査対象国および分担は次の通りとした。
 - A 班 「日本人ブラジル移民史 ～ 1908 年 - なぜ日本人はブラジルに移民したか」
(班員) 1 組の生徒全員
 - B 班 「日本人ブラジル移民史 1908 ～ 1980 年 - 日本人移民社会はブラジルでどのように発展したか」
(班員) 2 組の生徒全員
 - C 班 「日本人ブラジル移民史 1980 年～ - なぜ日系ブラジル人は日本で急増したのか」
(班員) 3 組の生徒全員
- 2) 取り組み方法は次の通りとした。
 - a) 各自で与えられたデータから必要な情報を収集し人口移動の推移グラフを作成する
 - b) 推移グラフを基に、人口移動の変化が顕著にわかる 3 つ以上の年代を取り上げ、それぞれ流線図を作成する。
 - c) 先行研究について学び、各自で移動の要因について考察を行う。
 - d) 各班で最も優れた人口推移グラフと流線図、および考察を選ぶ。
 - e) 各班で人口推移グラフおよび流線図をパソコンで作成する。

- f) 上記のグラフと図とともに、移動の要因についての考察をポスターにまとめる。
- 3) 留意事項は次の通りとした。
- マップの流線図について、人数は線の太さで表すこと。つまり人数が多いほど太い線で表す。
 - マップにおいて、人数は線の近くに明示すること。
 - マップにおいて移出の方向については で表すこと。
 - 移動の要因について、移出国のプッシュ要因と移入国のプル要因の両方に着目すること。
 - 移動の要因には、経済的な要因、政治的な要因、社会的な要因、歴史的な要因などがあり、このうちどのような要因で移動が生じたかを根拠に基づいて明らかにすること。
- 4) 講演会の実施
- 「移民マップ」作成に先立ち、ブラジルと日本の移民史について基本的な情報や知識を理解するために専門家による講演会を次のように2回実施した。
- 第1回「移民マップ」講演会**
 テーマ 「ブラジル・サンバ・移民研究 - ひとりの移民の歩いた道より - 」
 講師 人間文化研究機構 日本国際文化研究センター 根川 幸男 氏
 日時 2019年9月9日(月) 6,7時間目
 場所 国際交流ホール
 - 第2回「移民マップ」講演会**
 テーマ 「移民マップ作成にあたり - ブラジル移民 110年の流れ - 」
 講師 特定非営利活動法人地域文化計画 副理事長 中村 茂生 氏
 日時 2019年9月30日(月) 6,7時間目
 場所 国際交流ホール
- 5) 評価については次の通りとした。
- ポスターセッションを行い、プレゼンターを除いた生徒が他の班の評価を行う。
 - 評価はSGH 課題研究活動のルーブリックを基礎に作成した移民マップ用ルーブリックを使用する。

以上の要領で活動を行い、各班で移民マップのポスターを作成した。最後にポスターセッションを行い、お互いに評価を行った。評価は、a)表現力、b)多面的理解、c)論理性という3つ観点で行った。

成果および成果の発信

ルーブリック評価の集計結果の分析から、論理性でスコア4をつけた生徒は49.1%で昨年度より7.8%向上した。多面的理解でスコア4をつけた生徒は46.9%で昨年度より10.5%向上した。表現力でスコア4をつけた生徒は50.9%で昨年度より3.6%向上した。つまり、今年度は論理性、多面的理解、表現力というすべての項目でスコアが向上し、半分の生徒がこれらの力をつけることができたことと回答したことになる。この背景には、今年度はブラジルと日本という2つの国を対象国を絞ることで生徒と教員がリサーチする先行研究や資料を共有することが容易にでき、理解力の向上に効果があったといえる。また、各クラスで小グループによる活動を行い、各授業の最後にはクラス全体で各班の代表がその時間の成果をプレゼンテーションした。これらの協働作業が生徒の多面的な理解や論理的思考力の向上に結びついたことが、生徒の「1年間のまとめ」の報告書からも読み取れる。

なお、成果については、第7回高校生「国際問題を考える日」において最優秀作「移民マップ」を用いて課題研究活動の成果を発信した。また、成果集としてまとめ全生徒およびSGH校に配布し、成果を共有した。



「移民マップ」の例 (2組作成)

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(3) C.C.C.(総合的な学習の時間)における海外研修に向けての課題研究活動

目標

2 年次生全員がアメリカ合衆国、カナダ、イギリスに分かれて参加する海外研修に向けて、多くの移民を受け入れているそれぞれの国の歴史や文化を学習し、移入国において現地で意識調査をするための準備を行うことを目標とする。

対象学年

2 年次生全員(116 人)

内容

- 1) 調査活動
- 2) 日本についての紹介活動

内容の詳細

昨年度までのデータよりアメリカ合衆国、カナダ、イギリスの3か国における若年層は日本で働くことに興味を持っている人が多いことがわかった。そこで今年度は人間の安全保障の観点から外国人が日本で働くにあたり防災教育を含め災害に対する支援が必要であると考えた。

そこで、海外研修において災害意識について調査することにした。具体的には「日本の外国人労働者の災害対策と外国人労働者の災害意識に関するアンケート」をテーマに 2 年次生全員で調査を行うことにした。調査項目は、

- a) 自然災害を経験したことがあるか
- b) 日本にいる間に自然災害が発生した場合、どのような心配事があるか
- c) 災害への備えについて学んだことがない場合、どのような心配事があるか

なお、このアンケートは 2 年次全員が各ホームステイ先もしくは交流校で調査実施することを前提とした。

一方、日本紹介活動については交流校に“Japanese Culture Now and Then”をテーマに、昔と今に焦点をあて日本文化のプレゼンテーションの作成を行った。具体的には、(ア)春の花見、(イ)夏の祭り、(ウ)秋の遠足、(エ)冬の正月の 4 つの発表班に分かれ、事前学習およびリサーチ活動を行い、現地校で行う日本の紹介と魅力を発信するためのプレゼンテーションの準備・作成を行った。

成果および成果の発信

訪問国において全員で実施した現地調査の結果をまとめ、最終発表会で報告を行った。この調査結果は 2 年次生がまとめ、国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会で報告を行った。

Questionnaire on disaster preparedness for foreign workers in Japan and disaster awareness for foreign workers

We are researching about disaster support for foreign workers in Japan and disaster awareness

for foreign workers. Based on the data we collect, some of the students will make reports and do

further research. Thank you for your cooperation.

1. Please tell me your gender and your age.

Gender : Male Female Other Prefer not to say

Age : ()

2. Have you ever experienced a natural disaster?

Yes. No.

If Yes, please tell me what kind, when, and where you experienced it.

()

3. If you were working in Japan, what would be some concerns if a natural disaster occurs in Japan while you are there?

()

4. If you were working in Japan, and have never learned disaster preparedness,

would you feel anxiety about natural disasters?

Yes. No.

5. If you were working in Japan, what would be some other concerns besides the

language barrier?

()

2 年 組 番 ()

訪問国 : ()

海外研修における現地調査アンケート

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(4) 学校設定科目「提案日本の選択」における取組

目標

本校は、SGHの取組として、グローバル社会の重要側面である「移民」に焦点を当てた課題研究を通じて、多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟的に捉え、未来に向けて建設的な考え方のできるグローバルリーダーとしての資質を培ってきた。この科目では、これまでの課題研究のまとめとして、この国の可能性、役割、ニーズ等を取り出し、日本の未来の選択肢を提案するための課題研究を実施し、社会に向けて発信する研究論文を作成する。

対象学年

3年次生19人(グローバルリーダーコース GLC)

授業形態

本校の学校設定教科(国際)の3年次生の学校設定科目として平成29年度よりスタートした。

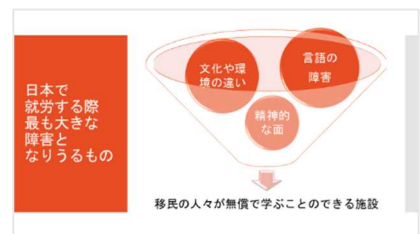
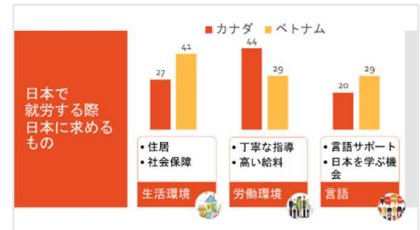
教諭4名が2単位の授業を2時間連続で行った。各自のテーマに合わせて個別指導、発表会、ディスカッション等のグループワークなどの形態をとった。

内容

- 1) 創造的思考力(複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定し、その課題の論点を把握したうえで、統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる力)を身につける。
- 2) 批判的・論理的思考力(国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択し、根拠に基づいて自分の考えを論理的に説明できる力)を身につける。
- 3) 異文化理解力(自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の価値観に対しても関心を持ち、地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考える力)を身につける。

内容の詳細

- 1) 論文のテーマ 「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」に関するテーマ
- 2) 論文の内容 (a) 目的 (b) 先行研究(問題の所在) (c) 調査および調査結果 (d) 分析 (e) 結論(考察)
- 3) 論文の量 10,000字(A4で10枚) 英文要約(アブストラクト)はA4で1枚作成
- 4) 論文の評価 各時間に作成するポートフォリオ(自己評価票)と発表会(先行研究発表会、論文発表会)におけるルーブリック評価(他者評価)を材料に用いて、総合的に評価する。



本校生徒作成
発表用パワーポイント 1



考察

- ・民族アイデンティティ・言語ともに母国の文化を高い割合で維持できている現状が分かった
- ・また、これらの結果は民族コミュニティへの積極的参加が影響していると考えられる

本校生徒作成
発表用パワーポイント 2

5) 年間実施内容

月	内容
4月	・ガイダンス ・論文フレームの作成 ・各自、テーマの設定 ・「先行研究」の調査
5月	・「先行研究」の調査
6月	・「先行研究」調査結果の発表 ・論文作成 (1)目的 (2)先行研究 (問題の所在)
7月	・調査計画書の作成
8月	・各自、調査活動の実施
9月	・調査結果の発表 ・論文作成 (1)目的 (2)先行研究 (問題の所在) ・論文作成 (3)調査および調査結果 (4)分析
10月	・論文作成 (5)結論 (考察) ・発表会用パワーポイントの作成
11月	・論文発表会 ・各自、発表用ポスターの作成
12月	・論文の完成 ・校内中間発表会における発表 ・「甲南大学リサーチフェスタ2019」での発表
1月	・論文の校正作業 ・発表用ポスターの作成
2月	・第7回高校生「国際問題を考える日」での発表

成果および成果の発信

選択生徒全員が論文を作成し、ルーブリックによる評価を行った。その結果、選択生徒は、創造的思考力、批判的・論理的思考力、異文化理解力の3つ観点すべての自己評価が、同じ年次の非選択者よりスコアが高かった。また昨年度の選択者と比較すると、特に、異文化理解に関しては、スコア4をつけた選択生徒は昨年度の23.8%に対して今年度は44.4%と20.6%上回った。今年度は異文化理解力の向上を目標に、2年次からエスノグラフィやヘイトスピーチなどのテーマを設定して課題研究活動を進めてきた成果が発揮されたと判断できる。また、批判的・論理的思考力に関して、スコア4をつけた選択生徒は昨年度の23.8%に対して今年度は27.8%と4%上回った。さらに、創造的思考力に関しては、スコア4をつけた選択生徒は今年度38.9%とこの3年間で最高のスコアを記録した。したがって、「提案日本の選択」課題研究を行うことで、創造的思考力、批判的・論理的思考力、異文化理解力すべてを伸長させることができ、今年度は特に異文化理解力の育成には効果があった。

成果は、授業内で発表会を行い、評価が高かった3人が校内の最終発表会でプレゼンテーションを行った。また、3人は校外の「甲南大学リサーチフェスタ2019」で発表を行い、審査員特別賞およびロジカルデザイン賞とアトラクティブプレゼンテーション賞を受賞した。あわせて第7回高校生「国際問題を考える日」において、2人の生徒が研究成果の報告を行った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(5)「昼休み辻説法」における課題研究活動

目標

グローバルリーダーコースを含む上級生が昼休みの時間を利用し、下級生の課題研究に指導補助として参加し、研究成果を還元するとともに、生徒間の相互学習を活性化することを目標とする。

対象年次

全年次生

内容

- 1) 2年次生による「ディベート」課題研究活動に関する1年次生に対する指導
- 2) 3年次生による「論文」課題研究活動に関する2年次生に対する指導

内容の詳細

第1回「昼休み辻説法」2019年6月7日(金)

2019年6月7日(金)、昼休み、PC室にて2019年度第1回昼休み辻説法を行った。対象は総合的な学習の時間C.C.C.でディベート課題研究活動に取り組む1年次生から、ディベート班の班長・副班長の23人と、昨年度のディベート大会決勝に出場した2年次生から肯定側2人、否定側3人の計28人が参加した。目的は、これからディベート大会に臨む1年次生に対して、2年次生からディベート課題研究活動に関する助言をすることで、1年次生が今年度のディベート大会において、よいパフォーマンスが発揮できるようにすることである。

まず、2年次生から昨年度のディベート大会決勝における立論を肯定側および否定側がプレゼンテーションを行った。続けて、2年次生から1年次生にアドバイスをした。「根拠となる資料をたくさん用意することも大切だが、聴衆の立場に立って、わかりやすくプレゼンテーションを行うことがさらに重要である」という助言や、「資料を単に読むのではなく、聴衆の目を見てプレゼンテーションをしてほしい」など多くの助言が2年次生から1年次生に送られた。これに対して2年次生は真剣に耳を傾けていた。

今年度のディベート大会実施に向けて、よい経験となった。



2年次生から1年次生への辻説法

第2回「昼休み辻説法」2020年1月15日(水)

第2回「昼休み辻舌鋒」が2020年1月15日の昼休みに中央廊下で行った。対象は、課題研究活動に取り組む3年次生2人と2年次生20人である。3年次生の2人は課題研究論文を完成させ、12月に行われた「甲南大学リサーチフェスタ2019」で受賞した生徒である。2年次生は論文をこれから本格的に作成する生徒である。まず、3年次生から課題研究論文作成にあたり、大切なことについて話があった。具体的には、テーマ設定は抽象的なものではなく具体的なものにすること、そして今はできるだけ多くの先行研究を調べて収集することを2年次生に訴えた。また、自分の研究に独創性をもたすことが重要であると話をした。具体的には、これまでの研究では取り上げてない新しい社会情勢に配慮して研究すること、また、自分にしかできない調査をすることが大切であると訴えた。3年次生の研究成果を共有し、2年次生の課題研究活動を進めるため非常に有意義な契機となった。



3年次生から2年次生への辻説法

成果および成果の発信

「昼休み辻説法」の実施により「ディベート」課題研究活動の推進および改善が図られた。また論文作成に向けての動機づけの契機となり、2年次生がスムーズに論文作成に向けての課題研究活動に入ることができた。なお2年次生3人は2020年2月11日に行われた高校生第7回「国際問題を考える日」において研究成果を発表した。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(6) 海外フィールドワーク「カンボジアスタディツアー2019」における課題研究活動

目標

2016年3月に調査を行ったカンボジアの2か所の村で再調査を行い、国を越えて人が移動する状況についてどのような変化があるかを考察する。

フィールドワーク先の選定経緯とフィールドワークの目的

1年目はカンボジアの農村を訪問し、結果、多くのカンボジア人は隣国のタイに「出稼ぎ」で働きに行ったものの、低賃金や違法労働のため帰国していたことがわかった。彼らの多くが字の読み書きができない「教育を十分に受けられなかった」人々であった。2年目は、「教育を受けている人」を対象にベトナムで調査を実施した。これは「フィールドワークin姫路」において、日本の企業で雇用されているベトナム人に対する調査の延長として行った。実際にベトナムを訪問し「日本で働くことについてどう考えるか」を調査した結果、教育を受けているベトナムの高校生や大学生の多くが日本で働くことに興味や関心があるが、一方で、日本語や日本の生活に不安を感じている生徒が多いことがわかった。3年目はタイを訪問した。大学生や高校生に「日本で働くことに関する意識調査」を行った結果、多くのタイの若者が日本で働くことに興味を持っているが、日本で働くタイ人の実態を理解していないことがわかった。4年目の訪問先はフィリピンとした。理由は日本に居住する在留外国人の中で4番目に多い国であり、現在も日本にやって来るフィリピン人が多いからである。また、フィリピンは国策として労働力を移出している国であり、その独特な政策が国内外にどのような影響を与えているかを調べるためである。フィールドは2つ選定した。1つは貧困層が居住する地区とした。ここでかつて日本に移住した経験がある人を対象に聞き取り調査を行い、なぜ日本に来たのか、またフィリピンに帰国した理由を調べることにした。もう1つはアテネオ・デ・マニラ大学である。この大学はフィリピンでも最もレベルの高い大学の1つであり、彼らは将来の高度人材候補である。彼らに日本で働くことに関する意識調査を行い、高度人材が将来、日本にやってくる可能性を検証する。フィリピンは貧富の格差が大きな国であり、この両者をターゲットに調査を行い、将来、日本にどのような人々がやって来るのかを検証することを目的にフィールドを選定した。これらの調査を通して、将来、日本が海外から多くの移民を受け入れるための方策や、海外から多く人がやってきた場合、海外からやってきた人も日本にいる人も共に幸せに暮らせる日本のあり方を提案する論文作成に活かすことを最終ゴールとした。



4日目 フィールドワークを終えて

対象学年

1年次生20人

事前学習会

第1回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年7月19日(金)

・フィリピンスタディツアーの目的および概要説明

第2回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年7月23日(火)

・前回(2016年3月実施)のカンボジアスタディツアーの調査結果データの分析

[資料] ・外務省各国情報。

・西文彦「カンボジアの人口ピラミッド」、1998年。

・統計情報研究開発センター「ESTRELA」。

第3回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年7月31日(水)

・カンボジアの歴史についての学習

[資料] ・外務省各国情報。

第4回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年8月7日(水)

・カンボジアの移動労働の実態に関するリサーチ活動

[資料] 上田広美、岡田知子「海外への出稼ぎ」、2012年、『カンボジアを知るための62章第2版』、明石書店。

第5回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年8月28日(水)

・カンボジア人技能実習生に関するリサーチ活動

[資料] チョウ・ペイセイ「カンボジアからみた外国人技能実習制度政策評価」、2019年、法政大学公

- 共政策研究科『公共政策志林』7巻、129-139頁。
- 第6回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年9月3日(火)
- ・カンボジアの生活や文化に関するリサーチ活動(1)
 - [資料]・上田広美、岡田知子「季節のリズム」、2012年、『カンボジアを知るための62章第2版』、明石書店。
- 第7回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年9月10日(火)
- ・カンボジアの生活や文化に関するリサーチ活動(2)
 - [資料]坂井加奈「音楽活動を通じた国際理解 - カンボジア日本友好学園・ACCとの交流を通して -」、2010年、西九州大学短期大学部紀要第41号、93-103頁。
- カンボジアスタディツアー2019保護者・生徒対象説明会 2019年10月1日(火)
- ・活動詳細の説明および活動上の注意事項についての説明
- 第8回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年10月8日(火)
- ・学校訪問プレゼンテーションの作成
- カンボジアスタディツアー2019結団式および第9回事前学習会 2019年10月18日(金)
- ・校長挨拶、学校訪問プレゼンテーションのリハーサル
- 第10回カンボジアスタディツアー2019事前学習会 2019年10月21日(月)
- ・学校訪問プレゼンテーションの最終リハーサルおよび活動全般における最終打ち合わせ

行程

- | | |
|----------------|---|
| 2019年10月22日(火) | 10:30 関西国際空港発～16:50 プノンペン空港着
19:00～21:00 夕食・現地高校生との交流会および勉強会 |
| 2019年10月23日(水) | 10:30～16:00 タケオ州サモール村にて実地調査
19:00～21:00 サモール村での交流会 |
| 2019年10月24日(木) | タケオ州からプノンペンに移動
10:00～12:00 Western International High Schoolにてプレゼンテーション、調査および交流会
シムリアップ州へ移動 |
| 2019年10月25日(金) | 8:30～11:00 シムリアップ州プロン村で実地調査
20:25 シムリアップ空港発～22:05ハノイ空港着 |
| 2019年10月26日(土) | 0:20ハノイ空港発～6:40関西国際空港着 |

内容の詳細

10月22日

8時に関西国際空港に集合し、ホーチミン経由で17:00にプノンペン空港に到着した。その後は夕食会場に移動し、カンボジアのアジア協会アジア友の会代表であるロンチョン氏と日本のアジア協会アジア友の会が就学支援をしていたカンボジア人4人と一緒に食事をしながら交流を図った。本校生は事前に用意していたカンボジア語の辞典を使いカンボジアと英語で会話をした。ロンチョン氏よりカンボジアの移動労働の現状についての講義があった。国内の労働移動と海外への移動という2つの観点でお話をされた。まず、国内の移動について、2013年において家族のうち1人が国内のどこかに移動しており、首都プノンペンでは労働者のうち71%が国内の移動労働者であると指摘された。移動理由は労働により賃金を得るといった経済的な要因が最も多く、第二に教育を受けるためという要因が多い。次に海外への労働移動について話された。1990年代にはタイ、フィリピン、マレーシアの順でカンボジアから国外に働くに行く人が多かったが、近年はマレーシアや韓国に働きに行く人が増え、日本は労働基準が厳しく働きに行くにはハードルが高いと指摘された。ロンチョン氏の講義の後は質疑応答があった。本校生は積極的にロンチョン氏に質問をし



現地スタッフ(KAFS)との交流



KAFS 代表ロンチョン氏による講義

た。これから調査を行う本校生にとって、カンボジアの移動労働の現状について知ることができ有意義な体験であった。

10月23日

朝、プノンペンからタケオ州に移動し、2011年2月20日に国際高校が募金を集めて作られた村の井戸を見学し、村の人たちと交流を持った。

その後、タケオ州サモール村に移動し、ベースキャンプとなる寺院でカンボジアのアジア協会アジア友の会のコーン氏よりこの村での活動についての説明があり、現地のスタッフの10人の紹介があった。昼食の後、寺院に集まってきた村の子どもと交流をした。本校生は用意していたクメール語の辞書を片手にカンボジアの子どもたちに日本のけん玉や折り紙を教えたりして、一緒に遊びながら交流を深めた。



サモール村での子どもとの交流の様子

その後、生徒は3つのグループに分かれ計11軒の家庭を訪問し、移動労働経験者にインタビューによる聞き取り調査を実施した。生徒は用意していた質問事項について英語で質問し、通訳者がクメール語で現地の人に質問し英語で本校生に答えるという形式で行った。計11人のカンボジア人に調査を行った。今回は前回行った再調査であったが、前回インタビューした人に調査はできなかった。理由は、すべての家庭で誰かが海外に働きに行っていたが、その人は帰国後にサモール村に戻らずプノンペンで働いている人が多かったためである。前回の調査から3年半がたつが、移動労働の実態が変化していることがわかった。



サモール村での聞き取り調査の様子

夕食後は、サモール村の人々との文化交流会が行われた。本校生はパブリカとカンボジアの踊りであるアッピースを披露した。アッピースは本校が受け入れているカンボジア人のアジアの架け橋プロジェクトの留学生から教えてもらったものである。その後は現地の人たちとカンボジアの踊りを一緒に踊った。現地の人たちと交流を深めることができた一日であった。

10月24日

朝、タケオ州サモール村の寺院で朝食をとった後、プノンペンに自動車に向かった。10時15分にWestern International High School Northwest Campusに到着した。3階の教室にてWestern International High Schoolの1年生149人に対して、本校生がパワーポイントを使ってプレゼンテーションを英語で行った。まず、本校の紹介を行い、次に日本とカンボジアの文化や生活の共通点と違いについてプレゼンテーションを行った。日本では夏休みに盆踊りをするというプレゼンテーションの中で、本校生が浴衣で盆踊りを披露した。プレゼンテーションが終わった後は、Western International High Schoolの生徒に対して、日本での就労意識に関する聞き取り調査を実施した。調査の後には、本校生とWestern International High Schoolの生徒の間でディスカッションと交流会が行われた。プレゼンテーションの途中で付近の火災が原因で停電となり、プレゼンテーションが途中で中断するというハプニングがあったが、Western International High Schoolの生徒は日本に対して非常に興味のある生徒が多く、活発な交流が行われた。本校生1人に対して何人ものカンボジアの生徒が取り囲み、本校生は用意していた日本のグッズを使って積極的にコミュニケーションを図った。カンボジアの高校生と交流ができ、非常に有意義な経験であった。



Western International High Schoolでのプレゼンテーションの様子

Western International High School訪問の後には次の活動先であるシェムリアップに飛行機で移動し、

三日目の活動を終えた。

10月25日

朝6時に起床し朝食をすました後フィールドワークに出発し、9時にシュムリアップのpron村に到着した。調査場所は前回2016年3月に実施した同じ村である。pron村では村長と副村長の出迎えを受けた。生徒は2つのグループに分かれ、村長と副村長にそれぞれ誘導していただき、3組の家族を対象に、移動労働経験者にインタビューによる聞き取り調査を実施した。生徒は用意していた質問事項について英語で質問し、通訳者がクメール語で現地の人に質問し本校生に英語で答えるという形式で行った。6つの家族を訪問し計7人のカンボジア人に調査を行った。シュムリアップ州はタイに近いことから移動労働先は前回の調査と同じくタイが多かったが、ほとんどの移動労働経験者がタイにはもう行きたくないと言った。理由はタイで働いてもらう賃金とカンボジアで働いてもらう賃金はあまり変わらないためリスクを冒してまで海外に働きに行きたくないということであった。前回の調査した時より、カンボジア国内の経済が成長していることが実感できた。調査対象中には日本への移出経験者がいた。彼は3年間、技能実習生として長野県の農家で働いた。時には深夜2時から17時まで働き、15～20万円の給料を受け取り、うち約10万円はカンボジアの実家に仕送りをしてきた。その資金で家を新築し、一人の妹を大学に進学させ、もう一人の妹を高校に進学させ大学にも進学させる予定であるという。彼は現在、カンボジアの日本語学校に通っており、再び日本に技能実習生として働きに行くつもりであると述べた。移動労働先によりその人とその家族の生活に大きな影響を与えることを実感でき、将来、カンボジアから多くの労働者がやってくると予見された。その他、多くの聞き取り調査のデータが得られ、非常に有意義で貴重な体験となった。



pron村での聞き取り調査の様子

フィールドワーク終了後、アンコールワットを通りシュムリアップ空港に向かった。ホーチミン経由で26日朝に関西国際空港に到着しカンボジアスタディツアーを無事終えることができた。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関して、データベースとして結果をまとめた。

成果については、校内の発表会、中学生の生徒および保護者対象のオープンハイスクール、校外の発表会で報告を行い成果の普及に努めた。

「カンボジアスタディツアー」報告書例

1年1組23番 蜂谷 やや

私がこのスタディツアーに参加した理由は主に3つある。初めに、私は今まで1度も日本の外へ出たことがないからだ。海外に行き、自分の目で現状を見ることで移民に対する関心がより高まると考えたからだ。次に、実際にスタディツアーに参加した先輩から様々な話を聞き、興味をもったからだ。最後に、私自身が移民についての知識があまり無かったからだ。出稼ぎに行った人の話を直接聞ける機会など、このツアーに参加しなければなかなかないと思ったからだ。

事前学習でタイに出稼ぎへ行った人が多かったが、実際に行ってみてどうだったのか、行く前と行った後ではどう変わったのか、他にタイ以外の国に行った人などにも詳しく話を聞き、カンボジアの移民事情を全く知らない人に説明できるくらいに調査しようと思い、このスタディツアーに臨んだ。

今回調査をして分かったことはやはり出稼ぎ先はタイが多かったこと、タイは給料が良いと聞いていたが実際行ってみるとカンボジアで働くのと変わらないこと、物価が高いなどの困ったことも多かったということだ。タイ以外には、中国、韓国、日本に出稼ぎにきた人にも話を聞くことができた。タイ以外の国に行った人はみな以前よりも良い給料をもらっている。そのほとんどが家族などに仕送りができるほどだった。特に日本に来た人の家はとも立派だった。

しかし日本で働きたいと言う人全員が来ることができるわけではない。カンボジア人でパスポートを持っている、または取得できる人は少ない。さらに日本で働くには言語習得が必須となる。そして日本で働くための準備が整ったとしても、送出国に応募し、日本にある受入機関に大金を払う必要がある。そこから管理団体に各企業へと振り分けられる。そのため莫大な借金をして日本に来るカンボジア人が多い。または日本人の知り合いにすすめてもらい、仲介企業を使って日本で働きだして給料から何パーセントかを会社に送っていたという人もいた。日本で技能実習生として働く場合、転職も認められていない。この事実を知っている日本人は一体何割いるだろうか。私たちは日本の将来を担っていく者として現状を知り、改善すべき点などを考えるべきだ。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(7) 海外研修(アメリカ合衆国・カナダ・イギリス)における課題研究活動

目標

2 年次生全員がアメリカ合衆国、カナダ、イギリスに分かれて訪問する海外研修を行い、災害に関する意識調査を行った。日本が外国人を受け入れるにあたり外国人に対する防災や災害に対する支援のあり方を考える契機とする。

対象学年

2 年次生全員(114 人)

訪問先および人数

アメリカ合衆国(シアトル, タコマ) 36 人
イギリス(ベリーセントエドモンズ等) 39 人
カナダ(ビクトリア) 39 人

日程

2019 年 11 月 2 日(土)~8 日(金)



海外研修におけるプレゼンテーションの様子

内容

- 1) 全員によるホームステイ先での聞き取り調査
- 2) 学校交流における日本文化の紹介

内容の詳細

全員がホームステイ先で、災害に関する意識調査を行った。具体的には「日本の外国人労働者の災害対策と外国人労働者の災害意識に関するアンケート」をテーマに調査を実施した。調査項目は、(a)「自然災害を経験したことがあるか」(b)「日本にいる間に自然災害が発生した場合、どのような心配事があるか」(c)「災害への備えについて学んだことがない場合、どのような心配事があるか」などである。調査はすべて英語で行った。

一方、日本紹介活動については交流校に“Japanese Culture Now and Then”をテーマに、昔と今に焦点をあてて日本文化のプレゼンテーションを行った。具体的には、(ア)春の花見 (イ)夏の祭り (ウ)秋の遠足 (エ)冬の正月 の発表班に分かれ、現地校で日本の紹介と魅力を発信するためのプレゼンテーションを行った。

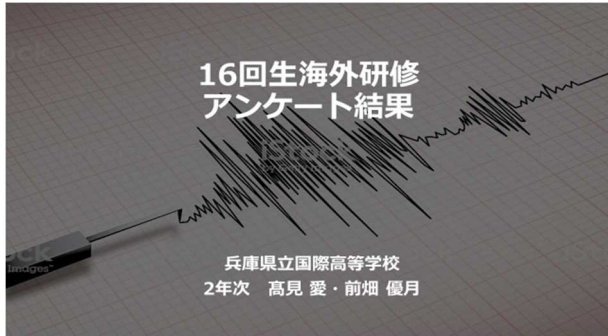
成果および成果の発信

訪問国において全員で実施した現地調査の結果をまとめ、最終発表会で報告を行った。また、この調査結果を課題研究に反映させ、2 年次生の生徒がその成果を国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会で報告を行った。審査の結果、学会より奨励賞を授与された。



海外研修におけるプレゼンテーションのスライド例

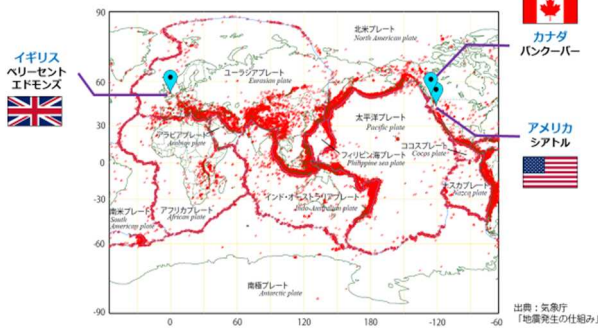
海外研修における調査結果のまとめ



目的

- イギリス、アメリカ、カナダにおける災害経験と災害意識の調査
- 日本にやってくる外国人が災害時にどのような支援が必要かを考える。

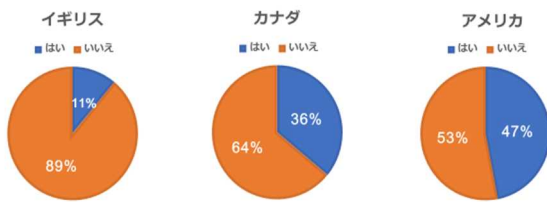
地震の起こる場所 = プレートの境界



調査の対象者

場所	イギリス ベリーセントエドモンス	カナダ バンクーバー	アメリカ シアトル
人数 (男:女)	37 (9:28)	33 (13:20)	32 (11:20) 無回答1名
対象年齢	12~70歳	12~75歳	12~64歳

自然災害を経験したことがあるか



日本で働いていて、災害への備えを学んだことがない場合、自然災害に不安を感じるか



日本で働くときどのような心配事があるか

- 言語の問題
- 生活環境への不安
- 連絡手段に関する不安



実施報告書

6 課題研究活動の取組

(8) 「フィールドワーク in 姫路 2019」における課題研究活動

目標

2016年に調査を実施した外国人労働者を雇用している姫路市内の企業を再度訪問し、その後の日本の中小企業の現状と移民労働について調査し日本の未来の選択肢について考える契機とする。

対象年次

1年次生 11人、2年次生 5人、3年次生 1人
計 17人



梶原鉄工所株式会社にて工場見学

場所

サワダ精密株式会社 姫路市広畑区吾妻町 1-39
梶原鉄工所株式会社 姫路市飾磨区恵美酒 411

調査対象

- 1) サワダ精密株式会社
[外国人労働者受け入れ企業] 代表取締役社長 澤田洋明氏
[ベトナム人労働者] 2人 在留資格「技能実習」1人、「技術・人文知識・国際業務」1人
- 2) 梶原鉄工所株式会社
[外国人労働者受け入れ企業] 取締役総務部長 大明賢氏
[ベトナム人労働者] 2人 在留資格「技術・人文知識・国際業務」2人

コーディネーター

姫路経営者協会 専務理事 村瀬利浩氏

日程

2019年8月26日(月)

事前学習

2019年8月26日(月)

- ・出入国在留管理庁「新たな外国人材の受け入れ及び共生社会実現に向けた取組」、2019年、最終閲覧日:2019年8月25日。
- ・中嶋龍祐「ベトナム人技能実習生への調査結果からみる日本の技能実習制度への考察 - ”STEP HARIMA in HANOI”プロジェクトによる外国人労働者の受け入れについて - 」、2018年。

内容

- 1) 企業側からの説明
- 2) 社内見学
- 3) 雇用されているベトナム人労働者への聞き取り調査

内容の詳細

2019年8月26日(月)に、「フィールドワーク in 姫路 2019」を実施した。本校1年次生11人と2年次生5人、3年次生1人の計17人が参加した。今回で5回目になる「フィールドワーク in 姫路」は2016年に調査を実施した外国人労働者を雇用している姫路市内の企業を再度訪問し、その後の企業と外国人労働者の現状を追跡調査し、今後の外国人労働者の受け入れについて考察する契機とすることを目的とした。



サワダ精密株式会社にて
聞き取り調査の様子

まず、サワダ精密株式会社を訪問した。まず、企業側から企業説明を受けた。サワダ精密株式会社は82人の従業員のうち7人の外国人を雇用している。外国人労働者の内訳は、在留資格「技術・人文知識・

国際業務」3人、在留資格「技能実習」4人であり、「技術・人文知識・国際業務」の3人は正社員として雇用されている。外国人従業員の国籍はすべてベトナムである。外国人労働者雇用のきっかけは2012年に新社長が就任した際、大量の退職者が出たことによりベトナム人技能実習生を受け入れ始めたことによる。それ以来、通算16人のベトナム人技能実習生を雇用してきた。サワダ精密株式会社では、2018年にベトナムに工場「sapan」を進出させた。きっかけは、2012年に雇用した1期生のベトナム人技能実習生であるミン氏の存在である。彼は2016年に実施した本校の聞き取り調査に対して「将来はベトナムに帰ってサワダ精密株式会社のような会社を立ちあげたい」と回答していた。ミン氏が工場の進出に対して、積極的に協力をする事になりサワダ精密株式会社はベトナム現地工場「sapan」を立ち上げることができた。

次に社内見学をした。外国人労働者は各部署で日本人と共に働いていた。社内見学のあと、サワダ精密株式会社で働く2人のベトナム人労働者に対する聞き取り調査を実施した。一人は2016年度にもインタビューしたS氏であった。在留資格は「技術・人文知識・国際業務」である。彼は2018年度よりベトナムより妻と三歳の子どもの呼び寄せで日本で家族と一緒に暮らしていた。日本で困ったことは何かという質問には、日本語と答え、特に家族を病院につれていかなければならないときに困ると回答した。将来はベトナム現地工場「sapan」で働きたいと話した。もう一人はベトナム人技能実習生の女性に聞き取り調査を行った。彼女が日本で困っていることは日本語習得であり、母国で日本語を独自に勉強してきたが日本語、特に漢字は難しいと回答した。将来は未定でベトナムに帰り、ベトナムで働くか日本にもう一度来るかわからないと回答した。

昼食後、梶原鉄工所株式会社にバスで移動した。昼食後、企業側からの説明を受けた。梶原鉄工所株式会社では98人の従業員のうち10人の外国人労働者を雇用している。10人の国籍の内訳はベトナム9人、中国人1人である。在留資格は8人が技能実習であり、2人は技術・人文知識・国際業務であり2人は正社員として働いている。外国人労働者雇用の契機は社員の高齢化と日本人若年労働者の不足であり、2003年度に中国人技能実習生を6人受け入れたことによる。中国の経済発展に伴い中国人技能実習生は減り、近年はベトナムから技能実習生を招いている。今年度、在留資格「特定技能」が新設され技能実習生を継続して雇用することができるようになったが、技能実習生を継続して雇用したかという質問に対して、優秀な人ならば検討をしたいと回答した。次に、梶原鉄工所株式会社で働くベトナム人労働者に聞き取り調査を行った。一人は2016年度にも聞き取り調査を実施したL氏である。彼は姫路経営者協会が主催する「STEP HARIMA in HANOI プロジェクト」においてハノイで企業による面接試験を受けて雇用された。在留資格は「技術・人文知識・国際業務」である。今年4月にベトナム人と結婚し、来年には子どもが生まれる予定である。現在は家族と一緒に日本で暮らしている。将来は子どもが18歳になるまでは日本の学校で学ばせるため継続して家族と共に日本で暮らしたいと回答した。その後、ベトナムに帰り母国の発展のために貢献したいと述べた。もう一人は27歳のベトナム

人の男性で在留資格「技術・人文知識・国際業務」であり、今年度、採用された。両親と弟を母国に残し寂しいが、長くの日本で働きたいと話した。

この日、訪問させていただいた両社とも前回の調査より大きな変化が見られた。それは、来日当時は単身で働いていた外国人労働者が家族を呼び寄せ、これから長く日本で家族と一緒に暮らしたいと考えていることである。

この日のすべての活動を終え、バスで本校に帰り解散した。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関しては、データベースとして結果を冊子にまとめた。

成果については、生徒の論文に反映させると共に、校内の発表会および学会等の校外発表会において報告を行った。このうち、「国際開発学会 & 人間の安全保障学会 2019 共催大会」において、このフィールドワークの調査結果をまとめ成果を報告した生徒は学会より奨励賞を受賞した。

No.2

基礎データ	
調査日	2019年8月26日
調査場所	サワダ精密株式会社
調査対象氏名	フェン
性別	女性
年齢	24歳
出身国	ベトナム
最終学歴	短期大学卒
家族構成	5人家族（父、母、姉、兄）
在留資格	技能実習
調査内容	
1	あなたはなぜ日本に来ようと思いましたが、 本当は留学生として日本に来たかったが、日本語が難しくその夢は諦めた。
2	日本に来てよかったことは何ですか。 最初何も分からなかったが、皆が優しく教えてくれたこと。
3	日本に来て困ったことは、また困っていることは何ですか。 日本語会話、漢字が書けないこと（読むことは出来る）。ちなみに、日本語は、母国で販売している教科書を使い独学で学んで日本に来た。
4	母国に仕送りしていますか。している場合は月にどれくらいしていますか、 回答できる範囲で 以前は数か月おきにしていたが、現在はしていない。
6	今年の4月から在留資格「特定技能」が新設され、技能実習から特定技能への在留資格の変更が認められ、日本で最長8年働くことが出来るようになりました。あなたは在留資格を変更して、長く日本で働きたいですか。 3年が終わったら結婚（ベトナム人と）するかもしれない。 ベトナムで仕事を見つけ、それが良かったらベトナムで生活する。 日本の方が良いと感じたら日本に戻ってくるかもしれない。 ちなみに、Sapanで働くことは現在は考えていない。 自宅が遠く、道が頻繁に渋滞するため毎日通うのは困難。
7	新しい在留資格（特定技能）2号では、家族滞在が認められるようになりました。制度的に家族滞在が認められ、あなたは、日本で長く働く場合、家族と一緒に暮らしたいですか。 もし日本でこれから働くなら、できるだけ家族と住みたい。
8	これからのあなたの将来の夢を教えてください。 通訳やベトナムで実習生の送り出しをしたいがまだ考えている。

聞き取り調査データベース例 1

No.6

基礎データ	
調査日	2019年8月26日
調査場所	株式会社梶原鉄工所
調査対象氏名	キエン
性別	男性
年齢	27歳
出身国	ベトナム
最終学歴	ハノイ工科大学
家族構成	父、母、弟
在留資格	技術・人文知識・国際業務
調査内容	
1	あなたはなぜ日本に来ようと思いましたが、 日本の科学技術は高いから。大学時代に日本に興味を持った。 ハノイで面接してきた。堅実的で親身。
2	日本に来てよかったことは何ですか。 日本は道がきれいで、人が優しく誠実。
3	日本に来て困ったことは、また困っていることは何ですか。 家族と離れていて寂しいが、皆のおかげで頑張れて、生活を支援してもらっている。日本語に関しては問題ない。
4	母国に仕送りしていますか。している場合は月にどれくらいしていますか、 回答できる範囲で 家族には送金した。今後は自分のために貯金したい。
6	今年の4月から在留資格「特定技能」が新設され、技能実習から特定技能への在留資格の変更が認められ、日本で最長8年働くことが出来るようになりました。あなたは在留資格を変更して、長く日本で働きたいですか。 長く日本で働きたいと思う。その先は母国へ帰り、国を良くしたい。
7	新しい在留資格（特定技能）2号では、家族滞在が認められるようになりました。制度的に家族滞在が認められ、あなたは、日本で長く働く場合、家族と一緒に暮らしたいですか。 長く住むなら家族と住みたい。今後、結婚したら妻は日本に連れていきたい。両親は旅行として日本に来てほしい。ただ、今までずっとベトナムで暮らしてきたため、日本に住むことは考えていない。
8	これからのあなたの将来の夢を教えてください。 技術を極めて、ゆくゆくは技術の達人になりたい。

聞き取り調査データベース例 2

「フィールドワーク in 姫路」報告書例

1年3組33番 細越 恋紋

私がこのフィールドワークに参加した理由は2つある。1つ目は、外国人労働者の現状について詳しく知りたかったからだ。テレビのニュースなどで外国人労働者のことを聞くことはあっても、実際にどのような環境や状態で働いているのかわからなかった。このフィールドワークに参加することで外国人労働者に実際にインタビューし、より深く学ぶことができると思った。また、自分で直接調査するということはなかなかできないことなので、よい経験になると思った。2つ目は、10月に参加するカンボジアスタディツアーで参考になると思ったからだ。いきなり現地に行くよりも、一度聞き取り調査を経験してからカンボジアに行くことが自分のためだと考えた。

私はこのフィールドワークを臨むにあたって、日本人の観点ではなく、実際に働いている方の気持ちになって調査しようという意識を持つように心がけた。また彼らの精神面についても詳しく調査しようと考えた。

現地調査で分かったことは、家族と離れて暮らさなければならぬ技能実習生は心の負担が大きいということだ。企業は十分な日本語教育をしておらず、実習生本人が自分で勉強しなければならない。たくさんの困難がある中、一人ひとりの負担も大きくなってきていると思う。

今後は、実習生に寄り添って、よりよい環境をつくる必要があると思う。実習生の負担が軽くなれば仕事により集中することができ、技術の向上につながるだろう。また、これからは技能実習生が新たな在留資格「特定技能」を取得し、日本で長く働くことが可能となった。これにより、外国人労働者は日本にとどまり続け、「技術を母国にもってかえる」ということができなくなってしまう。これは送り出す側の国にとって優秀な人材を失っているということである。しかし、日本にとって一部の業界で働き手が不足していることも事実だ。この問題をこれからどうしていくのが課題だと考える。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(9) 国内フィールドワーク「フィールドワーク in 池田 2020」における課題研究活動

目標

フィリピンなど海外の多くの国から介護福祉士候補者を受け入れている高齢者介護施設を訪問し、日本の介護現場の現状と移民労働の現状について調査し、日本の未来の選択肢について考える契機とする。

対象学年

2 年次生 3 人
1 年次生 13 人

調査対象

社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」の経営者および外国人の介護福祉士候補者・介護福祉士合格者

調査日

2020 年 2 月 8 日(土)



聞き取り調査の様子

内容

- 1) 社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」人事部 課長より外国人介護人材雇用に関する説明
- 2) 社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」外国人介護福祉士候補者および介護福祉士合格者に対する聞き取り調査 英語・日本語による聞き取り調査

内容の詳細

本校 1 年次と 2 年次生の 16 人が SGH 課題研究活動の一環として特別養護老人ホーム「ポプラ」を訪問した。目的は、海外から介護人材を受け入れている特別養護老人ホームを訪問し、日本の介護現場および移民労働の現状を調査することで、日本の未来の選択肢を考える契機とすることである。このフィールドワークは 2016 年度から始まり今年で 4 回目となるが、継続して調査を行うことで、介護現場における外国人介護人材活用に関する状況の変化を知ることを目標に実施した。

まず、企業側から説明を受けた。特別養護老人ホーム「ポプラ」は設立 16 年目であり、グループ全体で 900 人の職員が働いている。外国人介護人材は 2009 年から採用を開始した。現在、グループ全体で 41 人の外国人介護人材が働いている。41 人のうち、17 人がフィリピン人 EPA 介護福祉士および介護福祉士候補生である。15 人がネパール人であり、在留資格は留学 13 人、介護 1 人、配偶者 1 人である。ベトナム人が 4 人ですべて在留資格は留学である。中国人は 3 人で、在留資格は留学 2 人、配偶者 1 人である。ミャンマー人は 1 人で在留資格は留学、サウジアラビア人は 1 人で在留資格は配偶者である。外国人介護人材の受け入れ数は昨年度 24 人に対して、41 人で 14 人増えていた。また、在留資格もこれまでの EPA 特定活動だけでなく、留学、配偶者、介護と受け入れ窓口を増やしていた。外国人介護人材を受け入れる国もフィリピンだけでなく、ネパール、ベトナム、中国、サウジアラビアと対象国を広げている。この特別養護老人ホーム「ポプラ」は日本で最初に外国人介護人材として

No.3

基礎データ	
調査日	2020年2月8日
調査場所	特別養護老人ホームポプラ(池田市東山町555-1)
調査対象氏名	ガリド チヤレス
性別	女性
年齢	27
出身国	フィリピン ミンダナオ ダバオ
最終学歴	大学
家族構成	家族4人(父、母、弟)
在留資格	特定活動(EPA)
調査内容	
1	あなたはなぜ日本に来ようと思いましたか。 日本は安全だから。サウジアラビアに行くことを検討していたが父親に反対された。
2	日本に来てよかったことは何ですか。 交通が発達しており便利なこと。買い物しやすい。日本人は優しい。
3	日本に来て困ったことは、また困っていることは何ですか。 日本語。特に介護の現場で緊急事態が起こったとき日本語での対応に困る。
4	特に支援してほしいことは何ですか。 日本語の学習支援。一人で勉強するのは難しいため、国家試験に向けて対策をしてほしい。
5	これまでは介護福祉士の国家試験に合格しないと母国に帰国しなければいけないでしたが、新しい在留資格を作ることで継続して日本で働けるようになりました。あなたは今後も日本の介護現場で働き続けたいですか。 介護福祉士の国家試験に合格したら、日本で働き続けたい。
6	将来設計はどのようにお考えですか。 (日本にいたい、母国に帰りたい、他国に行きたいか) 日本で働き続けたい。
7	もしあなたが日本で結婚して新しい家族ができたなら、あなたは家族と一緒に日本で住みたいですか。 ご縁があれば日本で住みたい。しかし、今はあまり考えていない。
8	あなたは母国の家族と一緒に暮らしたいですか。 わからない。これまで考えたことがない。
9	母国でどのような準備をしましたが、あなたは日本語をどのようにして学びましたか。 EPAが決まってから母国で6か月、来日後に横浜で6か月学んだ。
10	外国から多くの介護人材が日本にやって来るためには、あなたは何が日本に必要だと思いますか。 日本人がフィリピンで日本の文化や仕事を紹介し、日本をもっと知ってもらうこと。

実地調査データベース例

介護福祉士の合格者を出した施設であり、日本で先駆的に外国人介護人材を受け入れきた。そして、現在は国家試験合格者と学校を修了した介護福祉士が 5 人働いている。さらに、今年の 5 月にはミャンマーから 24 人の技能実習生を介護人材として受け入れる予定であると話された。この受け入れに向け新たに寮を建設し、現在、ポブラで働いているミャンマー人の介護人材を彼らのサポーターとすると話された。次に、2019 年 9 月にポブラ国際研修センターを設立し、初めて来日する外国人技能実習生を対象に、1 か月から 2 か月の期間、日本での就業・生活する上で必要となる知識を習得させている。この研修センターでは介護職種を対象に、日本語や生活・専門知識、介護の技術などを教えている。また、今年度に運営開始を予定していた外国人介護人材を養成するための施設「ポブラ学園」は現在開校申請中であり、2021 年 4 月開校予定であると話された。開校後は外国人介護人材を養成し、ポブラだけでなく他の介護施設にも外国人介護人材を受け入れてくれるよう働きかけたいと話された。またネパールに介護学校「ポブラ学園ネパール校」を設立し、現在 1 学年 36 人、計 2 学年で 72 人の在籍者がいると話された。そしてネパールでは、新設された在留資格「特定技能」の試験が 2019 年 10 月初めて実施された。日本で特定技能の介護として働くためには、日本語検定 4 級の試験、介護に関する日本語テスト、介護に関する技能テストを受けて合格する必要がある。この試験に関してネパールではインターネットによる受験の申し込みを行ったところ、受験希望者が殺到し抽選により受験者が選ばれ、その結果「ポブラ学園ネパール校」の生徒は 10 人しか受験できず、将来は日本で働くという希望を持ちながら学んでいる学生に不安が広がっていると話された。一方、フィリピンでは他国に先駆けて最初に特定技能の試験が実施され 1,000 人が合格し、2020 年の春には来日する予定であり、今後はモンゴル、ミャンマー、カンボジアで特定技能の試験が実施されると話された。

次に、ポブラで働く外国人介護人材に本校生が聞き取り調査を行った。対象は、フィリピン人 EPA 介護福祉士合格者 1 人とフィリピン人 EPA 介護福祉士候補者 2 人、そして日本の学校を修了し介護福祉士の資格を取得した在留資格「介護」のネパール人 1 人、日本語学校に通うネパール人留学生の 1 人、在留資格「留学」の中国人 1 人の計 6 人である。日本に来た理由について、2 人のフィリピン人 EPA 介護福祉士候補者はサウジアラビアへ行くことを考えていたが家族に反対され、女性にとって安全で治安のよい日本に行くことを勧められたと回答した。また、ネパール人留学生の介護人材の女性は、ネパールでは女性は夜 8 時以降に外出するのは危険なのに対して、日本は安全なので来たと回答した。次に日本に来て困っていることは何かという質問に対して、6 人全員が日本語習得の問題をあげた。そして、将来は日本にいたい、母国に帰りたいという質問に対して、6 人のうち 4 人が将来も日本で働き続けたいと回答した。最後に、今後、日本が海外から多くの介護人材を受け入れるために何が必要かという質問に対して、6 人全員が日本語習得への支援と回答した。特に、日本で最初に介護福祉士の国家試験に合格し、日本に 10 年居住し永住権を申請しているフィリピン人介護福祉士は、「私たちは日本語を学びたいと思っているが、介護の仕事が過酷なため肉体的にも精神的にも疲れ、仕事以外の時間に自ら日本語を学ぶことは難しい」と回答し、日本の介護施設における労働環境の改善を訴えた。

日本の介護現場の現状と介護現場で働く外国人の現状を知ることができ、非常に有意義な体験であった。今後は、この経験を課題研究活動に活かしていきたいと思う。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関して、成果集にデータベースとしてまとめ生徒と他校に配布した。また、調査結果を個人の論文に反映し、校外の発表会で発信した。

フィールドワーク in 池田 2020 報告書例

~~~~~  
1 年 1 組 31 番 堀 満里菜  
~~~~~

私が老人ホーム「ポブラ」のことを調査しようと思ったきっかけは、介護の場での外国人労働者、または、留学生の人たちの現状を知りたかったからである。

実際に聞き取り調査を通して、新たな問題を発見することができた。ネパールでは特定技能の資格試験をとりあえず受けてみようと思いを申し込み、あまりにも多数の人が応募したため、本当に試験を受けたかった人たちが抽選で落ちてしまったことだ。抽選に通ったのに途中でキャンセルする人がいて、ポブラネパール校でも 60 人申し込んでいたが、10 人しか試験を受けることができなかったという話を聞いて、とても胸が痛くなった。本当に介護職員になりたい人の受験資格がなくなるということはあってはならないことだと思う。このことから、介護の資格を取るための試験の制度が十分でないことがわかった。私は、このような人たちのためにも募集枠の拡大、受験する動機を書いてもらうなど、介護職に就きたい人たちに受験する機会をもっと増やすなどの対応をするべきだと思った。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(10) 国内フィールドワーク「フィールドワーク@ワン・ワールド・フェスティバル 2020」における課題研究活動

目標

NGO・NPO や国際機関・政府機関・教育機関・企業などの 100 を超える出典団体が国際協力や社会的課題解決の取り組みを幅広く紹介する西日本最大規模のイベントにおけるフィールドワークを通して、SGH の課題である「移民研究」をはじめとする社会的課題や日本の未来の選択肢を考える契機とすることを目的とする。

対象学年

1 年次生全員 119 人

調査対象

ワン・ワールド・フェスティバルの
出典団体



UNHCR ブースでの調査活動

調査日

2019 年 2 月 1 日(土)

内容

ワン・ワールド・フェスティバルにおける各自の調査活動



プラン・インターナショナル
ブースでの調査活動

内容の詳細

本校 1 年次生全員がカンテレ扇町スクエアおよび北区民センターを会場に開催されたワン・ワールド・フェスティバル 2020 に参加して、フィールドワークを実施した。ワン・ワールド・フェスティバルは、「国連持続可能な開発サミット」で提言された SDG's が示す 17 の目標と理念を共有して、様々な団体・機関と出会い、情報と出会い、人と出会って、今後につなげるための「きっかけ」や「場」を提供することを目的に開催された。NGO・NPO、行政をはじめとする各種団体、学校、企業、教育機関等、100 を超える出典団体が国際協力や

社会的課題解決の取り組みを幅広く紹介する西日本最大規模のイベントである。これに参加することで SGH の課題である「移民研究」をはじめとする社会的課題や日本の未来の選択肢を考える契機とすることを目的としてフィールドワークを実施した。生徒たちは事前に考えた調査項目について、各ブースを訪れメモをしながら熱心に聞き取り調査を行った。中には、UNHCR の難民キャンプで実際に使用されるテントを訪れ、職員より難民がかかえる諸問題に関する説明を受け、これに対して質問した生徒たちもいた。この日の活動を終えた生徒たちは聞き取り調査した内容をワークシートにまとめた。国際社会が抱える様々な課題について考える非常に良い機会となった。

ワン・ワールド・フェスティバル報告書例

訪問したブース等の名称

(公財) 大阪国際交流センター

聞きたいこと / 調査したいこと

活動内容と相談内容について

調査したこと / わかったこと

国際交流・教育の促進を行い、また外国人のための相談窓口を設けている。日本に住む外国人に対して、防災教室などのサポートを行っている。相談窓口は 5 言語に対応しており、相談内容は日本語教師の募集など教育について、仕事の紹介、言葉が通じる病院の 3 つが多い。今後の目標は日本人と外国人で支援する 支援されるという関係を構築すること。

訪問したブース等の名称

Friedensdorf International/

ドイツ国際平和村

聞きたいこと / 調査したいこと

活動内容について

調査したこと / わかったこと

けがや病気などで治療が必要な 2 ~ 11 歳の子どもたちをドイツで治療し、母国へかえす。親との信頼関係のためにも、在留資格が取れない 2 ~ 11 歳の子供を受け入れている。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(11) 国内フィールドワーク「フィールドワークin六甲「灘わくわく会」」における課題研究活動

目標

「灘わくわく会」における外国人の子どもおよび外国にルーツをもつ子どもに対する学習支援を見学するとともに、運営側および子どもたちに聞き取り調査を実施して、外国人の子どもたちへの支援の現状や課題を考える契機とする。

対象学年

1年次生1人、2年次生3人

訪問先

六甲地域福祉センター 神戸市灘区八幡町4-8-28

調査対象

灘わくわく会 代表 村山勇 様

灘わくわく会 支援対象者の子ども 12人

灘わくわく会 子どもの親 1人

実施日

2019年9月21日(土)

内容

- 1) 運営側より支援内容の説明
- 2) 学習支援の様子を見学
- 3) 運営側および子どもたちへの聞き取り調査
- 4) 本校生による外国人の子どもたちへの学習支援
- 5) 本校生による謝辞

内容の詳細

2019年9月21日(月)に、「SGHフィールドワークin六甲 灘わくわく会」を実施した。本校1年次生1人と2年次生4人の計5人が参加した。外国人の子どもや外国にルーツを持つ子どもたちに学習支援をしている「灘わくわく会」を訪問し、学習支援を見学するとともに、運営側および子どもたちに聞き取り調査を実施して外国人の子どもたちへの支援の現状や課題を考える契機とすることを目的に実施した。

まず運営側として代表の村山氏のお話を聞いた。支援している子ども数は25人で、国籍はフィリピン、ドミニカ共和国、ラオス、中国、ベトナム、ネパール、オーストラリア、ニュージーランド、タイ、パキスタンである。年齢は就学前6歳から中学3年生までを支援の対象としている。これに対して、支援員は16人で、全員がボランティアで支援を行っている。多くが小学校・中学校・高等学校の元教員である。次に運営上の課題について、第一に運営資金の問題をあげられた。灘わくわく会では子どもたちからお金はとつ



「灘わくわく会」にて
フィールドワーク



「灘わくわく会」にて
子どもへの学習支援の様子

ていない。兵庫県日本語ボランティアネットワーク等からの資金にたよっている。資金は支援員の交通費と教材に使用している。多くの子どもを支援するには多くの支援員が必要であり、資金面では厳しいのが現状である。二番目の問題は支援員の確保である。支援員は元学校の教員が多いが高齢化が進み人材の確保が困難である。兵庫県国際交流協会などを通して支援員を募集しているが、支援員の確保は困難で、大学生など若い人の支援がほしいと述べられた。

次に本校生は子どもたちへの学習支援を見学するとともに、学習支援の手伝いを行った。この日は12人の子どもが参加した。来日して1か月もたない子どももいれば、学校の宿題をしている子ども、受験勉強をしている子どもなど、様々なニーズに対応しなければいけないことがわかった。

この日の活動を終え、身近なところで外国人の子どもたちの支援が行われており、そこでは様々な課題があることがわかり有意義な経験であった。

ちなみにこの日参加した本校生はその後も、灘わくわく会の活動に参加しボランティアで学習支援の手伝いを継続的に行っている。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関しては、報告書を作成し冊子にまとめて配布し生徒全員で共有した。また、生徒の論文に反映させると共に、学会等の校外発表会において研究成果を発信した。

貢献活動

今回のフィールドワークを契機に、本校生が「灘わくわく会」の活動に継続的に参加し、子どもたちへの学習支援をボランティアで行っている。

「フィールドワークin六甲「灘わくわく会」」報告書例

~~~~~  
1年2組10番 喜久川 太陽  
~~~~~

私が今回のフィールドワークに参加した理由は、前回の姫路でのフィールドワークで質問をした際、外国人労働者から言語について困っているという声を多く聞いたからだ。そこで、日本を訪れた外国人労働者の子供はどのように日本語とともに生活しているのかを、フィールドワークを通して少しでも知ることができればと思い参加した。

まず、始まってすぐに気付いたことは、自分が想像していたよりも上の年齢の方たちが教えていたということだ。運営責任者の方によると、殆どが学校の教師を退職された方がボランティアとして参加しており、若い先生を募集しているがなかなか集まらないそうだ。教える側が少ないながらもマンツーマンで教え、生徒に向き合いながら教えているように感じた。

今回質問した中で、一番大きな問題と感じたのが生徒の保護者の日本語についてだ。生徒に関しては特に大きな問題はなく生活しているように見受けられたが、その生徒の保護者は学校からの便りなどを理解できないなどの問題があった。保護者としても日本語の講座は受けたいがまだ受けていないという声があったが、家事をしながら日本語を学習することは難しいのではないのかと感じた。

今回のフィールドワークを通して、外国から来て、日本の様々なことに慣れていかなければならない子供の支援に関しては不十分で、教える人材や資金、情報が不足しているのが現状であると感じた。恥ずかしながら自分の心のどこかに何か日本の子供と違うところがあると思っていた。しかし、当たり前だが違いというものなど存在していないと感じたと同時に、どこか「外国から来た」というイメージだけで壁を作り分けている自分が恥ずかしくなった。もう一度、自分の考え方を見直していきたい。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(12) 国内スタディツアー「スタディツアー@兵庫県立大学・神戸市外国語大学・立命館大学」における課題研究活動

目標

課題研究活動の一環として、大学を訪問し移民の研究者による講義およびディスカッションを通して、移民研究を深める契機とする。

対象学年

1 年次全員 121 人 留学生 1 人を含む

訪問先

兵庫県立大学
神戸市外国語大学
立命館大学

実施日

2019 年 7 月 18 日(木)

内容

- 1) 大学側による説明
- 2) 移民研究者による講義および質疑応答
- 3) 施設見学、キャンパスツアー

内容の詳細

スタディツアー@兵庫県立大学

国際高等学校 1 年次生 40 人が「スタディツアー@兵庫県立大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、兵庫県立大学の神戸商科キャンパスに到着した。

まず、兵庫県立大学国際商系学部の職員より大学の説明を受けた。今年度より兵庫県教育委員会から本校は兵庫県立大学商系学部と連携する高大接続改革推進事業の国際力強化モデル校として指定され、専門的な教育資源を活用した発展的な学習を通して、高校段階から高度な英語力と国際的視野を育み、国際化に対応した特色づくりを推進することになったと説明を受けた。

次に、国際商系学部 社会情報学部から講師の龔園園氏による「コークの味は国ごとに違うべきか?」というテーマで講義があった。最初にグローバル化について説明された。グローバル化とはヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて移動し、文化や市場、経済などの統合が進む現象であると話された。グローバル化が進む中で、同じような商品やサービスが世界中に流行するケースが増えていることを指摘され、その上で国によって文化的、制度的、経済的な違いがあるため、現地のニーズや好みに対応することが企業にとって重要な戦略になると述べられた。現地の習慣や宗教に配慮した商品開発の必要性を訴えた。最後に、グローバル化において、多様なバックグラウンドを持った人がいるという視点を持ち、多様性を認めあう考え方が重要であると話された。

講義の後、本校卒業生 2 人が大学での生活について紹介をした。そして課題研究活動に取り組む 1 年次生に対して、この時期にしっかり取り組むことが将来にとって大切であるとアドバイスをした。

その後、兵庫県立大学の食堂で食事を済ませた後、キャンパスを見学し、バスで帰校した。



龔氏による講義の様子

スタディツアー@神戸市外国語大学

国際高等学校 1 年次生 40 人が「スタディツアー@神戸市外国語大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、神戸市外国語大学に到着した。

大学説明を受けた後、総合文化准教授である太田悠介氏の講義を受けた。講義のタイトルは「移民社会フランス - 第二世代の視点から - 」であった。まず、フランスは生地主義をとり、フランスでは両親がフランス人ではないがフランスで生まれた「移民二世」と呼ばれる人がいることを説明された。その上で、フランス人とは「混ざり合うフランス人」なのか「生粋のフランス人」なのかという、「フランス人とは誰か」という議論が 1980 年代にあったと指摘された。そのなかで、「生粋のフランス人」は「混ざり合うフランス人」である第二世代に対して「パンを奪う」などといって非難をしてきた。第二世代は親とは違い、帰るべき国はフランス以外になく、また親とは異なる文化を持っている。それにもかかわらず、第二世代は自分の生まれたフランスを否定され「自国に帰れ」と差別を受けてきたと前置きをしたうえで、両親の母国を知らず生まれた国まで否定されることは第二世代にとってはアイデンティティの喪失につながる問題であると話された。

一方、日本では 1990 年の入国管理法改正により今後は移民第二世代が登場することになると指摘された。彼らは親の祖国と日本のはざままで生きることになり、彼らの「生の重み」をどのように受けとめ共生していくかを考えるうえで 1980 年代のフランスの事例と重ね合わせて検討することが課題であると述べられた。

今年度、ディベート課題研究活動においてフランスの移民政策の学習に取り組んでいる 1 年次生にとっては、非常に参考になる講義であった。この経験はディベート課題研究活動に大いに活用できるものとなった。

講義の後は、構内で昼食をとったあとキャンパスツアーを行った。その後は、教室で神戸市外国語大学に在籍する本校の卒業生との交流を行った。参加してくれた卒業生は 3 人で、その中には SGH 課題研究活動に取り組んだ学生もあり、本校の 1 年次生に向けて課題研究活動に取り組む上での助言をするとともに、励ましの言葉を送った。

すべての活動を終えて、バスで帰校した。

スタディツアー@立命館大学

国際高等学校 1 年次生 40 人が「スタディツアー@立命館大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、立命館大学の衣笠キャンパスに到着した。

まず、立命館大学文学部教授である米山裕氏の講義を受けた。講義のタイトルは「「境界」と「移動」について考え直す」であった。

最初に、学校を取り上げ、誰が学校に入れるのか、入る資格は何か、どうやって資格の有無を判定するのか、資格を持たない人は学校に入れないのか、と問われた。次に、駅を取り上げ、誰が駅に入れるのか、入る資格とは何か、どうやって資格の有無を判定するのか、資格を持たない人は駅に入れないのか、と問われた。米山氏は、境界により仕切られた場所はそれぞれ意味を持つと考えられているが、実は逆であり意味を持つから境界を設定して人の出入りを制限すると「境界」の意味を説明された。

次に、人はなぜ「境界」を作るのかというお話をされた。領域を設定し、その「境界」を設けるのは人間社会であると指摘された。人間社会にはさまざまな「境界」があり、「国境」や「国籍」もこれにあたる。「国境」や「国籍」は、国民の管理とそのためシステムであり、国民と非国民を峻別し、外国人を合法と非合法で峻別するための仕組みであると説明された。つまり非合法



米山氏による講義の様子 1



米山氏による講義の様子 2

な人々を作り出すシステムが「国境」や「国籍」であり、これらはすべて先進国が作り出していると話された。作り出された「国境」や「国籍」により峻別された人々は差別にさらされており、この差別はなくすべきだがなくならないのが現状であると述べられた。

次に、心の中の壁をテーマに国民という概念について説明があった。米山氏は、純粋な日本人はいるのかと問われた。そもそも人は古代より移動しており、日本人のルーツは大陸であったり、南方であったりする。米山氏は一人の女性の写真を提示し、何人に見えるかと問われた。答えは日系アメリカ人であると指摘されたうえで、見た目は日本人でも日本人ではない人が存在すると前置きをしたうえで、彼女は自分のアイデンティティについて悩んでいるという事例をあげた。

最後に、「移動」する人について研究する意味は、自分の「世界」を開くことであると述べられた。また、「共存」とは「受け入れる」ことではなく、対等に暮らすことであると話された。

米山氏の講義を受け、改めて「移民」の意味について考え直す機会となった。ディベート課題研究活動において、アメリカ合衆国とフランスの移民政策を研究している1年次生にとってよい学習の機会となった。

その後は、教室で立命館大学に在籍する本校の卒業生との交流を行った。参加してくれた卒業生は本校の1年次生に向けて課題研究活動に取り組む上での助言をするとともに、励ましの言葉を送った。

講義を終えた後は、大学説明を受け、立命館大学の学生によるキャンパスツアーを実施した。その後、構内で昼食をすましてバスで国際高校に帰校した。

「スタディツアー@兵庫県立大学・神戸市外国語大学・立命館大学」報告書例

兵庫県立大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・グローバル統合は必ずしも最適というわけではない。現地の習慣や宗教に配慮した商品を開発することも大切。
 - ・一国内でも同じことが言える。多様なバックグラウンドを持った人がいるということを忘れてはいけない。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・龔先生自身も移住者として日本に来た。文化の違い（中国人同士の会話の口調が強く、日本人からするとけんかをしているように見える。会話のタイミング、間合いが異なる。ユーモアセンスが異なるなど）があることに気づき、日本に適應することができた。日本には独自の文化や言語があるので、文化の違いを理解することが非常に大切。
 - ・異文化をうまく理解することができず、カルチャーショックを受けてしまうことが多い。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・現在、社会は大きく変化している。その中でも企業という観点からみると、たくさんの人からの支持を得られるような商品を作ることは簡単なことではない。色々な国と協力していくことが不可欠。

神戸市外国語大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・両親がフランスではないがフランスで生まれた「移民二世」と呼ばれる人たちがいる。フランス人とはどのような「混ざり合うフランス人」か「生粋のフランス人」のどちらなのか、「フランス人とは誰か」という問いが1980年代フランスの争点。また、現在日本では改正入管法が施行されており、今後移民第二世代が登場することになる。親世代の祖国と日本のはざまに生じるであろう「生の重み」をどのように引き受け、共生していくのか。1980年代のフランスと重ね合わせて考えていく必要がある。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・親が移民であってもフランスで生まれ、フランス語を話し、フランスの文化や習慣を取り入れているのであれば、子どもは国籍上フランス人であるというだけではなく、フランス人として対等に扱われるべきである。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・差別は無知の状態から始まるので、しっかり移民について知ることが大切。人種を見るのではなく、中身の部分を見られるような人間になりたい。

立命館大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・「境界線」は何のためにあるのか。その境界線を越えて「移動」することにはどのような影響があるのか。
 - ・境界は人が勝手に考え出した壁であり、その壁で分けられている人の中でも差別が起きている。
 - ・色々な国境の壁についての話。国境の壁には物理的な壁だけでなく、心理的な壁もある。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・一人ひとり抱えている問題は異なり、中には事例のないような理由で逃げてきている人もいる。どこからを移民とするのか、どこからを難民とするのかを定義だけで判断することは難しい。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・これからの私たちの課題は正解が見つけれ出されていない問いの答えを追求していくことだと思った。
 - ・物事は全て論理的な話では済まない。見た目による偏見や差別はいつの時代も存在してしまうのは悲しい。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(13) 国内スタディツアー「スタディツアー@関西学院大学×WWL」における課題研究活動

目標

関西学院大学が主催する“AI 活用 for SDGs”「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」～Society5.0 に向けた WWL リーディングプロジェクト～ワークショップに参加することで、本校生が取り組んでいる移民研究について AI を用いた解決方法を考える契機とする。

対象生徒

2 年次生 2 人、3 年次生 1 人、計 3 人

訪問先

関西学院大学 上ヶ原キャンパス
西宮市上ヶ原一番町 1-155

実施日

2019 年 8 月 1 日(水)

内容

- 1) 基調講演
- 2) “AI 活用 for SDGs”についての講演
- 3) グループワーク



発表の様子

内容の詳細

関西学院大学にて「スタディツアー@関西学院大学×WWL」を実施した。目的は、“AI 活用 for SDGs”「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」～Society5.0 に向けた WWL リーディングプロジェクト～ワークショップに参加することで、本校生が取り組んでいる移民研究について AI を用いた解決方法を考える契機とすることである。

最初に、二宮哲也氏による基調講演が行われた。二宮氏は農産物にチップを埋め込み生産管理や商品の流通経路の分析に用いるシステムに AI が活用されていることを例にあげ、AI 活用による社会発展の可能性について話された。

次に“AI 活用 for SDGs”というテーマで講演会が行われた。神余隆博氏は、SDGs11「住み続けられるまちづくり」を具体例に、AI を用いた建築技術の話がされた。続けて、巴波弘佳氏が AI 技術の概要と AI 活用について話され、AI を活用することで現実社会の課題を解決することの重要性を説かれた。

午後からは、グループワークが行われた。この日集まった高校生が 5 人 1 組になって、課題解決のために AI をどのように活用できるかについて討論した。日本の女性活躍促進と外国人労働者の雇用との関係を研究する本校生はジェンダー平等を実現するという課題解決のグループワークに参加し、自らの研究成果をもとに積極的に討論に参加した。また「災害時における外国人への支援」をテーマに課題研究に取り組む本校生は自らが調べてきたデータをとりあげ世界平和を構築するというグループ討論に参加した。もう一人の生徒は、貧困を解決するためのグループ討論に参加した。討論の後、グループごとに意見をまとめて発表が行われた。本校生は発表においてもリーダーシップを発揮して関西学院大学の学生や教員から評価の言葉をいただいた。

普段から移民研究をしている本校生にとって、AI を活用した課題解決について考えるよい契機となった。

成果および成果の発信

このワークショップの成果は各自の課題研究活動に活用し、論文としてまとめ発表した。

「スタディツアー@関西学院大学×WWL」報告書例

~~~~~  
2 年 3 組 29 番 藤原 翼  
~~~~~

このワークショップを通して、僕はグループでアイデアを出し合うことで、自分自身では考えることができなかったことを考えることができた。自分一人で考えるのではなく、意見を交換し合う大切さを知った。また基調講演を聞いて、これから AI をどう活用すべきかを考えるうえで、今ある技術や実際に行われている事業を理解することが大切だと思った。グループで発表をしている間にたくさんの質問をされた。私は戸惑ってしまい発言することができなかったので、もっと知識が必要だと感じた。今回のワークショップで得た知識をこれからの研究に活かしたい。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

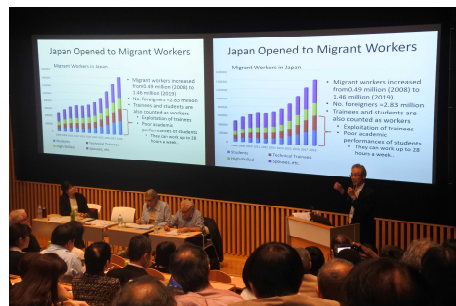
(14) 国内スタディツアー「スタディツアー@国際開発学会 & 人間の安全保障学会2019共催大会」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、「国際開発学会 & 人間の安全保障学会2019共催大会」に参加し、日本における最先端の移民・難民に関する研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とする。

対象生徒

2年次生2人



基調講演の様子

訪問先

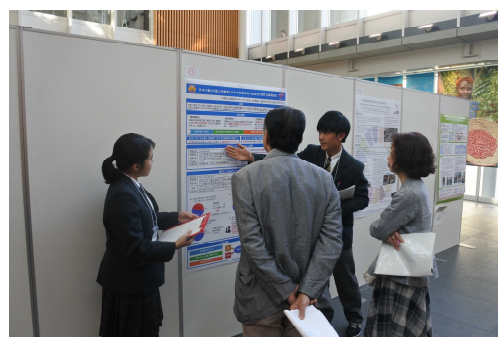
東京大学 駒場キャンパス 東京都目黒区駒場3-8-1

実施日

2019年11月16日(土)、17日(土)

内容

- 1) ポスターセッションでの本校生による研究発表
- 2) 基調講演およびプレナリーパネルへの参加
- 3) 研究報告への参加



2年次生によるプレゼンテーション

内容の詳細

SGH課題研究に取り組む本校生2年次生の2人が、東京大学駒場キャンパスで開催された「国際開発学会 & 人間の安全保障学会2019共催大会」に参加した。

1日目は、東京大学駒場キャンパスMMホールにて行われたポスターセッション部門において、本校生が研究発表を行った。テーマは「日本の外国人労働者に対する災害教育に関する事例研究」である。日本に居住する外国人労働者に焦点を当てて、行政や外国人労働者を雇用している企業は外国人労働者に対して災害教育を十分に提供しているのかという点に着目し、外国人労働者に対する日本の災害教育について考察することを目的とした研究報告を行った。地方自治体の多くが外国人労働者に対する災害教育を行っていない事例をデータで紹介し、姫路で行った調査結果やアンケート調査から日本で働く外国人労働者の多くが災害教育を受ける機会がないことを報告した。その上で、災害発生時において日本で働く外国人労働者の命を守るために、国や自治体や企業が外国人労働者に対する災害教育を行う必要性を訴えた。この学会は、国際学会であり多くの外国人研究者が本校生のポスター発表を聞いてくださり、本校生は英語でプレゼンテーションおよび質疑応答を行った。また、専門家による審査を受けた。日本の研究者を含めて、聴衆に対して計7回の発表を行った。研究者からは、外国人労働者に対する災害教育に関する本格的な調査研究はなく、高校生がこのテーマで研究を行っていることが評価できるとコメントをいただいた。一方で、災害教育の定義を明確にすることなど、多くの助言をいただいた。このような国際学会の貴重な場で研究成果の報告ができ、多くの助言をいただいたことは本校生の今後の研究活動を進めていくうえで非常に有意義な経験であった。

ポスターセッション後は、基調講演が行われ本校生も参加した。テーマは「難民/移民そして教育 - グロー

バルコパクトの時代における課題」であった。講師は、オックスフォード大学のJeff Crisp博士、国際移住機関本部上級政策顧問のEva Akerman Borje女史、国連UNHCR特別顧問の滝澤三郎氏であり、講演および質疑応答はすべて英語で行われた。基調講演の後には、プレナリーパネルが行われ、ロヒンギャ難民でユニクロで働くカディザ・ベコム氏、法務省移民政策局政策課長の福原申子氏、東京大学准教授のジャクリン・アンダール氏、栄鑄造所社長の鈴木隆史氏による「仕事と就労」というテーマでパネルディスカッションが行われた。日本で難民が働くことの現状についての報告があり、その上で難民が日本で働くことの重要性について討議が行われた。このプレナリーパネルもすべて英語で行われた。日本で働く難民の現状と課題を知ることができ、とてもよい勉強になった。

2日目、通常セッションおよび特別セッションが行われた。本校生2人は各会場に分かれて、通常セッションに参加した。本校2年次生の高橋は、“Blockchain and Refugee Protection”および「東日本大震災以降の防災と人間の安全保障:レジリエンスの視点から」、そして午後からは「紛争研究報告」に参加した。同じく2年次生の西條は「国際開発とボランティア」および「開発協力において青年海外協力隊は何をもたらしたか」、そして午後からは「貧困のフィールド分析研究報告」に参加した。報告は英語または日本語で行われた。移民や難民に関する最新の研究報告について学ぶよい機会となった。

なお、12月19日に国際開発学会・人間の安全保障学会2019実行委員会が開催され、審査の結果、本校生の研究成果が人間の安全保障学会奨励賞を受賞することが決まり、表彰状を授与された。

成果および成果の発信

今回の学会で報告した内容は本校の最終発表会において芦屋ルナホールにて、全校生および一般の来場者を対象に報告を行った。なお、このスタディツアーの内容は各自が報告書を作成し、成果集としてまとめて全員に配布することで成果の普及をはかった。

「スタディツアーin国際開発学会 & 人間の安全保障学会2019共催大会」報告書例

2年2組17番 西條 仁那

1日目は朝早くからの移動だったが、着いた時にはもう発表の開始時間が迫っており、打ち合わせもせずに最初の発表をした。聴衆の中には審査の人が含まれていたと聞き、少し残念だった。また国際学会だったこともあり、何人かには英語での説明をした。相手の言っていることを完全に理解できたわけでもなく、自分が言いたいことを完璧に伝えることができたわけでもなかったが、なんとかうまくいったと思う。ポスター発表だったので、聞きに来てくださった人から話を聞いたり、意見交換ができたことが印象的だ。回答に行き詰まったこともあったが、全体的には成功したと思う。発表を終えて昼食を済ませた後、ホールで4人の方による基調講演を聞いた。その中には今回私達を誘ってくださった元国連難民高等弁務官事務所駐日代表の滝沢氏もいらっちゃって、本当に内容の濃いお話を聞くことができた。全てが英語によるもので、あまり理解できなかったことが残念だ。そのあとはパネルディスカッションを聞いた。ロヒンギャ難民でユニクロで働かれているカディザ・ベコムさんの姿もあった。非常に分かりやすく、心に残るお話をしてくださった。1日で多くの話を聞いて疲れたが、収穫も多かった。

2日目は多くの報告やセッションがあり、以前から楽しみにしていた。ラウンドテーブルディスカッションや研究報告、企画セッションに参加することができ、それぞれの分野で違う人からお話を聞くことができた。最初に参加したのは、国際開発とボランティアというラウンドテーブルディスカッションだ。この企画への参加は興味深いものになるとは思っていたが、想像以上だった。特に、甲南女子大学の中村安秀氏は、海外でのボランティアの楽しさをお話しされ、前からボランティアに興味を持っていた私はとても心を動かされた。そして、4人の方の話が終わってからは聴衆から意見や質問が飛び交った。話がボランティアの根本的な内容になるにつれて面白くなっていった。私もたくさん考えさせられ、何度も納得させられた。非常に面白かった。

その後、開発教育において青年海外協力隊は何をもたらしたのかという内容の企画セッションを聞いた。ボランティアの話に比べて内容が格段と難しかった。海外青年協力隊に関して十分な知識を持っていなかったため、どのような活動をしているのかということを知ることができてよかった。

最後は貧困のフィールド分析という研究報告を聞いた。2人の話を聞いたが、1人目のバングラデシュのある村での携帯電話サービスの利用状況についての報告が面白かった。携帯電話の利用を許可されていない人がいることや、携帯電話の利用目的で2番目に多かったのが恋愛というのが興味深かった。

今回のさまざまな講演で得た知識を今後の自分の研究に活かしたい。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(15) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政務学会2019年度年次大会」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、「移民政務学会2019年度年次大会」に参加し、日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とする。

対象学年

2年次生12人および3年次生7人 計19人

訪問先

立教大学 池袋キャンパス
東京都豊島区西池袋3-34-1

実施日

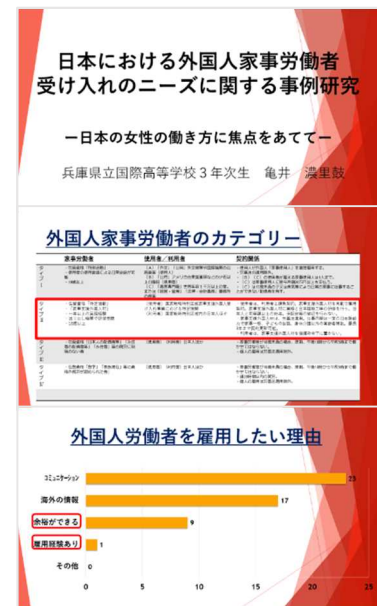
2019年5月25日(土)、26日(日)

内容

- 1) シンポジウムへの参加
- 2) 自由報告部会への参加
- 3) 「社会連携セッション」における本校生による発表



本校生による発表



生徒の発表用
パワーポイント例

内容の詳細

SGH課題研究に取り組む本校生2、3年次生の19人が、立教大学池袋キャンパスで開催された「移民政務学会2019年度年次大会」に参加した。

1日目は、まず難民インタレストグループに参加した。テーマは「難民の高等教育と就職」であり、ミャンマーのロヒンギャ族であるベコム氏のお話を聞いた。彼女は夫が難民認定を受け、夫の呼び寄せにより来日した。その後、青山学院大学を卒業し、現在はユニクロに就職して池袋で働いている。彼女は、難民は教育を受けることにより社会にとって危険な存在ではなくなると述べた。その上で日本は難民を留学生として受け入れているが、留学が認められるのに時間がかかるため、学べる年齢に配慮して認定手続きを早くしてほしいと訴えた。質疑応答では、本校生がベコム氏に質問をした。

次に、特別企画セッション「急変する外国人労働者受け入れ政策 - 現状と2020年代に向けた課題」に参加した。講演者として、東京出入国在留管理局局長の福山宏氏が登壇され、外国人労働者受け入れの現状について報告された。強制的帰国者が1万人にのぼる現状について、福山局長は「国境を守る」という入国管理局として立場を強調された。質疑応答において、在留資格「特定技能」の新設に伴い、技能実習生が最長8年間家族滞在を認められないのは人権上の問題ではないかという質問に対して、局長は政治的な問題であり入国管理局としては関与する余地はないと回答した。

最後に、ミニシンポジウムに参加した。テーマは「多文化共生と日本の言語政策」で、日本言語政策学会から臼山氏と松岡氏、木村氏が登壇され、日本の外国人住民支援・多文化共生政策において、日本語教育および母語保障という二つの言語政策の位置づけはどうあるべきなのか、従来の経緯と現状を踏まえて報告があった。岩手県では外国人の妻が日本語を理解できないために津波で死亡した事例をあげ、社会統合としての一定レベルの日本語教育の必要性と還流型外国人労働者に対応するために、多言語での支援の必要性を指摘された。また、母語保持教育は自己肯定観を生み、親子のきずなを維持するために重要であるという報告があった。

様々な立場の専門家による様々な見地からの報告を聞き、移民を取り巻く現状には様々な課題があることを改めて認識することができた。移民研究に取り組む本校生にとっては非常に勉強になり、今後の研究をすすめる契機となった。

2日目、午前中は4つの会場で自由報告部会が開催され、それぞれの会場で研究者による研究成果が報告された。本校生19人は各会場に分かれて、自由報告部会に参加した。最新の移民政務について学ぶよい機会となった。

11時からは別会場で社会連携セッションが開催され、本校3年次生の3人が研究成果について発表を行った。一人目は前遥菜による「日本在住の外国人生徒の母語・母文化の継承 - ある高等教育に在籍する外国人生徒のエスノグラフィ」というテーマの研究報告が行われた。本校に在籍している一人の外国人生徒を調査対象に、エスノグラフィの手法に基づき、彼女を取り巻く社会ネットワークの状況、宗教を基盤とした母国との繋がり、家庭内での使用言語について調査を行い分析した。その結果、家庭内言語使用については、対話者だけでなく、場面や話題などに応じて使用する言語を選択していることがわかった。これにより確実に母語が使用される領域や場が確保されていることを報告した。次に、亀井濃里鼓による「日本における外国人家事労働者受け入れのニーズに関する事例研究 - 日本の女性の働き方に焦点をあてて」というテーマで研究成果の報告が行われた。日本は2013年国家戦略特別区域法により、女性の活躍促進や家事労働支援ニーズへの対応から国家特別区域において、家事支援活動を行う外国人を受け入れる事業を開始した。これについて本校の保護者を対象に外国人家事労働者を雇用に関する意識調査を実施した。その結果、外国人家事労働者を雇用したいというニーズは、その家庭における妻の労働形態に強く影響され、妻の労働時間が増加するほど外国人家事労働者の雇用に対するニーズは高くなることを報告した。最後に、田中乃愛が「日本における介護人材の受入れに関する事例研究 - 外国人介護人材の国際労働移動に焦点を当てて」というテーマで研究成果の報告を行った。外国人介護人材の国際的な移動に注目し、外国人介護人材の受入れ窓口を増やした日本がこれから外国人介護人材を確保できるかを、池田市の特別養護老人ホーム「ポプラ」での聞き取り調査を通して考察を行った。その結果、外国人介護人材の厳しい国際的獲得競争の中、介護人材の国際労働移動の観点から、日本は外国人介護人材の受入れ窓口を増やしても、目標とする年間6万人程度の外国人介護人材を確保できるかは不透明である、と報告した。3人の報告が行われた後、質疑応答の時間が設けられた。3人に対して会場の多くの専門家より質問があり、本校生はこれらの質問に対して丁寧に答えることができた。本校生が学会で発表するのは今回で6回連続となるが、このような場で多く生徒が発表できたことは非常に有意義でよい経験となった。今回の経験を今後の課題研究活動に活かし、さらにより論文の作成に努めていきたい。

午後は「日本の地域社会の実情から多文化共生を考える」というテーマでシンポジウムが開催され、本校生も参加した。日本の多文化共生に関する取り組みの現状とその課題を知ることができた。

この後、会場である立教大学池袋キャンパスを出発し東京駅から新幹線に乗り、この日の報告書を新幹線の車内で作成した。大阪駅に着き、すべての活動を終えて解散した。

成果および成果の発信

今回の学会での発表は、校内および校外の発表会でポスターにまとめて報告を行った。このうち1人は甲南大学リサーチフェスタ2019でロジカルデザイン賞およびアトラクティブプレゼンテーション賞を受賞した。

「スタディツアーin移民政策学会2019年度年次大会」報告書例

2年3組 17番 坂本 安里紗

1日目、私たちは立教大学でミニボジウムに参加し、たくさんの大学の先生方の講義を受けさせてもらった。その中でも2人の先生方の講義に興味を持ったので報告したい。

まず、1人目は、筑波大学日本語政策学会の白山利信先生で、主に在留外国人の人口や文化、言語政策についてだった。私たちがこれまで習ってきた通り、年々、外国人在留者の数は増え続けており、日本の少子高齢化に歯止めをかけるのに貢献していることが改めて分かった。そして、新たに知ったことで先生が一番大事だとおっしゃっていたのは、「外国人在留者」と呼ばれる方を「外国人市民」と呼ぶことで、日本人と外国人の壁をなくすというものがあった。それには、とても魅力的なものを感じた。

2人目は、帝京大学日本語教育学科の木村先生で、主に在留外国人の子供の教育状況に焦点を当てた報告を聞いた。現在、NHKによると8,600人、毎日新聞によると16,000人の外国人の子供が義務教育の学校に通ってない。また、夜間中学校の生徒の7割が外国人だという状況だと知り、とても驚いた。そのことがさらに私たちと彼らの間に壁を作っていると考えられる。私たち日本人が当たり前に行っている義務教育として小学校や中学校に通ってきたからこそ、私は社会のために何が出来るかを考え、よりよい社会を作りたいと思うきっかけになった。

2日目については、私が最も興味を持った自由報告 III について報告したいと思う。広島文教大学の岩下康子先生と法政大学大学院の山口聖先生のプレゼン内容が対照的だと岩下先生がおっしゃられていた。例えば、岩下先生は、先行研究として行った「帰国技能実習生フォローアップ調査」で技能実習生として得た技能の効果が96.9%役に立ったという結果だったことに対し、先生が自ら「帰国技能実習生の聞き取り調査」を行った結果、帰国後技能実習に関する業務について一人ひとりで少なかつたのだ。技能実習生という同じ内容について研究されているのにこのように矛盾が生じているので何か腑に落ちないものがあり、追究したいと思った。

今回の先生方の研究を聞いて、自分で分からないことがあったり、知りたいことがあったら受け身ではなく、自ら積極的に調べたり、質問したりするべきだと思った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(16) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会2019年度冬季大会」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、「移民政策学会2019年度冬季大会」に参加し、日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深め、研究成果を発表し専門家の助言を受けることで研究活動を深化させる契機とする。

対象学年

2年次生 3人

訪問先

長崎大学 文教キャンパス 長崎市文教町1-14

実施日

2019年12月7日(土)



本校生による学会発表

内容

- 1) 難民インタレストグループへの参加
- 2) 「社会連携セッション」における本校生による発表
- 3) シンポジウムへの参加

内容の詳細

移民政策学会2019年度年冬季大会が長崎大学で開催され、本校から2年次生3人が参加した。

まず、難民インタレストグループに参加した。国連UNHCR協会特別顧問の滝澤三郎氏による「特定技能と難民認定制度」という報告を聞いた。2019年4月に在留資格「特定技能」が導入された。「特定技能」で海外から日本にやって来るためには日本語テストや技能テストに合格するほかに、入国管理庁による犯罪歴などの審査が行われるため、今後は国内避難民が在留資格「特定技能」で日本にやってくる可能性があることを滝澤氏は示唆した。次に新設された入国管理庁の幹部職員から報告があった。在留資格「特定技能」の新設により、今後5年間でアジア諸国から34万5千人の外国人労働者の来日を予想していたが、2019年度の「特定技能」の受け入れは300人ほどに留まるという。「特定技能」の受け入れが進んでいない理由として、日本の企業側にとっては転職ができない在留資格「技能実習」の外国人労働者を受け入れた方が都合よく、「特定技能」を受け入れに関する「成功モデル」の欠如を指摘した。難民の受け入れと「特定技能」外国人労働者の受け入れのあり方について理解を深めることができたとともに、その課題について考えるよい契機となった。



質疑応答の様子

次に、社会連携セッションが開催された。このセッションでは、本校2年次生の岩谷優里が「日本に居住する外国人女性に対する支援について 外国人女性への日本語教育に焦点をあてて」、本校2年次生の清間有咲が「日本における外国人の子どもへの貧困に関する事例研究 子ども食堂に焦点を当てて」、本校2年次生の貞好亜彩が「『ハーフ』における言語能力と自己認識に関する研究 インドネシアと日本のハーフに焦点をあてて」という報告を行った。

岩谷は、日本に居住する外国人女性が抱える問題の1つに日本語習得があるが、外国人の女性には日本語を学ぶ機会が少ないことが問題視されていると指摘し、日本に居住する外国人の女性は日本語教育に関して支援を受ける機会を十分に享受できているかを検証した。調査の結果、日本に居住する外国人の女性23人のうち19人が「日本に来て困っていることは何か」という質問に対して「日本語」と回答し、13人が特に読み書きに苦労していると答えた。子どもが日本語教室に通う外国人の母親6人のうち3人が「今までに日本語教育を受けた経験はあるか」という質問に「経験がない」と回答した。これらの結果から、日本に居住する外国人女性が日本語教育を受ける機会は限られており、今後は新しく作られた外国人に対する日本語教育に関する法律の運用にあたり、外国人の女性が日本語教育を十分に受けられる仕組みを構築する必要性を訴えた。

次に、清間は現在、日本の子どもの貧困が問題視されているが、外国人の子どもや外国にルーツを持つ子どもの貧困に関する実態やその支援については十分に検証が行われていないことを指摘した。外国人の子どもに対して学習支援をしている「灘わくわく会」での調査結果から、9人中3人が貧困に該当した。これは厚生労働省が日本の子どもの貧困率を15.7%とした数値の約2倍にあたる。また、「子ども食堂」の存在を全員が知らなかった。近隣の「子ども食堂」のうち日本人の子どもと外国人の子どもをともに受け入れている施設はなかった。また、関西フードバンクの食料の流通を調べた結果、外国人を対象とした支援は3つの団体のみであった。NPO法人ケアアットが経営する子ども食堂「つながり食堂」では日本人の子どもと外国人の子どもを支援の対象にしているが、外国人の子どもたちへの情報発信はしていなかった。このことから、貧困な外国人の子どもへの支援を「子ども食堂」に焦点を当てて調査した結果、モノと情報の両方が外国人の子どもに届かない仕組みになっていることがわかった。一方で、日本人の子どもと外国人の子どもを支援する「子ども食堂」があることから、情報発信をすることにより貧困な外国人の子どもが「子ども食堂」の存在を知り支援を受けることができるようになる必要性を訴えた。

貞好は、インドネシアと日本の「ハーフ」に焦点をあてて、特に言語能力と自己認識について探ることを目的に研究を行った。調査の結果、インドネシアと日本の「ハーフ」25人のうち19人が日本国籍を持ち、3人は日本とインドネシアの二重国籍を保持しているが将来的には日本国籍を選択すると回答した。自己認識に関しては、「ハーフ」でよかったという経験があった者は、自分は日本人でもありインドネシア

日本における外国人子ども貧困に関する事例研究

—子ども食堂に焦点をあてて—

兵庫県立国際高等学校2年次 清間 有咲

研究の目的

日本の子どもの貧困立(17歳未満)は15.7%であり、日本の子どもの6人に1人が貧困である。
厚生労働省(2010)

これを受け、2013年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が制定され、日本に居住する外国人の子どもへの貧困についての調査および研究はすすんでいない。

↓

日本における外国人の子ども貧困の現状とその支援のあり方を探ることを本研究の目的とする

調査結果3-1

1.子ども元気ネットワーク兵庫
2.外国人失業支援

本校生による発表パワーポイント例

人であると回答する傾向にあり、「ハーフ」としてよい経験がなかった者ほど、自分は日本人だがややインドネシア人だと思うという回答をする傾向があったと報告した。結論として、日本のパスポートとインドネシアのパスポートではビザなしで入国できる国に大きな差があることなどを主因として、日本とインドネシアの「ハーフ」は圧倒的に日本国籍を持つものが多い。自己認識については、言語能力や居住経験も影響するが、それ以上に「ハーフ」としてどのような経験を経てきたかなどの社会的要因による影響が大きいと指摘した。

3人の発表の後、質疑応答が行われた。専門家より多くの質問をいただき、生徒は丁寧に回答した。本校生が移民政策学会で発表するのは今回で7回連続となるが、このような場で多く生徒が発表できたことは非常に有意義でよい経験となった。今回の経験を今後の課題研究活動に活かし、さらにより論文の作成に努めていきたい。

社会連携セッションではその後、筑波大学の明石純一氏と佐々木優香氏より「筑波大学における定住外国籍児童に対する「職育」プロジェクト - 進展、挑戦、課題」というテーマで実践報告があった。この中で筑波大学が「寺子屋」において日系ブラジル人に子どもに対して学習支援を行っている実践が紹介された。日系ブラジル人の子どもの支援に関して、親との情報共有、学校との連携、行政や地域社会との協働が重要であると指摘された。外国人の子どもに対する支援のあり方について考えるよい契機となった。

その後は、「日本社会の移民新時代を迎えて - 九州の現実から移民政策を問う - 」というテーマで全体シンポジウムが開催され、本校生も参加した。在留資格「特定技能」が新設され、外国人労働者の受け入れ拡大に向けての課題について話があった。

長崎で行われた学会に参加できことは本校生の課題研究活動を深める非常に良い契機になった。

成果および成果の発信

今回の学会での発表は、第7回高校生「国際問題を考える日」でポスターにまとめて報告を行った。このうち1人がポスターセッションで優秀賞を受賞した。

「スタディツアーin移民政策学会2019年度冬季大会」報告書例

~ ~

2年3組18番 貞好 亜彩

~ ~

私は今回移民政策学会に参加して、諸問題に対する自分の理解や考えが深まったとともに、各研究・実践発表を通じてそれらの問題がすべて繋がっているという実感が持てたように思う。

まず、これまでの自身の研究を発表することで、テーマや方向性を再確認することが出来た。私は「ハーフ」の言語能力や居住経験、周りから受ける扱いや自己認識に焦点をあてて日本の多民族社会の在り方を考えることをテーマとしているが、そもそも「ハーフ」とは何かという根本的な疑問を常に抱き続けてきた。しかし、今回いろいろな人から多くの意見や指摘を頂き、その疑問についてもこれからどう考えていけば良いか方向性が明確になった。「ハーフ」の研究についてはまだまだ不十分ではあるものの、言語能力や自己認識についての研究は多く存在するので、それらとは違ったアプローチの仕方でもより研究を深めていきたい。

また、同級生の発表や先生方の講演・報告を聞くことで、様々な問題が結局はすべて関わりあっているという実感をも改めて持てたことも今回学会に参加して得られた収穫だと思う。日本に住む外国人児童・生徒や女性、貧困などの困難に直面している人々など、研究対象となっている人々や根本にある大きな課題へのアプローチの方法が異なるだけで、それらをまとめると「日本の多民族・多文化社会の在り方」と「そのために何をすべきか」という一つの問題意識に集約できるように感じる。だからこそ、これからも一見自分が扱っているものとは違うテーマのように思えても、きちんと調べたり理解しようとしたりする広い視野を持ちたいと思った。

さらに筑波大学の実践報告では、ブラジルにルーツをもつ子供たちへの学習支援について詳しく知ることが出来た。現在参加している外国にルーツを持つ子供たちへの学習支援ボランティア活動に生かしたい。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(17) 国内スタディツアー「スタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019」における課題研究活動

目標

SGH の課題研究の一環として、「スタディツアー@移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019」に参加し、日本における多民族・多文化共生社会に関する報告を聞くことで課題研究を深める契機とする。

対象学年

2 年次生 10 人

1 年次生 26 人

訪問先

日本教育会館

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

実施日

2019 年 6 月 1 日(土)、2 日(日)

内容

- 1) ダイアログへの参加
- 2) 分科会への参加
- 3) 全体会への参加



日本教育会館にて

内容の詳細

SGH 課題研究に取り組む本校生 1,2 年次生の 36 人が、日本教育会館で開催された移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019 に参加した。このフォーラムは、移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019 実行委員会が主催し、特定非営利活動法人である移住者と連帯する全国ネットワークが共催し、東京で 20 年ぶりに開催された。

1 日目は、まずダイアログに参加した。「わたしたちはここにいる～多民族・多文化共生社会の今、そしてこれから」というテーマで、メインスピーカーとしてサヘル・ローズ氏と矢野デイビット氏を招き、両氏の経験や活動、思いなどを紹介していただいた。まず、日本人の父とガーナ人の母との間にガーナで生まれ、6 歳の時に日本にやってきた矢野デイビット氏が話された。テーマはアイデンティティであった。矢野氏は日本で「外国人は帰れ」と言われたことがあり、自分は日本で生活し日本で暮らしてきたにも関わらずこのようなことを言われ「自分は何人なのか」と疑問を持った。そこで母親の母国であるガーナを訪れた。しかし、ガーナでもガーナ人と思われず外国人として見られた。その経験から自分は自分らしく生きることが大切であると気づいたと話された。そして、自分や自分の母親のように日本で孤独を感じている人がいると指摘し、大切なのは「よりそうこと」と訴えた。次に、8 歳から日本で生活しているイラン人のサヘル・ローズ氏が話された。子どもの頃に母親と 2 週間ほど公園で野宿をして暮らしていた時に、助けてくれたのはサヘル氏が通っていた小学校の給食のおばさんだったという。彼女はサヘル氏とその母親を家に連れていき、一か月間支援をしてくれた。その間に、弁護士を見つけ母親の在留資格を変更することに尽力してくれ



全体会の様子

たと話された。その上で、「相手を信じること」、「外国人を外国人として見るのではなく人として見ること」の大切さを訴えた。両氏のお話の後、質疑応答の時間が設けられた。本校生が「外国人に対する偏見をなくしたい。高校生の自分に何ができるか」という質問をした。これに対してサヘル氏は「まずは近くにあるイランのレストランに行ってみよう。身近なところからその文化にふれてほしい。」と答えた。矢野氏は「周りではなく、自分がまず変わることが大切である」と答えた。これからの日本社会をどのように作っていくかについて考えるよい契機とすることができた。

ダイアローグの後、分科会が行われた。「移住女性」、「技能実習」、「難民」、「日本語教育」など 15 の分科会が設定され、本校生は自分の興味のある分科会にそれぞれ参加した。分科会に参加した本校生はディスカッションに参加したり、講義や報告を熱心に聞きメモをとるなど積極的に取り組んだ。

2 日目、「どうなる、どうする移民政策」をテーマに全体会が行われた。まず、国士舘大学の鈴江江理子氏による「制度解説 - 18 年改定入管法と総合的対応策」というテーマで講演が行われた。具体的には、これまで日本では「好ましい移民/外国人」と「好ましくない移民/外国人」の線引きによる国境管理政策が行われてきたと指摘された。2018 年 12 月に改訂された出入国管理及び難民認定法は移動局面を規定する法律であると前置きの上、従来は好ましくない外国人労働者はいわゆる「単純労働者」であったが、今回の改正では特定技能を創設することにより労働力不足の分野の労働者を受け入れ、好ましい外国人労働者の線引きが変更されたと説明された。次に、外国人政策として「共に生きる」社会は実現するのかというテーマで話された。日本には、「言葉の壁」、「制度の壁」、「心の壁」が存在し、これらの壁により社会経済的な不平等としての格差が生み出され、外国人が日本人と対等な関係で社会に参加できない現実があることを訴えた。

次に、移住者と連帯する全国ネットワーク理事である高谷幸氏より、政策提言として移住連「移民社会 20 の提案」が報告された。「移民はここにいる」を前提にした政策を、など 20 の政策が提言された。

最後に、武蔵野大学教授で日系ブラジル人 3 世のアンジェロ・イシ氏、東北大学研究員で韓国生まれの李善姫氏、弁護士で在日朝鮮人 3 世の金竜介氏によるパネルディスカッションが行われた。テーマは「どうなる、どうする移民政策～移動・定住・永住する人々の視点から考える」であった。アンジェロ氏は、外国人は日本の社会を底辺から支えていると前置きされたうえで、日本に住む外国人は貧困などの地域差があり、国の責任により問題を解決すべきだと訴えた。李氏は韓国から東北地方への結婚移住について取り上げ、結婚移住してきた女性が DV 被害を受けている事例をあげ、支援が必要であると訴えた。金氏は日本における外国人への差別の問題を取り上げ、外国人に職場が選択できるなどといった自己決定権を認めるべきであると訴えた。

2 日間のプログラムを終え、日本に居住する外国人を取り巻く様々な問題や課題を知り学ぶことができた。同時に、これから多文化共生を実現するための日本のあり方について考えるよい契機となった。

成果および成果の発信

今回のスタディツアーに関しては、各自が報告書を作成し成果集としてまとめて全員に配布することで成果の普及を図った。

移住者と連帯する全国フォーラム・東京 2019 報告書の例

~~~~~  
1年2組6番 呉 梨乃  
~~~~~

私は今回、このスタディツアーに興味を持ったので参加させていただいた。移民や専門家の方々の貴重なお話を聞いて、やはりみんな考えていることは同じなのだなと思った。またゲストの方々のように行動に移し、成果を出しているの方々をみて、自分も頑張らないといけないと思った。

1 日目の午後から、ダイアローグを聞いた。ガーナと日本のハーフの矢野デイビット氏、イラン出身のサヘル・ローズ氏、在日コリアンの金朋央氏が話してくださった。私自身、朝鮮学校に通っていたので、デイビット氏の少し差別される感覚、サヘル氏の最初から偏見を持たれる感覚など、共感できる部分が多々あった。私が今回、一番胸に響いたのがサヘル氏の言葉だ。それは「色々な角度から色々なものを見る」「0 の視点から相手を見る」である。この言葉が記憶に残った理由は、自分が朝鮮学校に通っていた頃に出した答えと同じだったからだ。円形のものの上から見ると丸に見えるかもしれないが、横から見てみると線に見えるかもしれない。私はこれからもサヘル氏の言葉を忘れず、偏見を持たずに、物事を色々な角度から見ようと思った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(18) SGH講演会における課題研究活動

【SGH基調講演】

目標

移民研究を行っている大学の教員の講義を聞くことで、移民研究に関する理解を深める契機とする。

対象学年

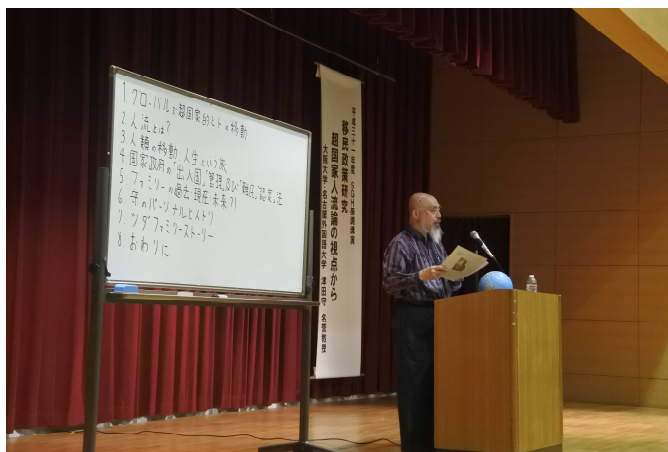
1年次生120人

場所

本校 国際交流ホール

実施日

2019年4月22日(月)



津田氏による講演の様子

講師

大阪大学・名古屋外国語大学 名誉教授 津田 守 氏

内容

大阪大学・名古屋外国語大学の津田守名誉教授を招き、2019年度SGH基調講演を実施した。「移民政策研究 - 超国家人流論の視点から」というテーマで、これから移民研究を始める1年次生が課題研究活動を取り組むために必要な課題について講演をいただいた。また、質疑応答により移民研究に関して理解を深めると契機とした。

内容の詳細

大阪大学・名古屋外国語大学の津田守名誉教授による「移民政策研究 - 超国家人流論の視点から」の講演内容は(1)「移動する人 - 人流について」(2)「ディアスポラ研究について」(3)「ファミリーストーリー」の3つの観点から話をされた。

まず、人流の定義についてお話があった。人流とは人が移動することであり、人とその家族の移動を考えると移民研究の契機になると述べられた。

次に、ディアスポラ研究について説明された。移住においては、自由意思で移動する人々と、望まないのに移動させられる人々がいることを指摘し、後者には難民や亡命者、人身取引対象者などが含まれると述べられた。いずれにせよ、元の国や民族を離れ世界に拡散している人々、歴史的背景、現代の超国家的現象全体を探究することがディアスポラ研究であると話された。

最後に、ファミリーストーリーとしてご自分の家族のルーツについて話された。津田名誉教授の曾祖父の仙さんが青山学院の創立者の一人であり、その次女の梅子さんは日本最初的女子留学生で津田塾大学の創設者であることに触れ、梅子の波乱万丈の人生についてお話された。そしてご自身はフィリピンに11年間滞在され、現在の妻であるヨランダ氏と結婚したと述べられた。そして、曾祖父または曾祖母までのファミリース

トリーを書くことで、家族がどのような移動をしてきたかが分かり、これが移民研究の手がかりとなると本校生に訴えた。

この後、質疑応答の時間がとられ、生徒からの質問に対して津田名誉教授が丁寧に回答された。

これから移民研究を行う本校1年次生に対して、家族という身近な例をあげて、移民研究の意義についてお話をいただいたことは、これから課題研究を始めるよい契機となった。



質疑応答の様子

成果および成果の発信

津田名誉教授の講演を受け、ディベート課題研究活動を始める契機とした。ディベートの成果は報告書にまとめ校外外に配布し、成果の共有を図った。

津田氏による講演に関する生徒のワークシート回答例

1. 講演を聞いてあなたが考える「移民政策研究」の意義はどのようなものか。具体的に書くこと。

- ・移民について研究することで人の流れや物の流れを知り、これまでの国際社会の流れを次の世代へと活かすこと。
- ・より多くの人により移民政策研究について興味を持ち、積極的に自ら取り組んでいくこと。
- ・グローバル化にともなう摩擦を解消し、日本を異文化共生社会にすること。

2. 講演を聞いて、本日の話を今後の課題研究活動にどのように活かそうと思ったか。具体的に書くこと。

- ・「移民とは？」とそれだけで活動するのではなく、「もし私も移民だったら」と自分に置き換えて、さらに身近に感じながら活動していきたいと思った。
- ・さらにグローバル化が進む世界での課題を見つけ、解決法を探るために、まずは世界における過去や現在の出来事を知るところから始めようと思った。
- ・私の父の家は在日韓国人であり、自分のルーツを探ることが超国家的なヒトになる第一歩だとおっしゃっていたので、それを知り、異文化に興味を持って課題研究に取り組みたい。

3. 講演を聞いて、全般的な感想を書くこと。

- ・国外に限らず、国内であっても異文化は存在し、全ては「international」、「interculture」。つまり国内であっても全てが同じというわけではなく、異なる個性が混じり合う。それが「国際」なのだと思う。
- ・結婚においては国際結婚であったり、人種においては白人・黒人であったりと区別したがる。私は今日の話聞いて、そのような区別はもうしたくないと思った。
- ・グローバル化が進んでいくなかで大事なのは異文化に目を向け、できればさらにそれを認めることだと思う。それが自分の人生を創る第一歩になるのではないか。
- ・様々な人・国・文化等に触れ、自分の人生を他人に面白く話せる人になりたいと思った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(19) SGH講演会における課題研究活動

【第1回SGH特別講演】

目標

国際機関で難民支援活動を行う専門家の講演を聞き、難民に関する理解を深める契機とする。また1年次生の移民マップ等の課題研究活動を進める契機とする。および2、3年次生の論文作成等の課題研究活動を進める契機とする。

対象学年

1年次生120人、2年次生116人、3年次生117人

場所

本校 体育館

実施日

2019年7月12日(金) 3、4時間目



滝澤氏による講演の様子

講師

特定NPO法人 国連UNHCR協会 特別顧問 滝澤三郎 氏

内容

講師に特定NPO法人国連UNHCR協会の特別顧問である滝澤三郎氏を招き、2019年度第1回SGH特別講演を実施した。「日本における難民支援の現状 - 難民を正しく理解するために - 」というテーマで、移民研究に関する課題研究活動を行っている全校生に対して、難民の現状と日本の課題について講演いただいた。また質疑応答により難民に関して理解を深めると契機とした。

内容の詳細

滝澤氏は次の骨子に沿って講演を進められた。

- 1) 論文について
- 2) 世界の難民について
- 3) 日本の難民の受け入れについて
- 4) 世界市民主義の基本理念

まず、滝澤氏は本校生の論文作成にあたり助言を述べられた。論文で大切なのは、まずは現状を説明し、次にその原因を解明して、解決策を提言することであると述べられた。

次に、世界の難民の現状について説明された。世界の人口の100人に1人が難民であり、その半数は18歳未満であることを指摘された。そしてシリア難民やロヒンギャ難民を取り上げ、なぜ自国に留まることができないのかについて説明された。次に、世界で難民が発生する原因について述べられた。一つは国家権力が強すぎることで、逆に国家権力が弱すぎることで難民発生の原因になっていると説明された。その上で、難民に対する対策をあげられた。1つ目に自国に戻るという選択肢、2つ目に移動した国で居住するという選択肢、3つ目に第3国に移住するという選択肢があることを指摘された。そのうえで、アメリカが難民の受け入れを厳しくしたことを例に挙げ、難民の問題は国連が中心となりグローバルな視

点で取り組む必要があることを訴えた。

最後に日本の難民受け入れについて述べられた。日本は約2万人が難民申請をしているにもかかわらず約20人しか難民として認定されていない現状を指摘した。その原因として、難民申請をしている人は東南アジアから来る人が多く、そもそも紛争国でないことをあげられた。次に、日本の難民認定審査の厳しさをあげられた。そして、最後に難民がやって来ると治安が悪くなるなどの難民に対する偏見があることを指摘された。次に日本における難民受け入れの対策について説明された。まず第3国定住による難民を受け入れることをあげられた。次に留学生として難民を受け入れることをあげられた。特に、大学や企業が留学生として難民を受け入れている事例をあげ、これからのさらなる受け入れ拡大を目指すべきだと述べられた。

講演の後に質疑応答の時間が設けられ、多く生徒が質問や意見を述べ、これに対して滝澤氏が丁寧に回答して下さった。滝澤氏には移民政策学会において、本校生の研究報告を聞いてくださり普段から手厚く支援をいただいている。今回の滝澤氏の講演は、本校の研究の進捗状況を踏まえたとうえで、分かりやすく丁寧に話されたので難民について理解が深まった。これからの移民難民研究を進める上で有意義な経験となった。



質疑応答の様子

成果および成果の発信

滝澤氏の講演内容は、1年次の移民マップ課題研究活動の参考とした。また、2,3年次における論文作成や課題研究活動の参考とした。論文の成果については、冊子にまとめ広く配布することで成果の普及を図った。

滝澤氏による講演に関する2年次生のワークシート回答例

2年次生

1. 日本の難民支援の現状について、講演を聞きわかったこと、および気がついたことを書きなさい。

- ・日本で難民認定を受けることは非常に困難だが、少しずつ対策が取られ希望が見え始めている。
- ・日本の難民受け入れはまだまだ進んでいない。デメリットばかり考えているからいつまでも現状を変えられない。
- ・日本は全く難民を受け入れていないと聞いていたが、他の面で紛争などから難民を救っていると聞き、日本の難民支援に対しての印象が変わった。
- ・難民はアフリカの国々に多いというあやふやな考えしか持っていなかったが、中南米やインドネシアからの難民もいると知った。
- ・日本は難民を受け入れたくないというだけで拒否していると思っていたが、それだけでなく難民でない人も申請しているから受け入れ率が低い。
- ・シリア難民は日本で受け入れが少ないと聞いていたが、現在、留学生という形で受け入れている。

2. 日本の難民支援に関して、わたしたちができることは何か。あなたの考えを書きなさい。

- ・SNSなどを活用して、難民のイメージを変えるように働きかける。
- ・募金をすることで、離れていても難民を支援できる。フェアトレード商品を購入したり、ハンガーゼロなどの自動販売機募金に参加したりする。
- ・小学校における英語教育に力が注がれているが、異文化を学ぶ機会が少ないので、わたしたちが異文化や他国の現状を学び、発信していく。
- ・募金以外にもランドセルや服を送ることで支援できる。
- ・インターネット上では匿名で意見を発信できるが、無責任な意見や誤ったものも多い。それらにつられず、うまく活用して知識を得る。

3. 講演全体を通して、感想および日本の難民支援に関するあなたの考えを書きなさい。

- ・そもそも「難民」という名前に親しみやすさがない。
- ・たくさんの難民申請が来ている今こそ、受け入れ方を考える絶好のタイミングではないか。
- ・日本はこれから受け入れを増やしていく予想しているが、それは日本人の考え方の変化なしには上手くいかないだろう。
- ・日本や他の国々が難民受け入れの枠を増やすなどの議論をする前に、まず紛争を終わらせるべき。いくら支援しても、難民が増える一方では何も解決にはなっていない。
- ・難民を受け入れられないのではなく、一人ひとりの意識が変われば受け入れることのできる体制に変化していくはず。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(20) SGH講演会における課題研究活動 【第2回SGH特別講演】

目標

大学で多文化共生の研究を行っている専門家の講演を聞き、多文化共生に関する理解を深める契機とする。

対象学年

1年次生120人、2年次生116人、3年次生117人

場所

本校 体育館

実施日

2019年11月14日 (木) 6、7時間目

講師

明治大学 国際日本学部 教授 山脇啓造 氏



山脇氏による講演の様子

内容

明治大学から国際日本学部教授である山脇啓造氏を招き、2019年度第2回SGH特別講演を実施した。「多文化共生社会をめざして - 外国人労働者と日本社会」というテーマで、移民研究に関する課題研究活動を行っている全校生に対して、多文化共生について考える契機とすることを目的に講演を行った。

事前学習

2019年11月7日 (木) 7時間目

全校生が次の資料を読み、ワークシートにまとめ学習した。

[資料1] 山脇 啓造「外国人材受け入れ拡大を考える 多文化共生社会に向けて」(視点・論点)
2019年2月26日、NHK解説アーカイブス。

[資料2] 山脇 啓造「「多文化共生のまちづくり」に向けて～外国人が増加傾向にある中、先進自治体から学ぶ～」、2019年1月、自治体国際化フォーラムVol.351。

内容の詳細

明治大学から国際日本学部教授である山脇啓造氏を招き、第2回SGH特別講演を実施した。

まず、山脇氏は日本の現状について説明された。日本は少子高齢化が進み、2014年の日本創生会議において2040年には全国の自治体の半数がなくなるという報告を紹介された。続いて、日本再興戦略において「外国人材の活用」が取り上げられ「移民政策と誤解されないように配慮」しながら外国人労働者を受け入れる政策が行われていると説明した。現在、1年間で日本人は43万人減少しているのに対して、外国人は17万人増加していると指摘した。その上で、地域における多文化共生とは、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」であると定義づけされた。

次に地方自治体の取り組みについて説明された。日本では多文化共生の取り組みは地方自治体が先導してきたことを説明された。1970年代から在日コリアンの定住化と社会運動の中で多文化共生の取り組みが地方自治体において行われたと指摘された。そして、2012年の日韓欧多文化共生都市サミットにおける「東京宣言」や2013年の浜松市における「多文化共生都市ビジョン」を取り上げ、多文化共生のあり方が外国人に対する生活支援から活躍支援へと変化してきたことを指摘し、現在は「多文化共生2.0」の時代であると説明された。つまり、これまでは外国人は支援の対象だったが、これからは外国人に日本の発展を支える支援の担い手になってもらうという考え方に変わってきたと指摘された。そのうえで、外国人への偏見や差別を改善することが課題であると話された。

続いて、国の取り組みは地方自治体に対して遅れてきたと前置きをしたうえで、これまで政府は外国人を

労働者が犯罪者という視点で見てきたが、2006年になり外国人を生活者としてとらえる考え方が出てきたことを説明された。そして、2012年に新在留管理・住民基本台帳制度ができ、外国人を住民として扱うようになったと話された。2016年には日本再興戦略「外国人受入れ推進のための生活環境整備」の中で、外国人に対して日本語教育を施すことが具体的な数値目標として設定されたと説明された。さらに2019年には日本語教育推進法が成立し、外国人に対して国が責任をもって日本語教育を行っていくことになったと述べられた。

次に外国での多文化共生の取り組みについて説明された。山脇氏はドイツと韓国、台湾を取り上げて、これらの国には共通して多文化共生に関する組織と法が作られていると指摘された。

最後に、日本には外国人に関する法律はこれまで入国管理法しかなかったと前置きをしたうえで、多文化共生に関する組織や法がないことが日本の課題であると述べた。したがって、多文化共生を推進する基本法と組織を作る必要性を訴えた。また、横浜市立いちよう小学校の例をあげ、学校が拠点となって多文化共生を進めていくことができることを紹介され、本校にその役割を担ってほしいという期待を語られた。

講演の後、質疑応答の時間が設けられた。外国人に対する日本語教育支援について研究している生徒がこれからの支援のあり方について質問をした。これに対して山脇氏は2019年にできた法律をよく読むように、と前置きをしたうえで、「外国人に対する日本語教育支援のあり方はこれから地方自治体で議論される。その時にあなたたちの意見を反映させてほしい」と回答された。

多文化共生の様々な取り組みに携わっておられる山脇氏の話聞くことができ、日本における多文化共生について考えるよい契機となった。



質疑応答の様子

成果および成果の発信

今年度、本校のSGH課題研究活動の目標を異文化理解力の向上とした。その目標を達成するために山脇氏に今回の講演を依頼した。その結果、ルーブリック評価で異文化理解のスコア4をつけた生徒の割合がすべての年次で昨年度より増加した。山脇氏の講演は本校生の異文化理解力の向上に効果があったといえる。

山脇氏による講演に関する3年次生のワークシート回答例

3年次生

1. 日本の多文化共生の現状について、講演を聞きわかったこと、および気がついたことを書きなさい。

- ・外国人に対し日本語を指導している人の中には日本語教育についての知識がない人もいる。
- ・在留外国人はリーマンショックと東日本大震災のときに減少したが、近年は増加傾向にある。
- ・多文化共生という言葉を知っている人は増加しているが、それを理解して実際に行動している人は少ない。
- ・自治体単位では取り組まれているが、政府の取り組みはまだ不十分。
- ・政府は外国人に対する日本語教育の法律だけは作っているが、詳細な中身は決められていない。

2. 外国の取り組みを参考に、多文化共生を進めるために私たちができることは何か。あなたの考えを書きなさい。

- ・海外の人と接するときは、相手に伝わっているか表情を見たりしながらやさしい日本語で話す。
- ・地域の構成員として、外国人と積極的に関係を築こうとし、互いの文化的価値を認め合おうとすること。
- ・その人の行動や文化的習慣を見て相手のことを決めつけるのではなく、本人に確かめる。相手を理解しようとする。
- ・生活するうえで必要な日本特有のマナーや文化を伝える。

3. 講演全体を通して、感想および日本の多文化共生に関するあなたの考えを書きなさい。

- ・相手の立場はどうなのか、相手はどう考えてどう感じるのかなど、相手を思いやることが多文化共生につながる。
- ・外国から移住してきて働いている人たちは私たちと同じように扱われるべき。日本の少子高齢化を外国人で補っていくとするのであれば、改善していく必要がある。
- ・法整備や条約をつくるというのは表面上のものでしかない。全員の意見がそれらで何とかならないと思えない。
- ・自治体での取り組みが進んでいるが、取り組めていない自治体への働きかけが今後重要になってくる。日本語教育の充実と並行して日本人の外国人への意識改革を図ることが多文化共生社会の実現へのカギとなる。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(21) 「SGH課題研究最終発表会」における課題研究活動

目標

SGH活動の成果を発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象年次

全年次生(1年次生121人、2年次生116人、3年次生117人)

場所

芦屋ルナホール
芦屋市業平町8番24号

日程

2019年12月18日(水)



SGH 課題研究最終発表会の様子

内容

- 1) 1年次生発表
「SGHカンボジアスタディツアー2019実施報告」 英語・日本語によるプレゼンテーション
- 2) 1・2年次生発表
「SGHプレゼンテーション@西宮浜中学校」 多文化共生をテーマとした英語劇
- 3) 2年次生発表
 - a) 「アメリカ・イギリス・カナダにおける災害支援に関する意識調査」
日本語によるプレゼンテーション
 - b) 「日本の外国人労働者に対する防災教育に関する事例研究」
日本語によるプレゼンテーション
 - c) 「ニュージーランドにおけるボランティア意識について ～トピタテ留学JAPAN活動報告～」
日本語によるプレゼンテーション
- 4) 3年次生発表
 - a) 「日本在住の外国人生徒の母語・母文化の継承 - ある高等学校に在籍する外国人生徒のエスノグラフィ」
日本語・英語によるプレゼンテーション
 - b) 「日本の国籍制度に関する事例研究 - 日本の国籍制度に関する考察 - 」
日本語・英語によるプレゼンテーション
 - c) 「外国人労働者の受け入れについての事例研究 技能実習における家族滞在に焦点を当てて」
日本語・英語によるプレゼンテーション
- 5) パネルディスカッション

内容の詳細

まず、1年次生は、カンボジアスタディツアーにおいて Western International High Schoolにて実施したプレゼンテーションを英語で再現した。続けて、カンボジアで実施した海外への移出経験者に対する聞き取り調査の結果を日本語で報告した。

1・2年次生のプロジェクトチームのメンバー4人が、西宮市立西宮浜中学校で実施した英語劇を再現した。本校が取り組んできた課題研究の成果を英語劇としてまとめたものである。「多文化共生」をテーマに、日本には多くの外国人が居住しており、自分と異なる人々の文化や価値観を尊



SGH 課題研究最終発表会の様子

重し、共に生きる社会を作り上げることの大切さを、民族衣装を身につけた本校生が英語で訴えた。

2年次生は、アメリカ・カナダ・イギリスで行った災害に関する意識調査について結果をまとめて報告した。調査結果からアメリカ・カナダ40%、イギリスの11%の人が自国で自然災害を受けた経験があることが分かった。つまり、彼らが日本にやってきた場合、大部分の人は日本で初めて地震などの自然災害を受ける可能性が高いことを指摘した。また、「日本で働いていて、災害に関する学習を受けていない場合、あなたは不安に思いますか」という質問に対して、アメリカ・カナダ・イギリスの70%以上の方が不安に感じると回答したことをあげ、外国人に対する災害に関する教育の必要性を訴えた。次に、国際開発学会&人間の安全保障学会2019共催大会で発表を行った生徒が、その内容を報告した。具体的には、日本で働く外国人に災害教育に関する聞き取り調査を実施した結果、多くの外国人が災害に関する教育を受けておらず、これを不安に感じている人が多いことを報告した。日本で働く外国人の命を守るためにも、国や地方公共団体、そして企業が外国人に対する災害教育を行う重要性を訴えた。最後に、トビタテ留学JAPANに参加した生徒が、その活動報告を行った。具体的には、ニュージーランドと日本でボランティアに関する意識調査を実施し、その結果から日本ではボランティアに関する情報と人とのつながりがニュージーランドと比べて少ないことが日本のボランティア参加率の低さの原因になっていると訴えた。

3年次生は、学校設定科目「提案日本の選択」において3年間の課題研究活動の成果を論文にまとめ、授業内で行われた発表会において高い評価を得た3人の生徒が発表を行った。3人とも論拠となるデータを示しながら説得力のあるプレゼンテーションを行った。発表は日本語と英語で行った。なお、3人の発表は移民政策学会2018年度冬季大会および移民政策学会2019年度年次大会にて報告されたものである。

生徒の発表の後は、パネルディスカッションが行われた。参加したパネリストは次の通りである。

山田 賢司	令和元年度国際理解教育講演会 講師、前外務大臣政務官 衆議院議員
福岡 憲助	SGH運営指導委員会 委員長、芦屋市教育長
佐野 敦子	SGH企画推進委員会 委員、社会デザイン学会
辻 登志雄	兵庫県教育委員会事務局 高校教育課
政所 奈乃羽	本校13回生、同志社大学 グローバル地域文化学部 2年
喜久川 太陽	本校1年次生 最終発表会の報告者
高橋 遼	本校2年次生 最終発表会の報告者
前 遥菜	本校3年次生 最終発表会の報告者
前川 裕史	本校SGH校内推進委員会 委員長

生徒の発表に関して、活発な議論が行われた。具体的には、山田氏より課題研究活動を進めるうえで、自分の意見や主張とは必ず対立する立場や意見があることに配慮してほしいという指摘をいただいた。あわせて、外国人への災害教育の重要性は理解できるが、そもそも日本人でも災害教育を受けていない人がいるという視点を持つことが研究をすすめていくうえで重要であると述べられた。また、本校13回生でSGH1期生である政所氏は、自分が在校しているときとは違うテーマを研究している人がいることを指摘し、研究活動が順調に発展しているとコメントした。これに対して、佐野氏からは本校の5年間の課題研究活動を振り返り、13回生が卒業した3年目から本校の課題研究活動が深化したと指摘し、これは本校で初めて移民政策学会で研究成果を報告した政所氏を例に優れたモデルケースができたことが成功の要因であると述べられた。最終年度で多くの方々とパネルディスカッションができたことは、今後の本校の課題研究活動を進めるよい契機となった。

なお、この最終発表会は広く市民に広報して参加者を募り、当日は来賓および保護者を含めて55人の外部からの来場者があった。本校の研究活動の成果を広く発信できたことは非常に有意義であった。

この発表会終了後に発表者と外部の支援員を対象に発表内容についての自己評価と他者評価を行った。この評価シートはSGH課題研究活動のルーブリックを基礎に作成した。



パネルディスカッションの様子

SGH 課題研究最終発表会 広報パンフレット

文部科学省スーパーグローバルハイスクール課題研究活動



兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール(SGH) 課題研究最終発表会

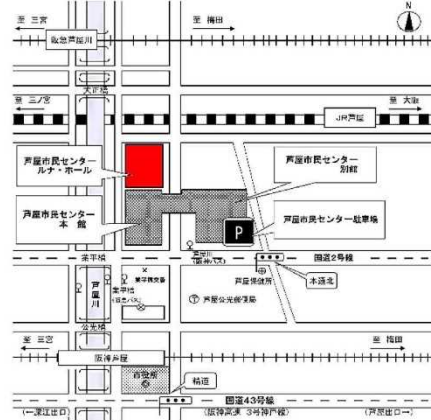


日時

2019年12月18日(水)
★ 10時00分～12時40分(受付:9時30分～)

場所

芦屋ルナホール
所在地: 芦屋市業平町8番24号
JR「芦屋」駅・阪急電車「芦屋川」駅
阪神電車「芦屋」駅より徒歩約8分



参加費
無料



私たち兵庫県立国際高等学校は平成27年度に文部科学省によりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」をテーマに課題研究に取り組んできました。近年、日本では多くの外国人が暮らしています。私たち国際高校生は、どうしたら異なる文化を持った人々同士がともに暮らせる社会を実現できるかについて考えてきました。

これまで、カンボジア・ベトナム・タイ・フィリピンを訪問し、海外で働いたことがある人に海外での生活の様子を聞きました。また、国内の工場や介護現場で働く外国人の方々に日本での生活についてお話を聞きました。これらの経験から私たちは様々な課題があることに気づきました。この課題を解決するために研究を重ね、学会や中学校など多くの場で研究成果を発表してきました。



タイムスケジュール

1. 第一部の内訳 (60分 10:15～11:15)
 - 1年次 「SGHカンボジアスタディツアー2019」の報告 15分 ※ 日本語・英語
 - 1・2年次 「SGHプレゼンテーション@西宮浜中学校」の報告 20分 ※ 英語劇
 - 2年次 ① 海外研修報告 5分 ※ 日本語
 - ② 「SGHスタディツアー@国際開発学会&人間の安全保障学会」 10分 ※ 日本語
 - ③ トビタテ留学JAPAN活動報告 10分 ※ 日本語
2. 第二部の内訳 (45分 11:15～12:00)
 - 3年次 3人の生徒による論文発表

[お問合せ] 兵庫県立国際高等学校(SGH担当 前川) 電話:0797-35-5931

主催:兵庫県立国際高等学校

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(22) 校外の発表会「全国高校生フォーラム 2019」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を英語で発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

2 年次生 4 人

場所

東京国際フォーラム 東京都千代田区丸の内 3-5-1

日程

2019 年 12 月 22 日(日)



本校生徒によるポスターセッション

内容

- 1) 基調講演
- 2) ポスターセッション
- 3) 生徒交流会(テーマ別分科会)
- 4) 生徒交流会(全体会)
- 5) 優秀校によるプレゼンテーション、表彰式
- 6) 表彰式・閉会式



生徒交流会の様子



内容の詳細

東京国際フォーラムにて「全国高校生フォーラム 2019」が開催された。全国から SGH 指定校およびアソシエイト校、WWL 拠点校および連携校、グローバル型指定校およびアソシエイト校 118 校が集まった。本校からは課題研究活動に取り組む 2 年次生 4 人が参加した。

開会式の後、テーマ別の分科会が行われ、本校生は C-2 の「社会的環境と生活」に参加し、社会問題とその原因・理由、高校生ができることについて、他校生と英語でディスカッションを行った。

午後からはポスターセッションが行われた。本校は、“Consideration of survey results for Filipino who have moved out of the Philippines: What we can do for foreigners”というテーマで英語によるプレゼンテーションを行った。内容は、フィリピンの移出労働経験者、特に日本への移出労働経験者の聞き取り調査の結果を分析し、外国人が日本で暮らすうえでの課題を明らかにし、日本人と外国人が共に暮らしやすい国づくりを提案するというものであった。具体的には、JAFS および KAFS の協力で、2019 年 11 月にフィリピンのマニラで移出労働経験者 22 人に対する聞き取り調査を実施した結果、中東諸国に働きに行った 10 人の中には暴力などの深刻な人権侵害を受けていた人がいた。一方、日本に働きに行った 7 人のフィリピン人全員が機会があれば日本に行きたいと回答した。しかし、日本語がわからなかったため子どもが死に至ったケースがあった。外国人が日本語を習得することは、彼らが日本で暮らしていくうえで最も重要である。私たち高校生が日本に住む外国人のために何かできることはないかを考え、日本にやってきた外国人の子どもたちに日本語や勉強を教えるボランティアを始めたという内容の報告を英語でプレゼンテーションした。その後、高校教員や高校生など聴衆からの多くの質問に対して本校生は丁寧に英語で対応した。

その後は全体会、ポスターセッション優秀校によるプレゼンテーション、表彰式が行われた。本校における課題研究の成果を全国の発表会で報告できたことは非常に良い経験となった。また、他校の生徒と交流することにより先進的な課題研究の事例を知ることができたことは有意義な体験であった。この経験を今後の課題研究活動に活かせるように努めたい。

 **Consideration of survey results for Filipino people who have Moved out of the Philippines – What we can do for foreigners** 

Hyogo Prefectural International High School (2738) Minami Taniguchi, Nodoka Haruyama, Yumi Hirata, Shirori Yano

Introduction

The main purpose : To find out the resolution for difficulty in working in Japan.

- ① Experience working in Japan.
- ② Experience working in the other countries.

Illustrating the merits and the demerits of working in Japan

Suggestion

Survey

Project of the survey

Basic information

Date: 2018, Nov. 3-4th
Place: **San Andreas Paripalan** in Manila.
Supporters: JAFS • KAFS

Interviewees

7 worked in Japan
15 worked in the others
(UAE, Saudi Arabia, Singapore, Hong Kong, Taiwan etc..)

Questions about experience working overseas.

- Q1 What are the good points?
- Q2 What are the bad points?
- Q3 How long did you work there?
- Q4 Do you want to work there again?

Results & Analysis

Question Categories

Working in **Japan**

Working in the **other countries**

Data

Answers

- High wage
- Safety
- Kind
- Ethnic support

Social capital: the whole of social resource including social network, infrastructure, social services, safety, sense of law and human right. Referred in Bourdieu(1990)

Answers (Good points)

- English available, mild climate, rich in food, ethnic community.

Answers (Bad points)

- Insufficient **infrastructure**
- Independent **individualism** - lack of supports
- Being attacked by **throwing shoes** in public
- **Prohibited** going outside and having smartphone
- Suffered from **sexual insultation**

Analysis

The merits of Japanese society

- Social capital
 - Safe
 - A sense of law
 - Human right
- Working environment
 - High wage
 - Ethnic community

Language Problems


- Language barrier
- Difficulty in reading Kanji
- Obstacle in accessing social service.

Suggestion

2 findings

 **JAPANESE**

Rich social capital and good working environment.

 **Language support**

- Multilingual signature, documents and website, etc...
- Translators in institutions
- JSL (Japanese as a second language)

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(23) 校外の発表会「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2019SGH 甲子園」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

2 年次生 1 人

1 年次生 9 人

場所

関西学院大学 上ヶ原キャンパス

日程

2019 年 3 月 23 日(土)

内容

- 1) 開会式
- 2) 課題研究ポスター発表
グループディスカッション
- 3) 高校生交流会
- 4) 交流会・表彰式



2 年次生 ラウンドテーブル型ディスカッション優秀賞受賞

内容の詳細

関西学院大学上ヶ原キャンパスで「全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 2019SGH 甲子園」が開催され、全国から 109 校が参加し約 2,400 人の来場者があった。本校から課題研究活動に取り組む 2 年次生 1 人と 1 年次生 9 人の計 10 人が参加した。

まず、中央講堂で開会式が行われた後、G 号館でラウンドテーブル型ディスカッションが行われ、本校から 1 次審査を通過した 2 年次生の長野羽良が「日本が女性の社会進出を進めるにあたっての課題と解決策」というテーマのディスカッションに参加した。このディスカッションは、本校生を含む 6 校の生徒 6 人のグループにより行われた。最初にグループ内で司会、発表者、書記を決めたが、本校生は発表者に立候補した。役割分担の決定後、テーマに沿ってディスカッションが行われた。本校生は、日本が女性の社会進出を進めるにあたっての課題について、夫による家事支援は現状ではほぼ期待できないこと、また女性の就業率は向上しているが大半が非正規労働者であることについて、ともに具体的なデータを提示して発表した。その上で、ヨーロッパでは家事労働者の雇用率が向上するほど女性の就業率が増加するデータを示して、解決策として外国人の家事労働者を雇用することを提示した。グループでのディスカッションでは、「パパ・クォーター制」の導入や学校におけるジェンダー教育を徹底することなどが解決策として提案され、本校生はそれぞれの意見に対して、具体的なデータを提示しながら質問し、議論が深まるように貢献した。ディスカッションを終え、本校生はグループでまとめた意見と改善策について発表を行った。ジャッジの先生による講評では、それぞれが根拠に基づいた発言をしており、よいディスカッションであったというコメントをいただいた。



2 年次生による
ラウンドテーブル型ディスカッション

課題研究がポスター発表では、1年次生の1グループ(9人)がプレゼンテーションを行った。テーマは「日本への移出経験のあるフィリピン人に対する調査に関する事例研究 - 外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと -」で、内容は本校生が2018年にフィリピンで実査した外国への移出経験者に対する聞き取り調査の結果をまとめて報告し、日本が外国人を受け入れるための課題と解決策を提示した。5分間のプレゼンテーションの後に行われた質疑応答にはメンバーで協力しながら的確に質問に答えた。



1年次生によるプレゼンテーション

表彰式では部門ごとに表彰が行われた。ラウンドテーブル型ディスカッションでは本校2年次生の長野羽良が優秀賞を受賞し表彰を受けた。彼女はこれまで移民政策学会での学会発表を行うなど積極的に課題研究活動に参加してきた生徒であり、その経験と努力が生徒として評価されたことは大きな喜びであった。

全国発表会でそれぞれが課題研究活動の成果を報告し発揮できたことは生徒の自信につながるとともに、次の課題に向けて大きなモチベーションとなった。また、他の高校生の課題研究への取り組みを知ることができたことは今後の課題研究活動の大きな参考となった。

1年次生成成 プレゼンテーションポスター

日本への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究
～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～

兵庫県立国際高等学校 岩谷優里・貞好亜彩・清水咲希・清間有咲・谷本楓・平田悠未・春山和・溝手舞林・前畑優月

目的
日本への移出経験があるフィリピン人に対する調査を実施し、日本での現状を知ること、日本がこれら多くの外国人を受け入れるために考えなければいけないことを提示する。

先行研究

【フィリピン人口移出の要因】

1970年代
オイルショック ⇒ 技術者や労働力が必要

1974
マルコス政権 ⇒ 海外雇用政策を規定

1982
POEAの設立

外国人の投資が少ない
雇用が少ない
製造業が未発達

富裕層と貧困層の二極化

フィリピンの賃金が停滞

フィリピン人労働者の主な渡航先
(計1023万人:13年末時点、同国政府調べ)

米国	353.6万人
サウジアラビア	102.9
アラブ首長国連邦	82.2
カナダ	72.2
オーストラリア	39.8

(出所) 日本経済新聞 電子版 2016年1月4日

「日本にやってきたフィリピン人の多くは農業の在留資格でやってきた女性であり、現在は定住者・永住者として暮らしている。」
(出所) 調査報告「農業から介護へ～在日フィリピン人、日本人、そして二世世代への経済危機の影響～」2011年、移民・ダイアログ研究 | 労働移動と世界的経済危機第3巻 107-121頁。

フィリピンスタディーツアー調査結果 「日本以外の移出経験者に対する聞き取り調査」+「日本への移出経験者に対する聞き取り調査」

日時:2018年11月3-4日 場所:マニラ サンアンドレス パリハラン 【対象】日本以外の移出経験者19人 (28歳~73歳、男1人、女14人)

名前(年齢、性別) ※滞在年数	移出国	移出先決定理由	移出先での仕事	移出先よかつたこと	移出先で困ったこと	もう一度その国に行きたいか
A(15歳、女) ※サンアンドレス ※3か月間	USA	兄弟を養うためにお金を稼ぐ	家事労働 ※家庭教師の契約	なし	労働環境が悪い (給料が低い、ドアに鍵をかけられない、予知できない、失業失調になった、嫌で来た、親を怒らされた)	行きたくない
C(13歳、女) ※サンアンドレス ※13年間	USA(ハワイ)	家族のためにお金を稼ぐ	工場労働者 ※コールセンター工場	コミュニケーションがとれ、責任をもって仕事ができ	体調不良(まい、偏頭痛、吐き気)	行きたくない
D(19歳、女) ※サンアンドレス ※2年未満	USA(ハワイ)	同僚のためにお金を稼ぐ	工場労働者 ※コールセンター工場	給料がよかった	ホームシックになったこと	行きたくない
M(19歳、女) ※サンアンドレス ※11年間	USA(ハワイ)	お金を稼ぐ	エンターテイナー	お金は稼げた	コミュニケーション	行きたくない
J(16歳、女) ※サンアンドレス ※1年間	USA(ハワイ)	家族のため	販売 (ショッピングセンター内の販売)	建物、観光地がよかった	なし	行きたくない
T(16歳、女) ※サンアンドレス ※3年未満	サウジアラビア	家族のためにお金を稼ぐ	看護職	なし	フィリピンが仕事にあつたことが多かった	行きたくない
O(15歳、女) ※サンアンドレス ※4か月	サウジアラビア	家族のため、移住の手続き料が安かつたから	家事労働	なし	6:00~9:00で働かされた。料に出るなかつた。休みがなかつた。スマートフォンを取り上げられた。食費もかなり高かつた。小月給の給料の未払い。高圧な家賃を払わなければならない。寝れなかつた。	行きたくない ※精神疾患でいけない
V(17歳、女) ※サンアンドレス ※10年間	サウジアラビア USA	家族のため	縫製業	労働条件がよかつた (リヤドでは経験もなしでミンもあつた) 高収入でフィリピン人だった。	家族と離れていたこと	行きたくない
An(14歳、女) ※サンアンドレス ※5年間	オーストラリア	家族のためにお金を稼ぐ	家事労働	雇い主が優しい。待遇がよかつた。	雇い主の娘に性的暴行を受けた	行きたくない
H(13歳、女) ※サンアンドレス ※2年間	オーストラリア	家族のため、新築金に動かれた。	家事労働	雇い主が優しい。待遇がよかつた。	家族と会えなかつた	行きたくない
S(26歳、女) ※マリハラン ※4年間	シンガポール	親のため	ウェイレス	給料がよかつた。英語が話せた。周りにフィリピン人が多かつた。	なし	行きたくない
V(35歳、女) ※マリハラン ※6年間	シンガポール	家族のため	レストランのウェーター	お金が稼げた。休みがきちんとあつた。	なし	行きたくない
D(44歳、女) ※サンアンドレス ※4年間	台湾	お金を稼ぐため	家事労働	資格がよかつた。よれ人がいた。	なし	行きたくない
Cy(30歳、女) ※マリハラン ※3年間	台湾	社内転勤	工場労働者	食べ物がおいしい。週には日本の労働	なし	行きたくない
R(60歳、男) ※マリハラン ※9年間	台湾	いい環境と聞いていた。条件がよかつた。高校がフィリピンに在っていた。	運転手	雇い主に感謝されていた。労働環境がよい。	なし	行きたくない

【対象】日本への移出経験者7人(7歳~59歳、男1人、女6人)

名前(年齢、性別) ※滞在年数	移出国	移出先決定理由	移出先での仕事	移出先よかつたこと	移出先で困ったこと	日本語能力	もう一度日本に行きたいか
MF(19歳、女) ※サンアンドレス ※3年	日本	家族のため	旅行	お金が稼げた	コミュニケーション(日本語)	会話のみ可能	家族と一緒に住みたい
R(17歳、男) ※マリハラン ※5か月	日本	家族のため	技能実習 ※工場での作業	お金が稼げた	なし	会話可能、カタカナ・ひらがな少し読める	行きたくない
I(14歳、女) ※サンアンドレス ※4か月	日本	日本で働く夢の勧誘	旅行	フィリピン人の仲間がいた	なし	会話のみ可能	行きたくない
D.S(15歳、女) ※サンアンドレス ※3年	日本	日本で働く夢の勧誘 ※お金を稼ぐため	旅行 ※ババのダンサー	お金が稼げた	来日当時、妊娠していたが病院に行けず死産だった。日本と環境の違い。	会話、読み書き可能	行きたくない
M.J(14歳、女) ※サンアンドレス ※7年	日本	家族のため	旅行 ※ババ、運転手	なし	なし	会話可能、カタカナ・ひらがな読める。簡単な漢字を読める	行きたくない
A(13歳、女) ※サンアンドレス ※6か月	日本	家族のため 日本のお金を手取うため	不動産(家事労働) ※家族が日本の借金の世話	お金が稼げた	ホームシック、ストレス	会話のみ可能	行きたくない
R(46歳、女) ※サンアンドレス ※4か月	日本	お金を稼ぐため (両親の死)	旅行 ※ババの助手	お金が稼げた	ホームシック	会話のみ可能	行きたくない

分析・結論

在日フィリピン人は定住者・永住者が多い→フィリピン人は日本にいる家族を頼りにやって来る ⇒ 日本語で苦労

【解決策】 フィリピン ⇒ 日本への移出希望者への日本語教育の充実 日本 ⇒ 日本にやってきたフィリピン人に対する日本語習得の支援

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(24) 校外の発表会「甲南大学リサーチフェスタ 2019」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を英語で発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

3 年次生 3 人

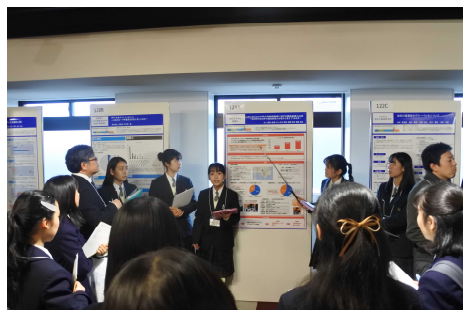
2 年次生 1 人

1 年次生 10 人

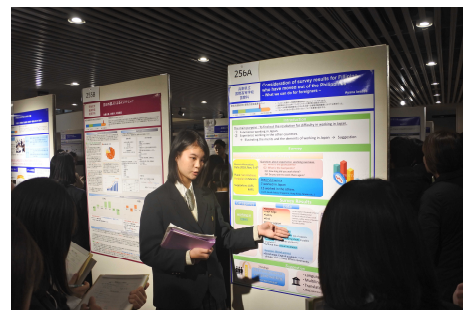
場所

甲南大学

KONAN INFINITY COMMONS



1 年次生によるプレゼンテーション



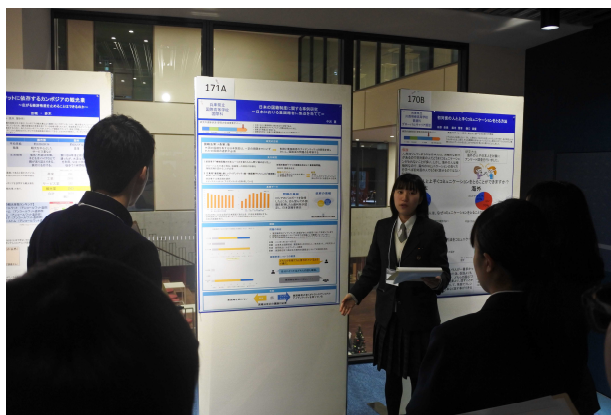
2 年次生による英語でのプレゼンテーション

日程

2019 年 12 月 22 日(日)

内容

- 1) プレゼンテーション
- 2) グループワーク
- 3) 交流会・表彰式



3 年次生によるプレゼンテーション

内容の詳細

2019 年 12 月 22 日に甲南大学岡本キャンパスにおいて甲南大学リサーチフェスタ 2019 が開催され、大学生と大学教員、県内および県外の高校生と高校教員あわせて約 1,150 人が参加し 357 の課題研究の発表が行われた。本校からは SGH 課題研究活動に取り組む 3 年次生 3 人、2 年次生 1 人、1 年次生 10 人の計 14 人が参加した。3 年次生は 3 年間の課題研究の成果をポスターにまとめて発表を行った。前遥菜は「日本在住の外国人生徒の母語・母文化の継承 - ある高等学校に在籍する外国人生徒のエスノグラフィ」、中沢薫は「日本の国籍制度に関する事例研究 - 日本の国籍制度に関する考察 -」、長野羽良は「外国人労働者の受け入れについての事例研究 - 技能実習における家族滞在に焦点を当てて - 」というテーマで、それぞれが学校設定科目「提案 日本の選択」の授業で作成した課題研究論文の内容を発表した。2 年次生の岩浅綾夏は “Consideration of survey results for Filipino who have moved out of the Philippines: What we can do for foreigners” というテーマで英語を使って発表を行った。1 年次生の相宗美咲・大村梨乃実・阪口あやめ・蜂谷やや・林優希は「カンボジア・フィリピン・タイの若年層における日本での就労に関する意識と調査」というテーマで発表を行った。また 1 年次生の水上愛梨・佐藤ひな・内田華蓮・堂園海南・細越恋紋は「カンボジアでの移出労働経験者に対する調査結果の分析 - 2017 年と 2019 年の調査結果の比較から見えてくるもの - 」というテーマで発表を

行った。

プレゼンテーションの後は交流会が行われた。本校生は他校の生徒と一緒にグループワークに取り組んだ。この後、表彰式があり、本校3年次生の長野羽良が総合評価で審査員特別賞を、同じく3年次生の前遥菜が部門別評価でアトラクティブプレゼンテーション賞およびロジカルデザイン賞を受賞した。この甲南大学リサーチフェスタは、課題研究に取り組む高校生その他、大学生や大学院生も参加し、お互いの研究成果を知ることができ、非常に有意義な経験であった。

「甲南大学リサーチフェスタ 2019」受賞ポスター



3年次生 受賞者

兵庫県立国際高等学校 国際科
外国人労働者の受け入れについて
一技能実習における家族滞在在焦点を当てて
 A Study on Foreign Workers in Japan
 Focusing on Technical Intern Trainees and Family Accompaniment in Japan
 長野 羽良

研究の進捗状況(研究の完成度表示バー)

本研究の目的
 技能実習生は、家族の呼び寄せが既に移民の家族受け入れを実施しているドイツの事例を参考に、日本の技能実習生受け入れに関する課題を考察

先行研究
移民の家族呼び寄せ
 ユーロップ社会憲章19条、外国人労働者の家族呼び寄せできるが行政負担に、ユーロップ人権規約8条、家族滞在を承認する権利、国際人権規約19条、家族が否定的に干渉されない権利、世界人権規約16条、家族の権利を定めている

家族滞在の定義と技能実習生の現状
 (家族滞在の定義) 外国から来た労働者がその家族とともにその国で居住できる権利と定義する。この場合、家族は配偶者ととする。
 (技能実習生の定義) 特定技能の定義、(技能実習生在留状況) 1号 1年、2号 3年、3号 5年、4号 8年

調査
 調査先: 高田工業実業組合(2016年8月26日)、設備所にあるサブサロ株式会社(2019年8月26日)、高田工業(2019年11月4日)、高田工業(2019年11月4日)

結論
 (人権) 家族と共に暮らす権利、(当事者の思い) 家族と共に暮らしたい、(在留資格) 就労が認められている在留資格、(状況の変化) 特定技能の新設=8年間の就労

審査員特別賞受賞ポスター

兵庫県立国際高等学校 国際科
日本在住の外国人生徒の母語と民族アイデンティティの継承
一ある高等学校に在籍する外国人生徒のエスノグラフィー
 前 遥菜

研究の進捗状況(研究の完成度表示バー)

なぜ「母語」と「民族アイデンティティ」を研究するのか?
 AIに対する親密さ、AIに対する違和感、Aへの興味・疑問・関心

調査対象者A
 5歳で母親から家族(父、母、弟、妹、叔父)で移住、私立国際高校に通う生徒

調査の方法: エスノグラフィー
 日記、インタビュー、観察、音声録音、写真撮影、ビデオ撮影、フィールドノート

調査の結果から分かったこと
 家ではどんな言葉を使用しているのか?、自分のことをどのように認識しているのか?、母親の親族との関わりは?、親族との関係の中に日本人は含まれない、彼女の日常の友人関係はどのようなものなのか?

結論
 これら外国にルーツを持つ人が増える、同時に二つの世界で生きている

アトラクティブプレゼンテーション賞
 およびロジカルデザイン賞受賞ポスター

研究開発の内容

1 課題研究活動の取組

(25) 校外の発表会「第7回高校生「国際問題を考える日」」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次な研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

3 年次生 2 人
2 年次生 3 人
1 年次生 15 人

日程

2020 年 2 月 11 日(火)

場所

神戸ファッションマート 神戸市東灘区向洋町 6-9



本校 1 年次生によるプレゼンテーション

内容

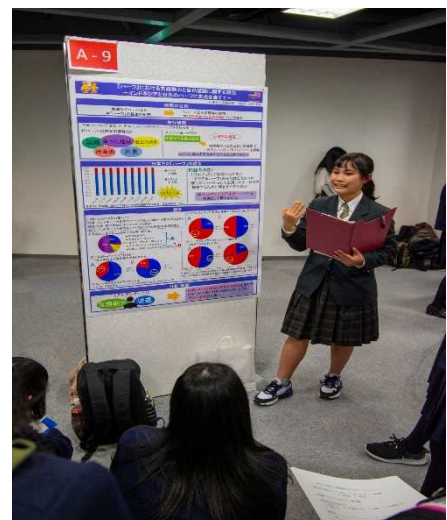
- 1) 基調講演 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 PR セクレタリー 河村裕美
- 2) パネルディスカッション
- 3) 昼休み(教員向けランチョンセミナー)
- 4) ポスターセッションおよびポスター発表コンテスト二次審査
- 5) 表彰式・講評
- 6) 最優勝校ポスター発表

内容の詳細

六甲アイランドの神戸ファッションマートで兵庫県教育委員会・大阪大学・WHO 神戸センターが主催する第7回高校生「国際問題を考える日」が実施された。兵庫県下の高校を中心に 27 校が集まり、119 のポスター発表が行われた。本校からは、課題研究活動を行う 1 年次生 15 人、2 年次生 3 人、3 年次生 2 人の合計 20 人が参加した。

まず、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 PR セクレタリーの河村裕美氏による「国際的な視点から見る東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会」というテーマで基調講演が行われた。次に、参加する高校生の中から 3 人の代表生徒によるパネルディスカッションが行われた。テーマは「オリンピック・パラリンピックと国際問題」であった。

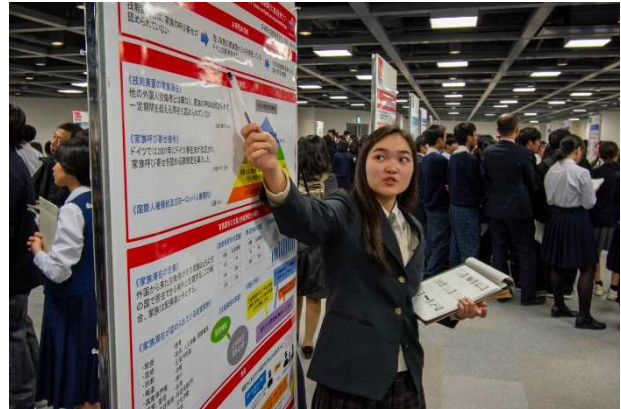
お昼休みの時間を利用して、教員向けランチョンセミナーが実施された。目的は、先駆的に課題研究活動に取り組んでいる学校の実践例を多くの学校で共有することで、各校の課題研究活動を深化させる契機とすることである。兵庫県立国際高等学校からは SGH 担当の前川が、兵庫県立星陵高等学校、兵庫県立三木高等学校、兵庫県立三田祥雲館高等学校、兵庫県立兵庫高等学校の教員 4 人を対象にランチョンセミナーを実施した。内容は、兵庫県立国際高等学校が開発した課題研究活動に関するルーブリック「兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック」の活用について報告を行った。具体的には、「兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック」をもとにして、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、論文「提案 日本の選択」課題研究活動のルーブリックといった生徒の課題研究活動ごとに派生ルーブリックを作成して生徒の課題研究活動を評価するとともに、課題研究活動の改善に



本校 2 年次生によるプレゼン

活かしている実践報告を行った。

午後は、ポスターセッションが行われた。本校は8つの発表を行った。具体的には、1年次生による「カンボジアの高校生に対する日本での就労意識に関する調査 - タイ・フィリピンとの比較を中心に - 」、「カンボジアでの移出労働経験者に対する調査結果の分析 - 2016年と2019年の調査結果の比較から見えてくるもの - 」、「日本人ブラジル移民史に関する考察 - 1908～1980年日本人移民社会はブラジルでどのように発展したのか - 」、「2年次生による「日本における外国人の子どもの貧困に関する事例研究 - 子ども食堂に焦点を当てて - 」、「「ハーフ」における言語能力と自己認識に関する研究 - インドネシアと日本のハーフに焦点を当てて - 」、「外国人女性に対する言語支援についての事例研究 - 日本に居住する外国人女性の日本語教育支援に焦点をあてて - 」、「3年次生による「日本在住の外国人生徒の母語・母文化の継承 - ある高等学校に在籍する外国人生徒のエスノグラフィ」、「外国人労働者の受け入れについての事例研究 - 技能実習における家族滞在に焦点を当てて - 」の発表を行った。それぞれ10分間の発表と5分間の質疑応答を2回実施した。本校生の発表には大学教員や高校教員、高校生、社会人など多くの聴衆が集まり、それぞれの課題研究の成果について報告を行い、これに対して聴衆から多くの質問や助言をいただき、本校生が丁寧に応じた。



本校3年次生によるプレゼンテーション

あわせて午後からはポスター発表コンテスト二次審査が行われた。一次審査を通過した8つの学校の代表者がホールにてポスター発表を行い、3人の審査員による質疑が行われた。本校からは一次審査を通過した2年次生の清間有咲が「日本における外国人の子どもの貧困に関する事例研究 - 子ども食堂に焦点を当てて - 」というテーマで10分間のポスター発表を行った。その後、3分間の質疑応答が行われ、3人の審査員からの質問に本校生は丁寧に回答した。

ポスターセッション終了後に全体で表彰式と講評が行われた。そこで、2次審査で発表を行った本校2年次生の清間有咲が優秀賞を受賞した。WHO健康開発総合研究センター医官の茅野龍馬氏より講評があり、課題研究の意義と進め方について話された。その中で先行研究や先行事例および根拠のあるデータを収集することの重要性を述べられた。そのうえで、本校生の研究はこれらの基本的なプロセスができていると高い評価を受けた。本校の課題研究活動を高く評価していただくことに感謝するとともに、生徒にとって自信とこれからの課題研究活動へのよい動機づけとなり、これを契機にさらに課題研究活動を進めていきたい。

この日の体験は、これからも課題研究活動を続ける1,2年次生にとっては非常に良い経験となり、また論文をまとめた3年次生にとっては成果発表のよい機会となり、非常に有意義な一日だった。



優秀賞を受賞



優秀賞 受賞ポスター

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(26) 校外での英語による「SGH高槻高等学校第2回グローバルヘルス高校生フォーラム」における課題研究活動

目標

SGH高槻高等学校第2回グローバルヘルス高校生フォーラムに参加することで、本校が取り組んできた課題研究活動の成果を活かし、フォーラムに貢献することを目的とする。あわせて、英語による発信力を育成することを目標とする。

対象学年

3年次生 2人

アジアの架け橋プロジェクト留学生1人、計3人



本校生による英語での発表の様子

場所

高槻高等学校

高槻市沢良木町2-5

日程

2019年1月25日 (土)



グループディスカッションの様子

内容

- 1) 基調講演
Dr. Sarah Louise Barber WHO神戸センター所長
- 2) テーマ別ワークショップ
- 3) 生徒発表
- 4) 講評

内容の詳細

本校で課題研究活動に取り組む3年次生2人とアジアの架け橋プロジェクト留学生1人が高槻高等学校で開催された「第2回グローバルヘルス高校生フォーラム」に参加した。このフォーラムには高槻高等学校・中学校の生徒135人とスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されている高等学校から招待された18人の生徒が参加した。まず、WHO神戸センター所長であるサラ・ルイーズ・バーバー博士によるグローバルヘルスに関する英語による基調講演があった。次に、生徒はテーマ別ワークショップが行われた。参加生徒は設定された16のテーマに分かれてグループディスカッションを英語で行った。本校の3年次生は「ファストファッションと健康」と「支援と健康」、アジアの架け橋プロジェクト留学生は「肥満と健康」というテーマのワークショップにそれぞれ参加した。「ファストファッションと健康」に参加した3年次生は、バングラデシュなどの途上国では移動労働者や女性などの低賃金労働によりファストファッションの製品が生産されていることを指摘しグループ討論を進めた。また「支援と健康」に参加した3年次生はグループでのディスカッションを自らパワーポイントを作成し英語でまとめた。「肥満と健康」に参加したアジアの架け橋プロジェクト留学生は自らの体験を話し、グループディスカッションを進める契機を作った。このワークショップの後、全員が集まりそれぞれのグループからディスカッションの内容について報告を英語で行った。本校から参加した3人もグループの一員として英語でプレゼンテーションを行った。生徒の報告に対して英語で講評があり、閉会あいさつでフォーラムは終了した。他のSGHの課題研究活動に取り組む生徒と意見を交わすことができ、よい経験となった。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(27) 校外の英語での普及活動「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における課題研究活動

目標

本校の SGH 課題研究活動の成果を広く中学生にも普及させることを目的とする。また、中学生に日本には多くの外国人が居住していることを認識し、自分と異なる様々な人々の文化や価値観を尊重し、共に生きる社会を作り上げることの大切さに気付かせる。

対象学年

2 年次生 4 人

プレゼンテーション対象

西宮市立西宮浜中学校 3 年生 71 人、教員 5 人
西宮市教育委員会職員 1 人

場所

西宮市立西宮浜中学校 西宮市西宮浜 4-2-31

実施日

2019 年 7 月 5 日(金)

内容

国際高校 2 年生 4 名による SGH(スーパーグローバルハイスクール)課題研究活動の報告

1) 国際高校生徒によるプレゼンテーション

- 国際高校の紹介 英語
- 国際高校生徒の自己紹介 英語
- 国際高校 SGH 課題研究活動の紹介 生徒による英語劇
- 質疑応答 日本語

2) 謝辞 (西宮浜中学校 生徒会長)

内容の詳細

課題研究活動に取り組む 2 年次生プロジェクトチームのメンバー 4 人が西宮市立西宮浜中学校で 3 年生 71 人を対象に、本校の SGH 活動内容についてプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは質疑応答を除き、英語で行った。この時間は、西宮浜中学校の英語の授業の一環として実施された。

まず、本校の紹介を英語で行った。次に、英語劇を行った。ストーリーは、抽選会で世界旅行が当たった本校生が、中国、韓国、ブラジルの 3 か国を旅するというものである。各国をめぐるなかで、中学生にクイズを出題し、中学生に答えてもらった。中国では、主人公が水餃子を食べるシーンで、日本では焼き餃子が主流だが、なぜ中国では水餃子が主に食べられているのかという質問をした。そして、日本と中国の食文化の共通点と相違点について話をした。次に、韓国では国際高校生が韓国のアイドルグループ TWICE(トゥワイス)に扮してダンスを披露した。そして、このグループには日本人がいるが誰が日本人かという質問をパワーポイントで行った。韓国は現在多くの移民を受け入れる国であり、このグループにも日本人の他、台湾人もいることを説明した。最後に、ブラジルの場面では、主人公がリオのカーニバルに参加するシーンを演じた。最後の質問は、リオのカーニバルにアジア系のチームが参加しているが、なぜブラジルの伝統的行事であるカーニバルにアジア系民族が参加しているかを質問した。彼らはブラジルで生まれた日系ブラジル人であり、ブラジルでは日系ブラジル人が社会で認められているという説明をした。最後に、主人公が中国、韓国、ブラジルという 3 か国を旅した理由について説明した。これらの国は日本の在留外国人のうち人数が多い上位 5 か国であり、私たちは多くの外国人とともに暮らしていることを理解しなければいけないことを説明した。なお、この英語劇では本校生は中国や韓国の民族衣装を着てプレゼンテーションを行った。また、ブラジルのサンバのシーンではブラジル民族楽器を演奏した。これらの衣装や楽器は本校にある県教育委員会子ども多文化センターのご協力により貸していただいたものである。この英語劇の脚本は、昨年度プロジェクトチームが移民研究の成果を中学生にも理解できるように作成してきたものを今年のチームが作り直したものである。今年度もクイズやダンスを取り入れ中学生が参加できる形態としたことで、中学生に興味を持って聞いてもらった。

すべてのプレゼンテーションを終え、質疑応答の時間では、本校生が中学生の質問を丁寧に答えた。

中学生への SGH 課題研究活動のプレゼンテーションは昨年度に続き 2 回目だが、中学生の皆さんが積極的に参加していただいたおかげで非常に有意義な経験となった。



本校生徒による英語劇の様子



本校生徒作成プレゼンテーション用
パワーポイント

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(28) 校外での英語での普及活動「SGHプレゼンテーション@国際交流セミナー」における課題研究活動

目標

本校のSGH課題研究活動の成果を大学の留学生にも普及させることを目的とする。また、本校生の研究成果を英語で報告し、これに対して留学生とディスカッションを行い、課題研究活動を進める契機とする。

対象学年

3年次生6人、2年次生4人、1年次生30人 留学生(アジアの架け橋プロジェクト1人を含む)2人 計42人

プレゼンテーション対象

兵庫県立大学留学生 40人、学生 4人
兵庫県立大学教員 2人

場所

芦屋ルナホール 芦屋市業平町8番24号

実施日

2019年12月18日 (水)



本校生と兵庫県立大学留学生の交流の様子

内容

国際高校3年生2名と2年次生4人によるSGH(スーパーグローバルハイスクール)課題研究活動の報告

1) 国際交流セミナー

- a) 国際高校生による開会挨拶 英語
- b) 国際高校生と兵庫県立大学留学生の交流(自己紹介) 英語
- c) 国際高校生によるポスターセッション 英語
- d) 国際高校生と兵庫県立大学留学生とのディスカッション 英語
- e) 国際高校生による閉会挨拶 英語

2) 校長による謝辞 英語

内容の詳細

課題研究活動に取り組むプロジェクトチームのメンバー3年次生2人と2年次生4人が芦屋ルナホールで兵庫県立大学留学生40人を対象に、本校のSGH活動内容についてポスターセッションを行った。プレゼンテーションおよびディスカッションはすべて英語で行った。

まず、本校3年次生の司会が英語で開会挨拶をした後、国際交流セミナーに参加した本校生と兵庫県立大学留学生がいくつかのグループに分かれてお互いに自己紹介を英語で行った。次に、本校生が兵庫県立大学留学生に向けてSGH課題研究の成果をポスターセッションで発表した。3年次生の中沢薫は“A case study on the Japanese nationality act: focusing on people with multiple nationality”というテーマで、日本の国籍制度と重国籍保有者のアイデンティティの関係を調査した結果について英語で報告を行った。3年次生の長野羽良は“A Study on Foreign Workers in Japan: Focusing on Technical Intern Trainees and Family Accompaniment in Japan”というテーマで、外国人労働者の家族滞在に注目し、ヨーロッパでは様々な法により外国人労働者の家族滞在が認められている事例をあげ、人権の観点から日本の技能実習生の家族滞在を認めるべきであるという報告を英語で行った。2年次生の4人は“Consideration of survey results for Filipino who have moved out of the Philippines: What we can do for foreigners”というテーマで、フィリピンの移出労働経験者、特に日本への移出労働経験者の聞き取り調査の結果を分析し、外国人が日本で暮らすうえでの課題を明らかにした。同時に、日本人と外国人

が共に暮らしやすい国づくりについての提案を英語で行った。プレゼンテーションの後は、本校生と兵庫県立大学留学生とでそれぞれのテーマに関するディスカッションを英語で行った。留学生からの質問に意見に対して、本校生が英語で丁寧に応答した。なお、本校生の発表に関してはアジアの架け橋プロジェクト留学生とチェコの留学生がサポーターとして参加した。また、本校1年次生も積極的にディスカッションに参加した。

大学の留学生へのSGH課題研究活動のプレゼンテーションは今回が初めてであったが、留学生から多くの助言や意見をいただき、課題研究を進める本校生にとっては非常に有意義な経験となった。



本校生徒によるプレゼンテーションの様子

本校生徒作成 英語によるプレゼンテーション用ポスター

A Study on Foreign Workers in Japan: Focusing on Technical Intern Trainees and Family Accompaniment in Japan

Urara Nagano from Hyogo Prefectural International High School

The purpose of this research

In Japan, technical intern trainees are not allowed to bring over their families → A comparison will be made with Germany, which already accepts immigrants and their accompanying families → The problems technical intern trainees have been accepted in Japan will be examined

Preceding study

Family Accompaniment
Unlike foreign workers, technical intern trainees are not allowed to stay with their family, not even for a fixed term

Right to Family Reunification
In Germany, residency laws were changed in 2007 and new rules for family accompaniment were introduced.

International Covenant on Human Rights and European Convention on Human Rights

Definition of Family Accompaniment and the present situation of Technical intern trainees

Definition of Family Accompaniment
Foreign workers' rights to stay with their families in the country they work in. Family means spouse and a child.

Definition of Technical intern training

Divide	Term
1	1year
2	3years
3	5years

Definition of Designated Labor

Divide	Term
1	3years
2	5years

Technical intern trainees residing

Qualification for which family stay allowed

- Professor
- Artist
- Religious Activities
- Journalist
- Highly Skilled Professional
- Business Manager
- Legal/Accounting Services
- Medical Services
- Researcher
- Instructor
- Engineer / Specialist in Humanities/Int'l Services
- Intra-Company transferee
- Care Worker
- Entertainer
- Skilled Labor
- Designated Labor2
- Cultural Activities
- Student

The real condition of Technical intern trainees

Problem

① They contribute to Japan by working in fields which are suffering from a labor shortage

② They can stay in Japan for a long time due to Specified Skilled Worker

③ Technical intern trainees and Specified skilled workers(2) are not allowed to stay with their families

Occupations lacking labor power → Can't live with their families for at least 8 years

Survey

Interview-based investigation

Takada Industry Consolidated Cooperation(26/8/2016)

Mr. E, who has a wife and children (34years old)

Mr. T, who has father, mother and a sister (29years old)

Mr. F who has father, mother a sister and a brother (29years old)

Mr. S who works as Engineer/Specialist in Humanities/Int'l Services (30years old)

Paliparan, Manila, Philippines (4/11/2018)

Mr. B who was working as technical intern trainee who has a wife and children (37years old)

Conclusion

(Human rights) The right to live with their families (Thoughts) They want to live with their families

Allow Technical Intern trainees to live with their families

(Qualification for stay) Qualification for stay which working allowed (Situation changed) Designated Labor status created = they can stay in Japan for 8years maximum

A case study on the Japanese nationality act: focusing on people with multiple nationality

Kaoru Nakazawa Hyogo Prefectural International High School, grade three student

Purposes of the survey

In Japan, people who have multiple nationalities must choose a nationality by a certain time limit. → This study focuses on people with multiple nationalities, and explore problems caused by the Japanese nationality act.

Preceding studies

I Satoko Takeda "The State of the Nation"
There is a gap between an act and identities. Japan need to approve multiple nationalities.

II Mari Shiba "Multiple Nationalities and A New Perspective on Identity"
Korean adoptees select multiple nationalities. They have transnational identities.

III Yoshihiko Fukuda "The Reform of the German Nationality Law and Dual Nationality"
The German nationality law was changed in 2000

Point of discussion

① change to jus soli from jus sanguinis → Result ○

② right or wrong of dual nationalities → Result ×

Basic dates

Unit:10K

Unit:10K

A case of nationality problems

When a child acquire a Russian passport, the court finds that he has acquired a foreign nationality and loses his Japanese nationality.

The governments opinion

It is difficult to support current nationality act.

Survey

Choice of nationality(assume the current nationality act)

Unit: people

Choice of nationality(when not restricted)

Unit: people

Basic information

date: September 5-7, 2018

Target: 14 students who are with multiple nationalities in Hyogo prefectural international high school

Method: questionnaire survey

Purpose: To learn high school students' opinions about nationality act

Students' opinions

It is like said to give up either nationality

Both countries are home for me.

We want to approve multiple nationality.

Problems

1. The government decides identities of people with multiple nationalities against their will.
2. Many people do not know this problem, and there is no opportunity for discussion.
3. Japanese nationality act does not guarantee the civil rights of dual nationals.

Considerations

Government does not approve multiple nationality. → A nationality act → Gap → Identities → Many people with multiple nationalities have transnational identities.

we need to discuss about a nationality act.

実施報告書

7 課題研究活動以外の取組

(1) 学校設定科目「言語技術における取組」

目標

言葉を有効に使いこなす技術を身につけ、3年次において論文を作成するための下記の3つの能力をつけることを目標とした。

- 1) 物事を論理的・分析的に検討し、適正な判断ができる能力
- 2) 問題解決する能力
- 3) 考察したことを口頭・記述で自在に表現できる能力

対象学年

2年次生20人(グローバルリーダーコースGLC)



3年次生による支援の様子

授業形態

本校の学校設定教科(国際)の2年次生の学校設定科目として平成28年度よりスタートした。教諭2名が2単位の授業を2時間連続で行った。テーマに合わせて一斉授業、個別指導、グループワークなどの形態をとった。

内容

- 1) 言語力(漢字、語彙、敬語など日本語で正しく表現できる力)を身につける
- 2) 考える力、書く力(テーマに基づき、論理的に考え、日本語で文章表現する力)を身につける
- 3) 聞く力、話す力(テーマに基づき、適切に質問したり、質問に答えたりする力。相手の主張を正しく理解し、正しく自分の主張をする力。異なる意見の中から、更に良いものを導き出す力)を身につける。
- 4) 論文作成に向けての先行研究に関するリサーチ活動および調査項目(リサーチクエスション)の構築

指導の経緯

2017年度において、この言語技術の授業で作成した論文を本校生が移民政策学会2017年度年次大会で発表を行った際、学会側から「研究の方法や調査の方法、調査結果に基づく論理展開など、研究の中身というより研究方法に関する事前学習が必要と思われる」というコメントをいただいた。これを受けて、2017年度より言語技術の授業で論文を書く前に先行研究のリサーチ活動に取り組んだ。2018年度は、さらに調査項目(リサーチクエスション)の構築を授業内で行った。さらに今年度は、論文を完成させた3年次生が授業に入り込み2年次生の支援を行った。

内容の詳細

1学期は、表記、文体の統一、文の係り受け、要約の仕方など正しい文章を書くための基礎基本の徹底に重点を置いた。2学期は、文章の構成力、読解力の養成を中心に行なった。3学期は論文作成に向けて、各自テーマの設定、テーマにそった先行研究のリサーチ活動を行った。リサーチ活動はサイニィア・アティクルを活用した論文の検索、および検索した論文の要約を行うことで先行研究の学習をした。あわせて調査項目(リサーチクエスション)の構築にも取り組んだ。なお、今年度は論文を完成させた3年次生が授業に参加することで2年次生の活動を支援した。

課題研究のテーマ設定に関しては、プレゼン資料を作成して授業内で発表会を行い、評価表を用いて生徒および教員による相互評価を行った。具体的には、テーマ設定、先行研究、調査項目(リサーチクエスション)の3つ項目に関して評価を行った。

成果および成果の発表

今年度は先行研究の学習および調査項目(リサーチクエスション)の構築に取り組むことで、論文作成にむけて昨年度より一歩進んだ準備をすることができた。なお、これまで取り組んできた3,000字の論文作成については生徒の自主作成としたが、論文を書いた生徒のうち4人が移民政策学会2019年度冬季大会および国際開発学会&人間の安全保障学会2019共催大会で採用され、学会発表を行った。

実施報告書

7 課題研究活動以外の取組

(2) 科目「社会と情報」における取組

目標

ネットワークや情報機器を使って情報活用能力を身につけることを目標とする。情報機器や情報通信ネットワークを利用してコミュニケーションをはかるための基礎的なスキルを学ぶ。また、SGH課題研究活動と連携して、移民研究を進める契機とする。

対象学年

1年次生全員121人

授業形態

本校の1年次生の必修科目として設定している。

教員2人、2単位、2時間連続で行う。

内容

- 1) 情報機器の使い方を学ぶ
- 2) 情報の伝え方を学ぶ
- 3) 情報社会の課題を考える
- 4) 情報社会のしくみを知る

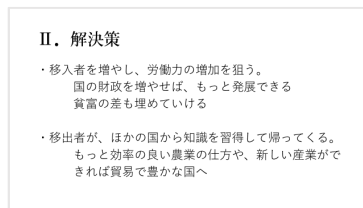
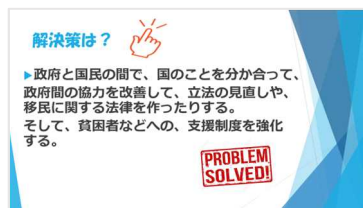
内容の詳細

1学期に1年次生全員が「各国の広報大使」をテーマに、自分が選んだ国について、その国の移民情勢や移民問題を調べ、あわせて問題の解決策を考えパワーポイントのスライドシート3枚にまとめた。その上で全員が調べた国についてパワーポイントを使い、一人2分間のプレゼンテーションを行った。

成果および成果の発信

生徒のパワーポイントスライドシートを成果集としてまとめた。また、調べた移民情勢や移民問題に関する知識はディベートや「移民マップ」課題研究活動の参考とした。

本校生が各国の移民問題について調査し、作成したスライドシートの例



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(1) 評価方法

目標

育てたい生徒の能力や資質について観点別に目標を設定し、課題研究活動の過程で評価を行うことで、課題研究活動における課題を検証することにより課題研究活動を改善し、生徒の能力や資質の向上につなげることを目標とする。

本校のルーブリック

平成 27 年度に「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を作成した。また、このルーブリックを基に様々な課題研究活動に関するルーブリックを作成し、改定も加えながら生徒の実態把握と能力の向上に結びつけるために、すべての SGH 課題研究活動に関する評価の中心として活用した。

方法

「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」は、次の 3 つの観点について評価を行うものである。すなわち、(a)創造的思考力、(b)批判的思考力・論理的思考力、(c)異文化理解、の 3 つの観点について 4 段階で評価するものである。

本年度は SGH 課題研究 5 期に入り、本校 3 年次生全員を対象にこのルーブリックによる最終評価を行い、3 年間の課題研究活動の成果を検証するとともに、昨年度の 3 年次生と比較検証を行った。

また、このルーブリックを基に、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、学校設定科目「提案日本の選択」論文課題研究活動のルーブリックを作成し、それぞれの課題研究活動でこれらのルーブリックを使って評価を行った。なお、これらの課題研究活動では、取り組みを始める最初の段階でルーブリックを生徒に示し、身につけてほしい能力や資質について説明をした。

あわせて、このルーブリックを基に作成した「異文化理解に関するルーブリック」を用いて 1,2 年次生全員を対象に定期的に評価を行い、課題研究活動の成果を検証した。最後に「発表用ルーブリック」を用いて、SGH 最終発表会でプレゼンテーションを行った生徒に対する評価を行った。また、最終発表会では外部支援員や保護者および一般来場者による課題研究活動の成果に対する評価を行った。

兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック

	創造的思考力	批判的思考力 論理的思考力	異文化理解
S	複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定する。その課題の論点（論争になる点、容易に解決できない点）を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。	国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択できる。根拠に基づいて、問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面や、ディスカッションの場面においても自分の考えを論理的に説明できる。	自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の人にもわかりやすく、その特徴を説明できる。異なる文化圏の価値観に対しても、関心を持って、知識を収集する。地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考えることができる。
A	指導を受けながら、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や文献などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。	国際的な問題を分析・解釈し、与えられた資料だけでなく、1点か2点の自分で選んだ資料を加えて、取り組むことができる。根拠に基づいて問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面で自分の意見を明確に述べるることができる。ディスカッションにおいても、妥当な意見を述べるることができる。	自身の文化圏の価値観を自分なりの言葉で説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重できる。地球規模の問題を自身の問題として捉え、背景をある程度理解したうえで、双方の立場を尊重した思考ができる。
B	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。根拠に基づいて解決策を自分なりに選択できる。	情報を事実と意見の違いを区別できる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分の意見がある程度説明できる。	自身の文化圏の価値観を中心としながらも、わかりやすく説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重すべきと考えることができている。地球規模の問題と自身の関連性を理解し、相手の立場を考慮できる。
C	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。	情報を事実と意見の違いに気が付くことができる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分なりに考えを組み立てることができる。	指導の下、自身の文化圏について考えることができる。異なる文化圏の価値観について表面的に理解できる。興味・関心の範囲内であれば、自身と社会を結びつけることができる。

実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

1) 3年間のSGH課題研究活動に関する最終評価

評価対象

3年次生 117人(全員)

調査日

2020年1月24日(金)

3年間のSGH課題研究活動の評価

3年次生全員を対象に3年間の課題研究活動を評価した。評価には[資料1]「SGH自己評価票(兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック)」を使用し、(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解、という3つの観点について4段階で自己評価を行った。あわせて、3つの観点のうち、最も伸びた力を回答させた。最後に、3年間で何が変わったかを自由記述させた。なお、最終発表会において外部支援員や保護者および一般来場者にも同じ評価票を用いて評価を実施した。

分析

まず、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生(15回生)と昨年度の3年次生(14回生)の比較分析を行う。資料2で示したとおり、学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.9%であった。昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.1%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が0.8%高かった。なお、過去3年間において最も高い数値となった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア4をつけた生徒は27.8%であった。一方、昨年度の3年次生(14回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が23.8%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が4.0%高くなった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア4をつけた「提案日本の選択」選択者は44.4%であった。これに対して、昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(c)異文化理解に関してスコア4をつけた生徒は23.8%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が20.6%高くなった。なお、過去3年間において最も高い数値となった。ちなみに、3つの観点のうち最も伸びたと思う力は何かという質問に対して、「提案日本の選択」選択者の今年度の3年次生は、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解と回答した生徒がともに38.9%、(a)創造的思考力と回答した生徒は22.2%であった。特に、(c)異文化理解の力が向上したと回答した生徒が過去3年間で最も多くなった。

この結果から、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生は、過去3年間で最も(c)異文化理解の力が向上したといえる。これは昨年度、学校設定科目「提案日本の選択」を選択している生徒の異文化理解の力が向上していないことがわかり、特に3年次生(15回生)の異文化理解の力の向上が今年度の最も重要な課題として様々な取り組みを行った。具体的には、学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動を通して、本校に在籍する他の国にルーツを持つ生徒に焦点を当て、彼らがどのような困難を経験し、その困難をどのように乗り越えてきたかを分析を行った。エスノグラフィの手法を用いて調査分析を行い生徒が論文を作成した。そして、全校生および全職員が対象とな

る特別講演会に多文化共生を専門に研究されている明治大学の山脇啓造教授を招聘し、「多文化共生社会をめざして」というテーマでお話をいただいた。ルーブリックによる調査結果を分析したうえで課題を設定し、計画的かつ戦略的に課題解決に取り組んできた成果が出たと判断できる。

次に外部支援員と「提案日本の選択」選択者との比較分析を行う。(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.9%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は58.3%であり生徒より19.4%高かった。ちなみに昨年度、スコア4をつけた外部支援員は37.5%で昨年度より20.8%高くなった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア4をつけた生徒は27.8%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は47.2%で生徒より19.4%高くなった。ちなみに昨年度、スコア4をつけた外部支援員は42.9%で昨年度より4.3%高くなった。

この結果から、外部支援員からも「提案日本の選択」課題研究活動は(a)創造的思考力および(b)批判的・論理的思考力の育成に効果があり、しかも毎年これらの力は向上していると判断できる。

最後に、学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒における今年度の3年次生(15回生)と昨年度の3年次生(14回生)の比較分析を行う。学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が44.2%であった。昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が50.5%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が6.3%低かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒でスコア4または3をつけた生徒は41.8%であった。一方、昨年度の3年次生(13回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が44.3%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が2.5%低かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒は60.5%であった。これに対して、昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた生徒は76.3%であり、今年度の3年次生(15回生)の方が15.8%低かった。

この結果から、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒が昨年度よりも(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解のすべての力が昨年度より低下した。今後は、学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動の成果が、学校設定科目「提案日本の選択」を選択していない生徒にも波及できるよう普段の取り組みを改善していくことが課題といえる。

資料3に示したとおり、「3年間のSGH課題研究を振り返り、何が最もかわったか」という質問に対して、「提案日本の選択」選択生徒で、「色々なことに目を向けられるようになり、視野が広がった」、「日本のみならず世界での出来事に興味を持ち、自分から進んで調べるようになった」等、物事を多角的かつグローバルな視点で考える力がついたと回答した生徒が19人中8人いた。また、「プレゼン能力が向上した」と回答した生徒が19人中5人いた。特に、「物事に対して見直しを徹底するようになった」という回答に象徴されるように、課題研究活動を通して自分の活動や成果を振り返り分析を行うことができたようになった。つまり、「提案日本の選択」課題研究活動は、生徒のメタ認知を高める効果があったといえる。

【資料1】「SGH 自己評価票 (兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック)」

SGH 自己評価票

年 組 番(名前)

あなたが3年間のSGH課題研究活動を通して、どのような力がついたと思いますか。該当する番号に をつけなさい。

1 創造的思考力

4	複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定する。その課題の論点(論争になる点、容易に解決できない点)を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。
3	指導を受けながら、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や文献などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。
2	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。根拠に基づいて解決策を自分なりに選択できる。
1	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。

2 批判的思考力・論理的思考力

4	国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択できる。根拠に基づいて、問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面や、ディスカッションの場面においても自分の考えを論理的に説明できる。
3	国際的な問題を分析・解釈し、与えられた資料だけでなく、1点か2点の自分で選んだ資料を加えて、取り組むことができる。根拠に基づいて問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面で自分の意見を明確に述べるができる。ディスカッションにおいても、妥当な意見を述べるができる。
2	情報を事実と意見の違いを区別できる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分の意見をある程度説明できる。
1	情報を事実と意見の違いに気が付くことができる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分なりに考えを組み立てることができる。

3 異文化理解

4	自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の人にもわかりやすく、その特徴を説明できる。異なる文化圏の価値観に対しても、関心を持って、知識を収集する。地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考えることができる。
3	自身の文化圏の価値観を自分なりの言葉で説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重できる。地球規模の問題を自身の問題として捉え、背景をある程度理解したうえで、双方の立場を尊重した思考ができる。
2	自身の文化圏の価値観を中心としながらも、わかりやすく説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重すべきと考えることができている。地球規模の問題と自身の関連性を理解し、相手の立場を考慮できる。
1	指導の下、自身の文化圏について考えることができる。異なる文化圏の価値観について表面的に理解できる。興味・関心の範囲内であれば、自身と社会を結びつけることができる。

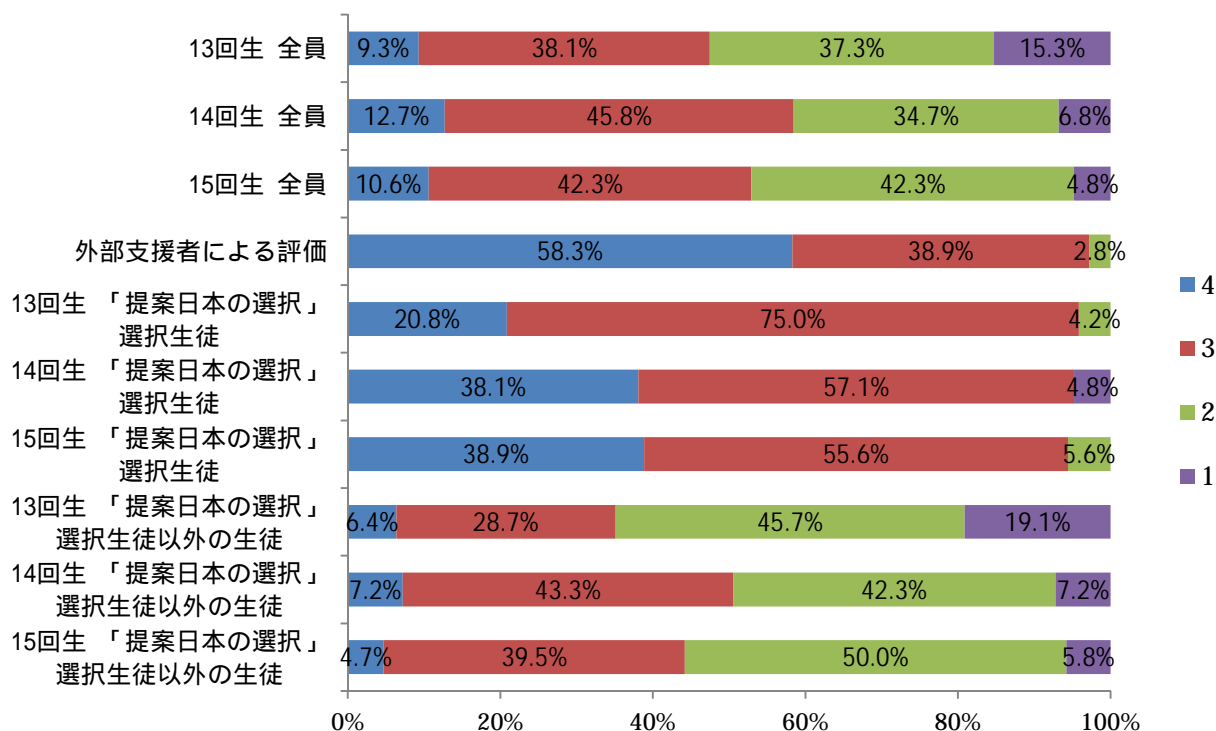
4 あなたがこの3年間のSGH課題研究活動で最も伸びたと思う力は何ですか。該当するものに をつけなさい。

創造的思考力 批判的思考力・論理的思考力 異文化理解

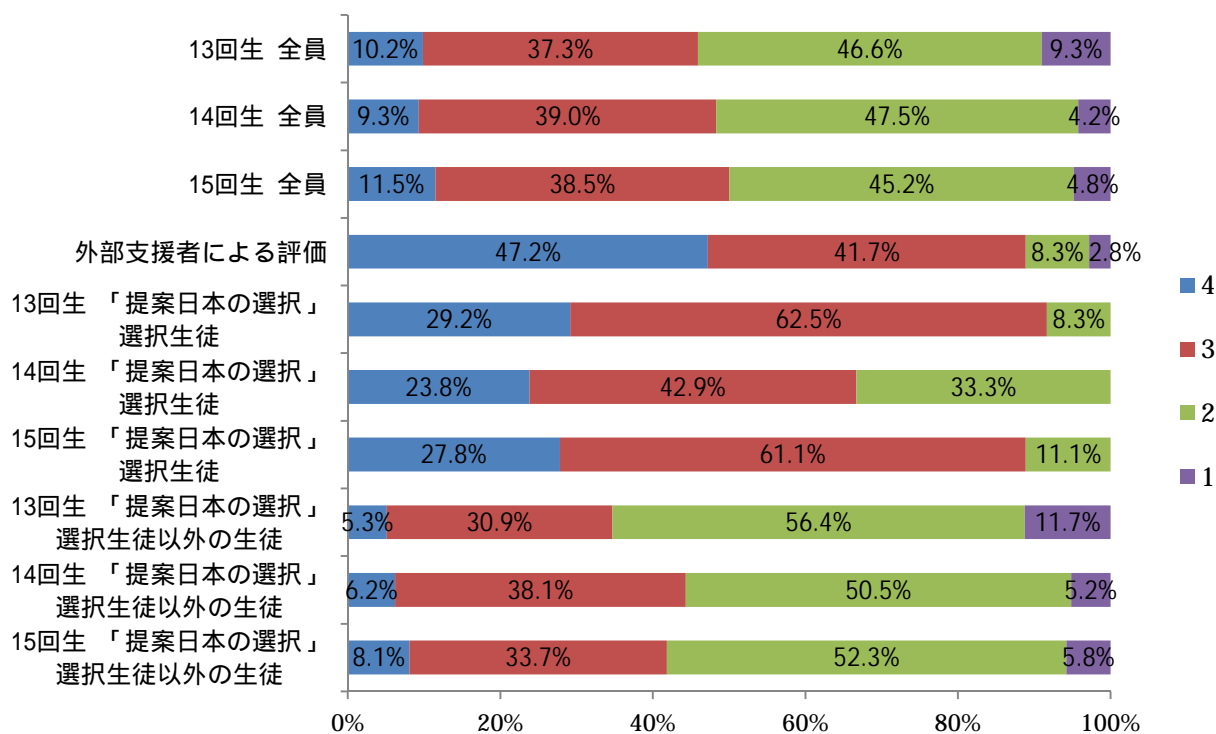
5 あなたがこの3年間のSGH課題研究活動を振り返り、自分の中で3年前より何が最も変わったと思いますか。

【資料2】3年間のSGH 課題研究活動の評価結果 (2020.1.24.実施分)

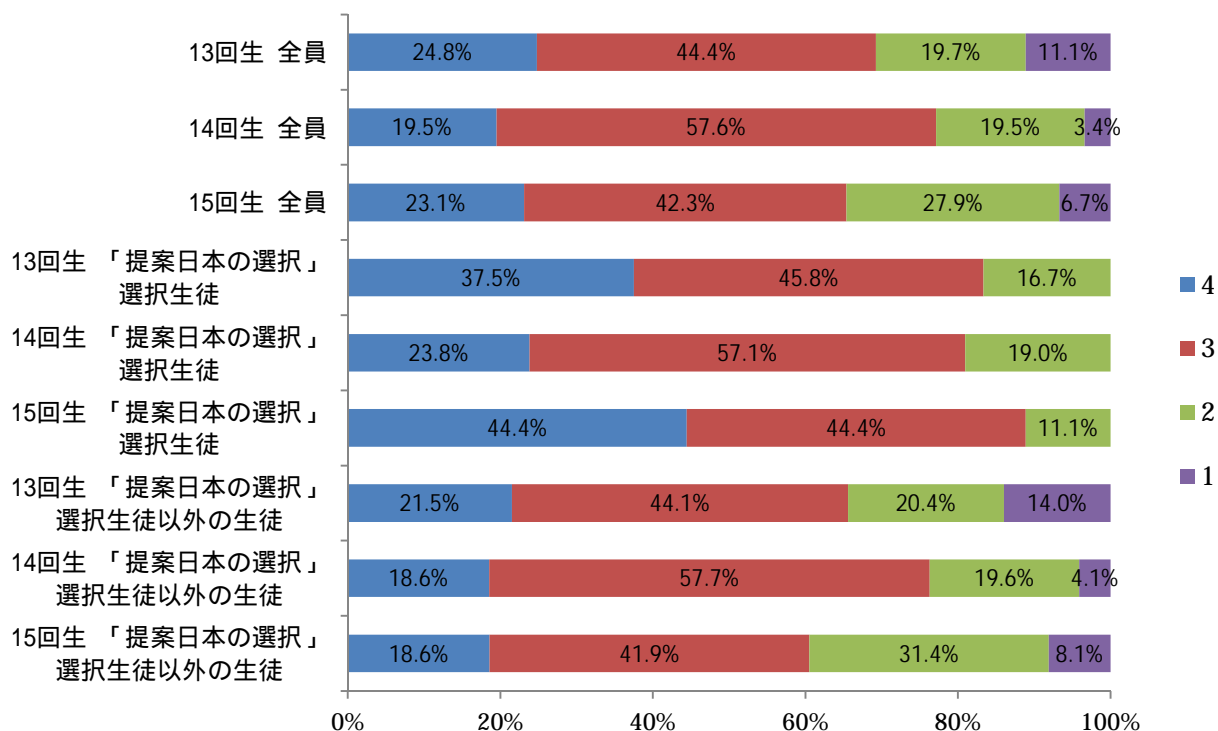
創造的思考力



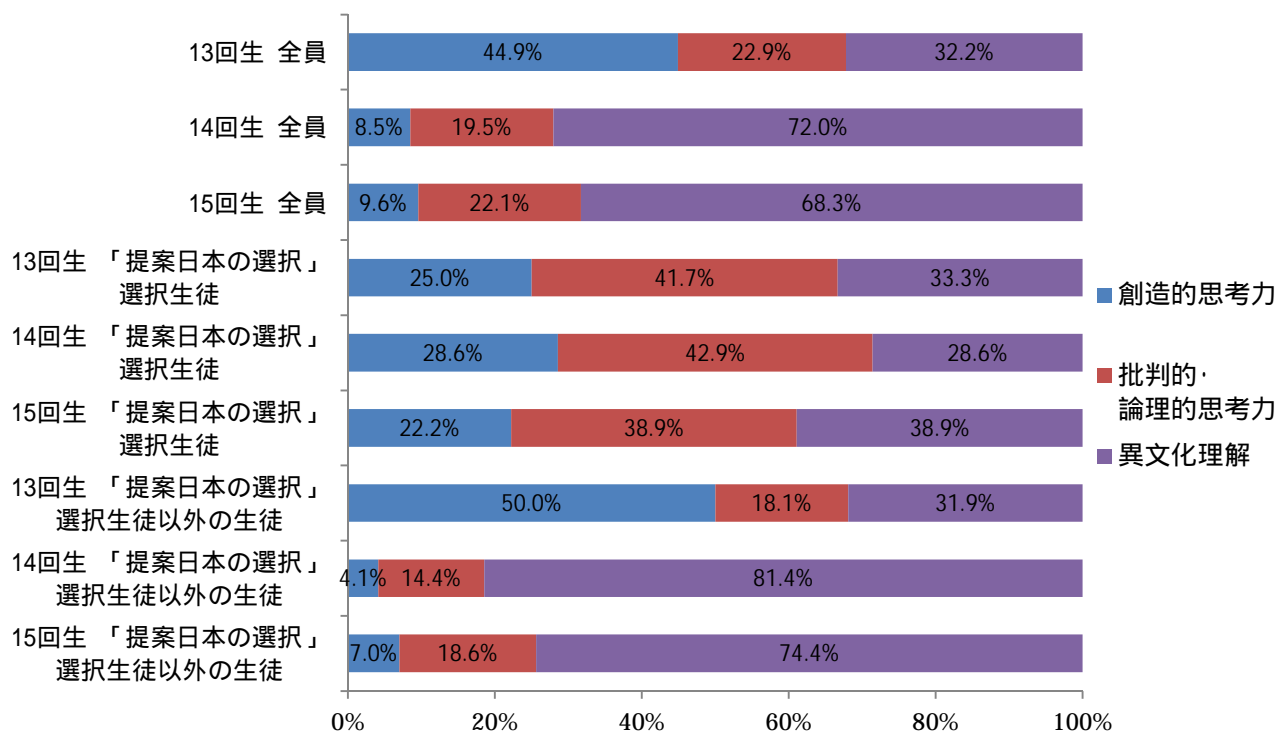
批判的・論理的思考力



異文化理解



最も伸びたと思う力



5 この3年間のSGH課題研究を振り返り、3年前より何が最も変わったと思うか。

生徒A：ニュースを見る時間が増えた。SGH活動を通してある程度知識を身につけることができたので、外国に関わるニュースなどは理解して見ることができるようになった。

生徒B：国際問題に対する意識が変わった。

生徒C：プレゼン能力が上がった。

生徒D：国際的な問題に目を向けて考えられるようになった。

生徒E：どんなことにも疑問を持てるようになり、考え方が変わった。色々なことに目を向けられるようになり、視野が広がった。

生徒F：世界情勢がデータとして分かるようになった。

生徒G：他国についてのニュースを見るようになり、自分の意見を持てるようになった。

生徒H：創造的思考力が身に付いた。

生徒I：論文を書く力、分析力が身についた。

生徒J：論理的思考力、プレゼン力、自信が身についた。

生徒K：論文作成を通して、物事に対して「見直し」を徹底するようになった。

生徒L：一つの問題を様々な人の立場から考えられるようになった。

生徒M：目的を設定し、自分なりに研究していく力が身についた。そして新たな発見や分からないことが分かるようになる楽しさを学んだ。また日本のみならず世界での出来事に興味を持ち、自分から進んで調べるようになった。

生徒N：プレゼン力が向上した。また異文化理解が深まり、問題の捉え方が変わった。

生徒O：プレゼン力が最も向上した。

生徒P：世界の問題に目を向けることの大切さを学んだ。

生徒Q：自分で情報を収集し、問題点を考える力が身についた。

生徒R：何よりも積極性が身についた。

生徒S：知識が増え、プレゼン力が向上した。

実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

2) 1,2年次生における「C.C.C.1年間のまとめ」の自己評価と全年次生の比較

評価対象

1年次生 118人

2年次生 114人 海外留学中の2人を除く

調査日

1年次生 2019年4月2日(火)、2020年2月3日(月)

2年次生 2019年1月30日(木)、2020年2月3日(月)

評価

1年間を通してC.C.C.の中で課題研究活動に取り組んできた1、2年次生全員に自己評価を行った。1年次生には【資料4】17回生「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2019年度版を、2年次生には【資料5】「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2019年度版(16回生用)を使用した。それぞれ、(a)異文化理解(b)英語の発信力という2つの観点について4段階で評価を行った。ちなみに、1年次生に使用したアンケートの間1と間2は、2年次生のアンケートの間1を2つに分けたものであり、(a)異文化理解の観点に関する評価を行うものである。

分析

1年次生(17回生)に関して、資料6で示したとおり、「日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できる」および「日本と異なる国について、その特徴を複数の観点から説明できる」という異文化理解に関して、スコア4または3をつけた生徒は入学前(4月)では58.3%および50%に対して、1月では78.9%および59.7%となり、それぞれ20.6%および9.7%高くなった。このことから、ディベート課題研究活動および「移民マップ」課題研究活動を通して海外の社会情勢を知ることにより、異文化理解が確実に向上していることが分かった。また、「英語で日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できる」という英語による発信力に関して、スコア4またはスコア3をつけた生徒は入学前(4月)では35.9%に対して、1月では28.5%となり、7.4%低くなった。これはディベートや「移民マップ」課題研究活動が主に国内外の社会情勢に関する情報に触れることが多く、日本文化そのものを取り上げることが少なかったことがその原因と考えられる。

2年次生(15回生)に関して、資料7で示した通り、異文化理解の観点でスコア4または3をつけた生徒は昨年度(2018年度)の67.2%に対して、今年度は66.7%となりほぼ同じ数値となった。また、英語による発信力に関して、スコア4または3をつけた生徒は昨年度(2018年度)の31%に対して、今年度は44.8%であり13.8%高くなった。これは2年次生全員が海外研修を経験することで英語の発信力が向上したと考えられる。

資料8は3年次生の異文化理解の3年間のスコアの変化を表している。スコア4または3をつけた生徒は2017年度(1年次)で54.2%、2018年度(2年次)は52.6%、2019年度(3年次)は65.4%であった。前述のように、今年度は特に異文化理解の力の向上を目指して取り組んだ成果が出たと考えられる。

資料9は、全年次の異文化理解の比較を表している。異文化理解の観点でスコア4または3をつけた生徒は、17回生(1年次)で67.2%、16回生(2年次)で66.7%、15回生(3年次)で65.4%であった。今年度は年次間における大きな数値の違いはなかったことから、全校生が異文化理解の力を着実につけていると判断できる。

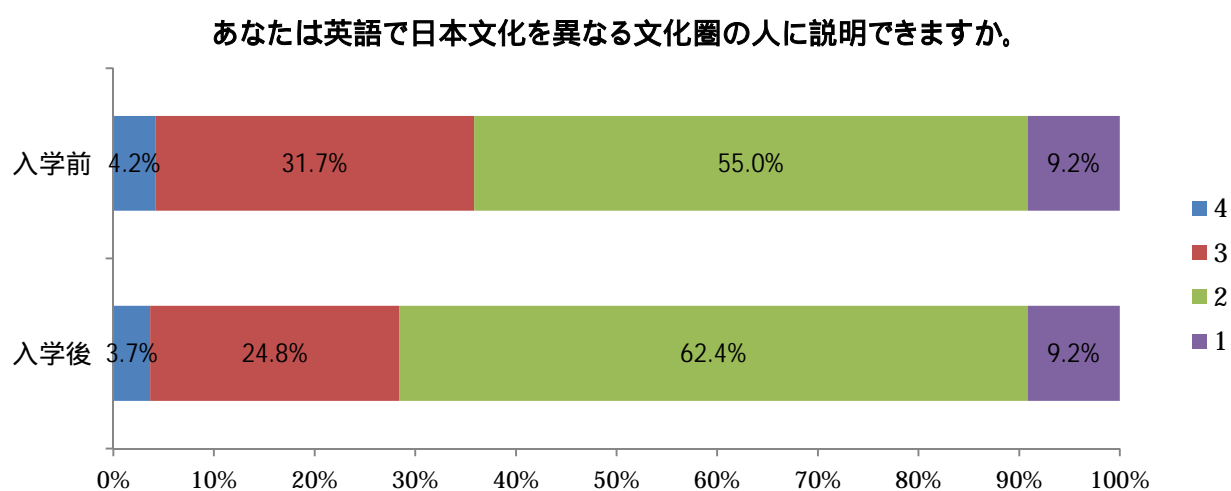
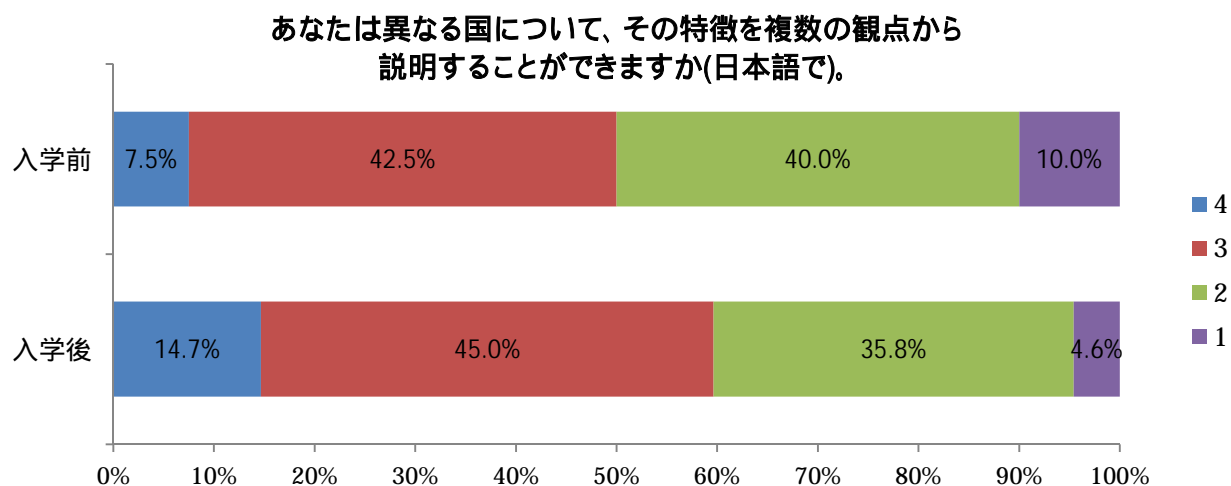
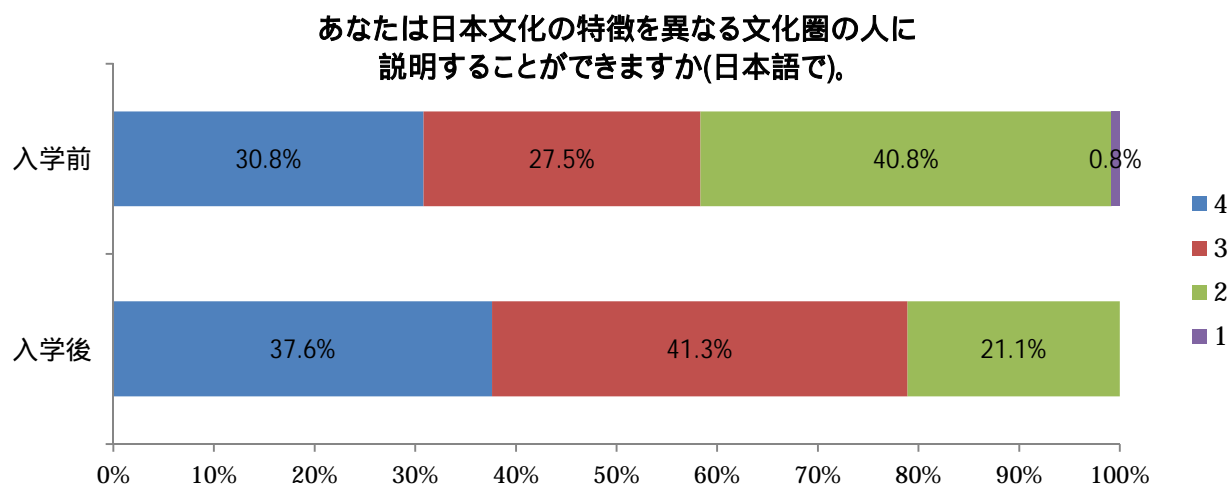
【資料 4】17 回生「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2019 年度版

17 回生「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート	
1 年 組 番(名前) _____	
問 1 あなたは日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明することができますか(日本語で)。該当する番号に をつけてください。	
4	日本の文化を異なる文化圏の人に、わかりやすく客観的にその特徴を 2 つ以上説明することができる。
3	日本の文化を異なる文化圏の人にわかりやすく客観的にその特徴を 1 つあげて説明することができる。
2	日本の文化を自分なりに異なる文化圏の人に説明することができる。
1	日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明をすることは苦手である。
問 2 あなたは異なる国について、その特徴を複数の観点から説明することができますか(日本語で)。該当する番号に をつけてください。	
4	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、3 つ以上の観点から総合的にとらえたいうで、その特徴を説明することができる。
3	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から総合的にとらえたいうで、その特徴を説明することができる。
2	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化などからその特徴を 1 つは説明することができる。
1	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など複数の観点での考察が不十分である。
問 3 あなたは英語で日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できますか。該当する番号に をつけてください。	
4	日本文化の特徴を、英語で自信をもって説明することができる。
3	日本文化の特徴を、英語で説明することができる。
2	日本文化の特徴を、自信はないが英語を使って説明することは可能である。
1	日本文化の特徴を、英語で説明するのは苦手である。
2019.4.2.および 2020.2.3.実施	

【資料 5】「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2019 年度版(16 回生用)

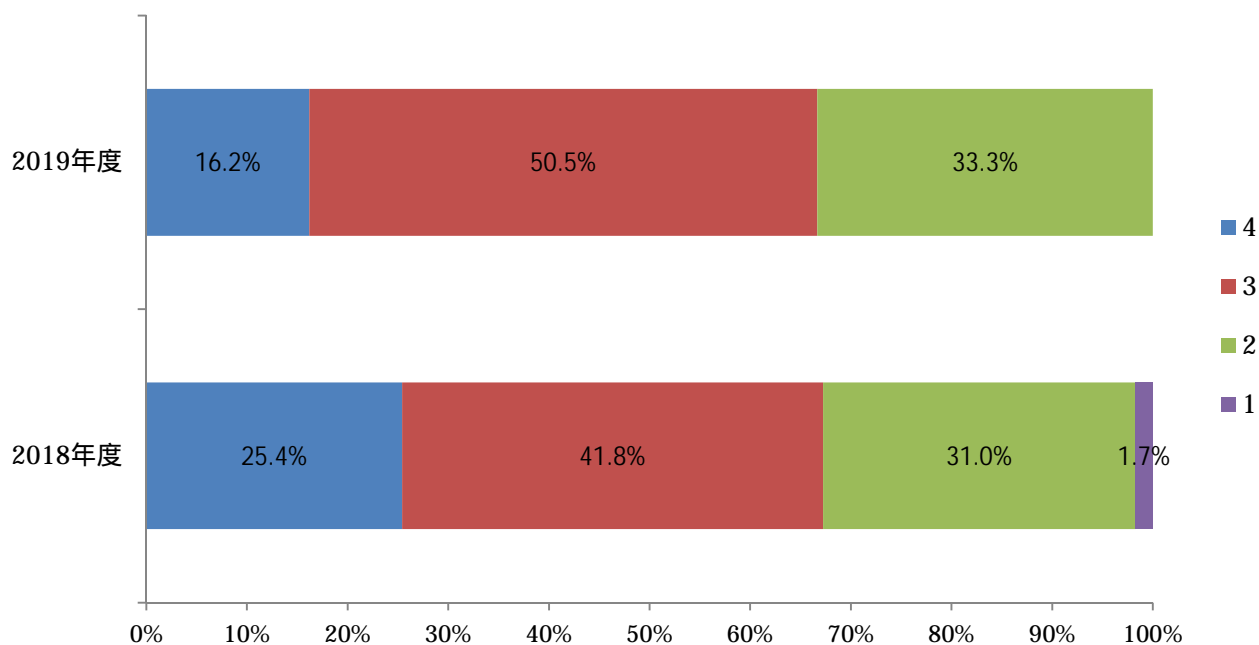
C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2019 年度版(16 回生用)	
_____ 年 組 番(名前) _____	
問 1 あなたは日本語で日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明することができますか。また、異なる国について、その特徴を複数の観点から説明することができますか。	
4	日本の文化を異なる文化圏の人に、わかりやすく客観的にその特徴を歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、3 つ以上の観点から総合的にとらえたいうで、その特徴を説明することができる。
3	日本の文化を異なる文化圏の人にわかりやすく客観的にその特徴を歴史、経済、政治、宗教、文化など、1 つあげて説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から総合的にとらえたいうで、その特徴を説明することができる。
2	日本の文化を異なる文化圏の人に自信はないが少し説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化などからその特徴を 1 つ説明することができる。
1	日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明をすることができない。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など複数の観点での考察が不十分である。
問 2 あなたは英語で日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できますか。	
4	日本文化の特徴を、英語で自信をもって説明することができる。
3	日本文化の特徴を、英語で説明することがおおむねできる。
2	日本文化の特徴を、自信はないが英語を使って少し説明することは可能である。
1	日本文化の特徴を、英語で説明することができない。
2020.2.3 実施	

【資料6】17回生「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2019年度版 集計結果 (2019.4.2./2020.2.3.実施分)

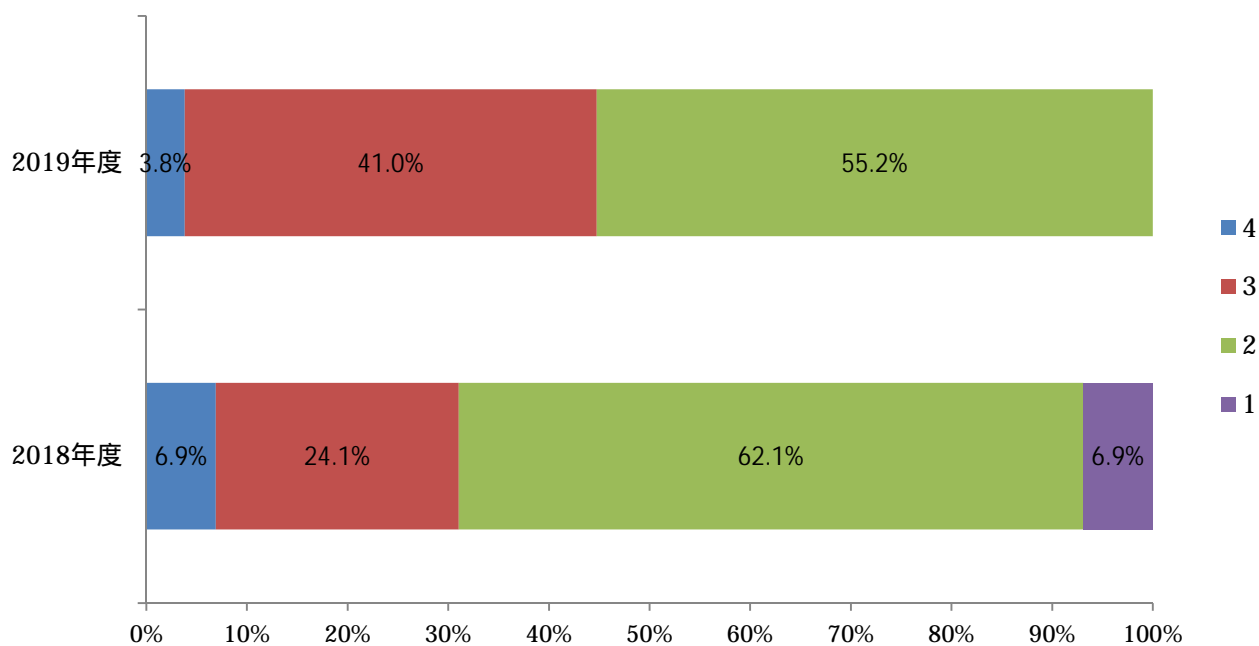


【資料7】「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2019年度版（16回生用）集計結果
 (2019.1.25./2020.2.3.実施分)

異文化理解

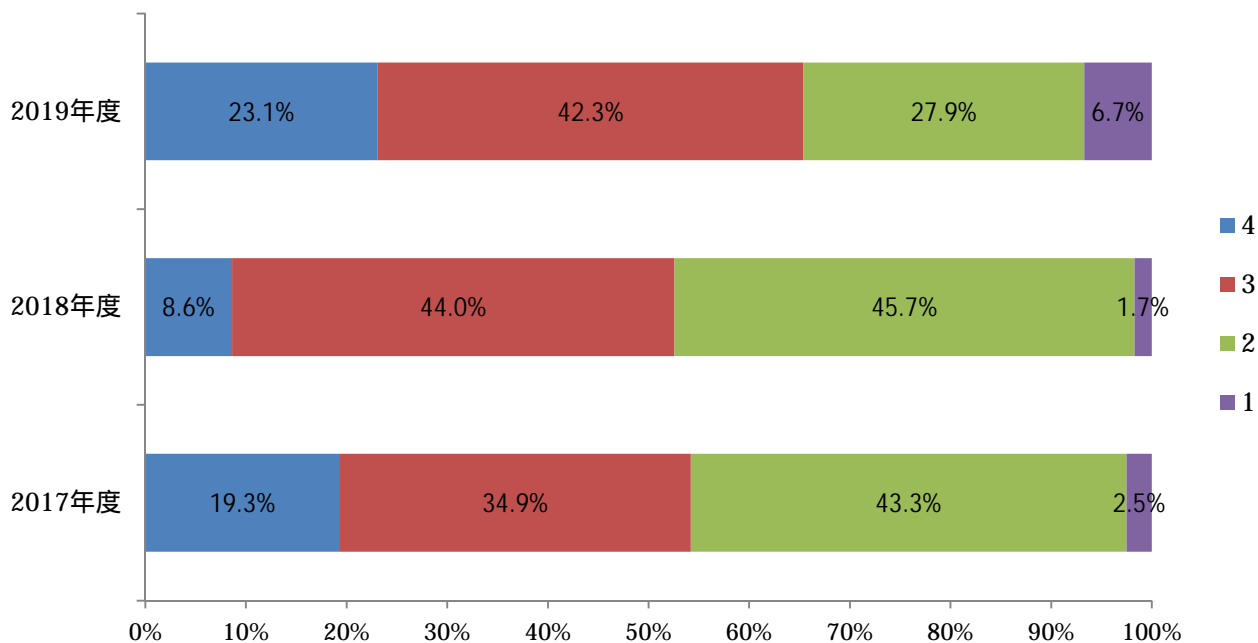


英語による発信力



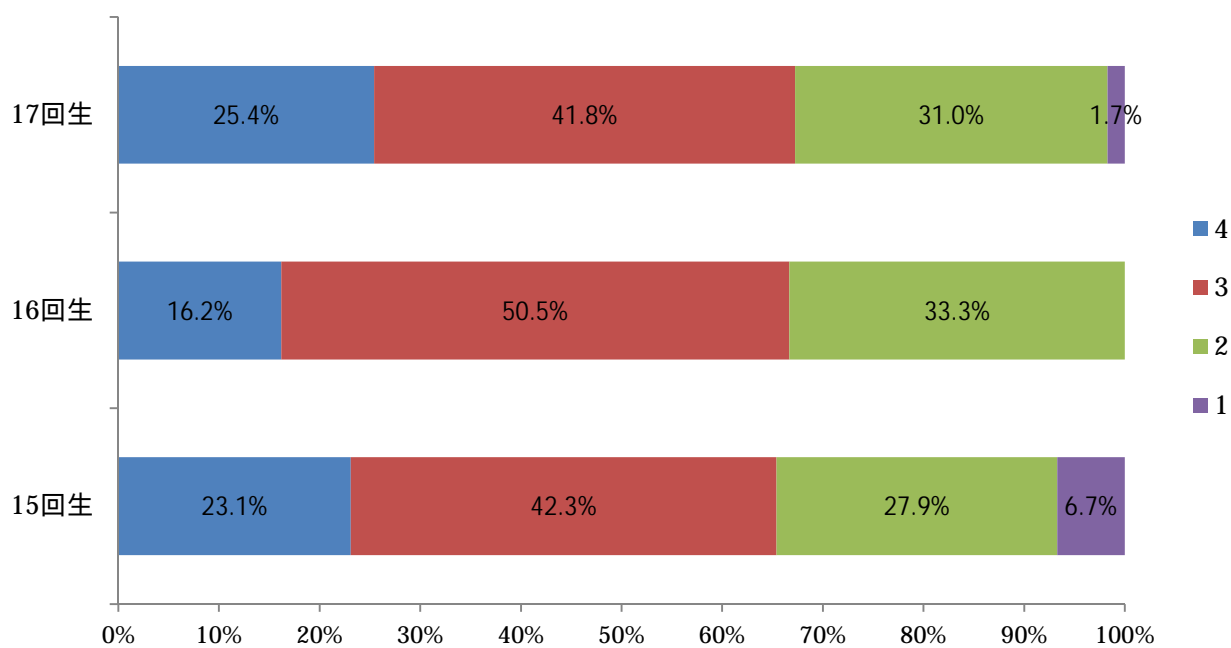
【資料8】3年次生（15回生）「SGH自己評価票」集計結果（2018.1.24./2019.1.30./2020.1.24.実施分）

異文化理解



【資料9】異文化理解 2019年度全年次生（14,15,16回生）の比較

異文化理解



実施報告書

8 研究課題活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

3) 学校設定科目「提案日本の選択」における論文の評価

評価対象

3 年次生 19 人(GLC)

調査日

2019 年 11 月 29 日(金)

評価

学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒 19 人が作成した論文をクラス内で発表し、発表者以外の生徒および担当教員(4 人)による他者評価を行った。評価には【資料 10】論文発表会評価票(兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ルーブリック 2019 年版)を使用した。(a)先行研究の検証、(b)批判的および論理的思考力、(c)テーマおよび調査目的の設定、(d)分析、(e)創造的思考力、という 5 つの観点について 4 段階で評価を行った。

分析

【資料 11】で示した通り、教員および生徒とも評価が高かったのは(c)批判的思考力および論理的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた教員 87.5%と生徒 87%であった。次に評価が高かったのは(e)創造的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた教員 87.5%と生徒 86.3%であった。一方、評価が最も低かったのは(a)先行研究の検証で、スコア 4 または 3 をつけた教員 58.3%と生徒 68.7%であった。

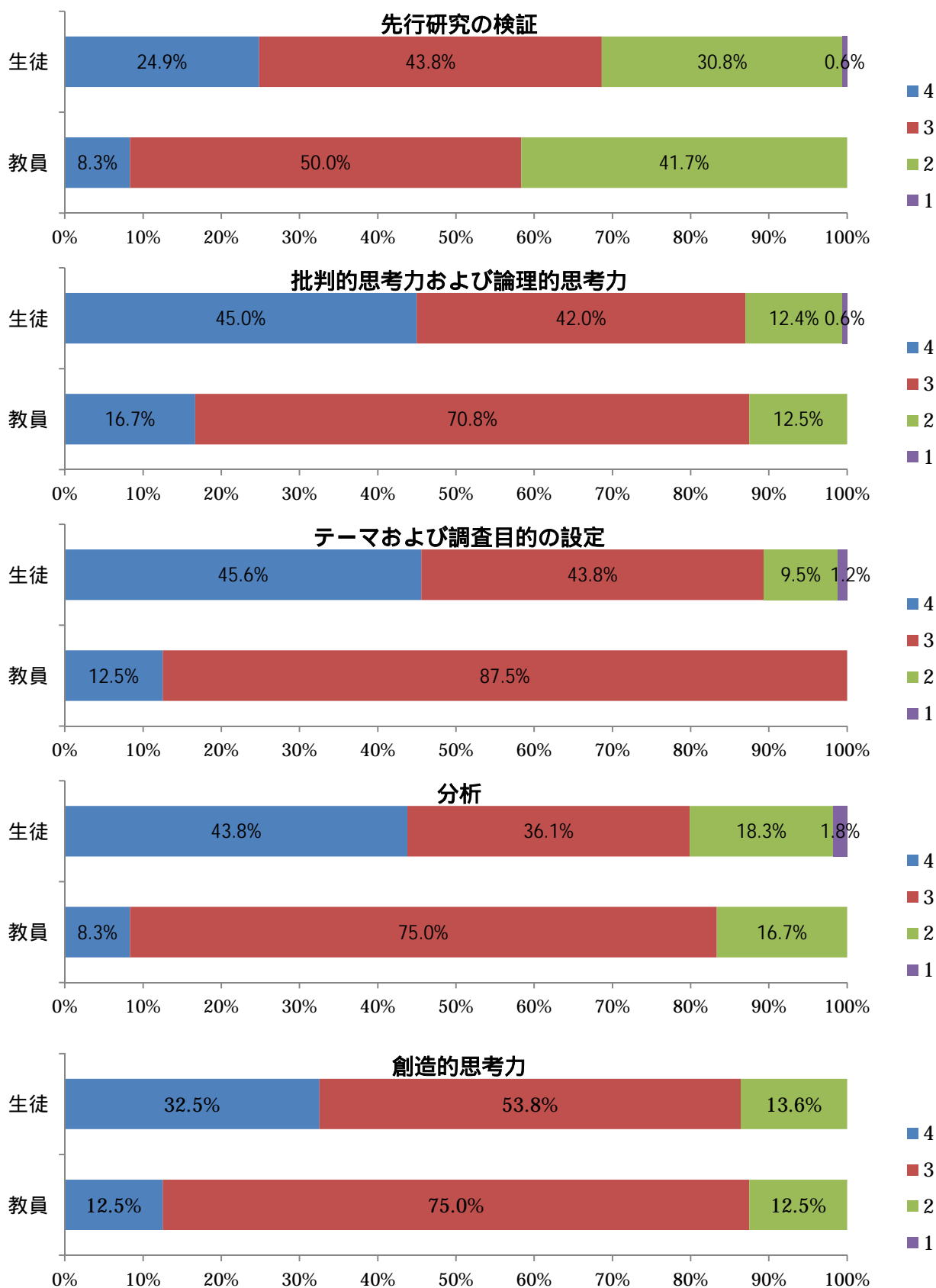
教員と生徒の間で評価の差が最も大きかったのは(c)テーマおよび調査目的の設定で、スコア 4 または 3 をつけた生徒が 89.4%に対し教員は 100%で差は 10.6%であった。

ここで特筆すべきことが 2 点ある。1 点目は、この 3 年間で教員のスコアがすべての項目で向上していることである。(a)先行研究の検証で、スコア 4 または 3 をつけた教員は 13 回生で 6.3%、14 回生で 48.4%、15 回生で 58.3%であった。(b)批判的思考力および論理的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた教員は 13 回生で 58.4%、14 回生で 70.9%、15 回生で 87.5%であった。(c)テーマおよび調査目的の設定で、スコア 4 または 3 をつけた教員は 13 回生で 66.7%、14 回生で 87.1%、15 回生で 100%であった。(d)分析で、スコア 4 または 3 をつけた教員は 13 回生で 53.2%、14 回生で 67.8%、15 回生で 83.3%であった。(e)創造的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた教員は 13 回生で 48.9%、14 回生で 80.6%、15 回生で 87.5%であった。2 点目は、生徒と教員のスコアの差が縮小していることである。13 回生で生徒と教員のスコアの差が最も大きかったのは(e)創造的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた生徒と教員の差が 39.7%であった。14 回生で生徒と教員のスコアの差が最も大きかったのは(e)分析で、スコア 4 または 3 をつけた生徒と教員の差が 16.7%であった。15 回生で生徒と教員のスコアの差が最も大きかったのは(e)テーマおよび調査目的の設定で、スコア 4 または 3 をつけた生徒と教員の差が 10.6%であった。つまり、この 3 年間で教員の評価が向上し、これにより生徒との評価の差が縮小したことがわかる。これは教員が生徒に求める資質や能力を生徒自身がルーブリックを通して理解をし、着実にこれらの力をつけてきた結果といえる。

【資料10】論文発表会評価票〔兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ルーブリック2019年度版
(2019.11.29. 実施分)〕

論文発表会評価票(兵庫県立国際高等学校 学校設定科目「提案日本の選択」ルーブリック 2019年度版)	
[評価者] 3年 組 番(名前)	
[発表者] 3年 組 番(名前)	
1 先行研究の検証	
4	国内外の先行研究を複数把握し、それらを比較および検討した結果、妥当な先行研究の2,3点(1点以上の国外の先行研究または国外の公的機関報告書等)を選択し、自らの研究で論究できている。用語の定義を明確にし、自分が明らかにしようとしているテーマに関連づけて活用している。
3	国内の複数の先行研究と国外の先行研究を1つ以上検討している。先行研究を比較および整理し、より妥当なものを選択し、論究できている。用語を定義し、自分の調査に関連づけて活用している。
2	国内の先行研究を複数把握し、これまで明らかになった知見を示している。自分の結論のために有用な先行研究のみを活用している。
1	国内の先行研究を読んではいるようだが、用語が整理されておらず、これまでに明らかになった知見を、部分的にしか示していない。
2 批判的思考力および論理的思考力	
4	移民問題を客観的かつ批判的に分析・解釈し、信頼できる情報を選択できている。数値や記録などの根拠を明示し、問題点を明らかにしたうえでその原因を的確に把握している。文章としてはもちろん、発表や質疑応答の場面においても、自分の考えを論理的に説明できている。
3	移民問題を客観的に分析・解釈し、信頼できる情報を選択できている。数値や記録などの根拠を示し、問題点を明らかにしている。文書や発表の場面で、自分の意見を根拠に基づいて明確に述べることができる。質疑応答では、一部で論理的・明快でない場面もある。
2	移民問題について、情報を事実と意見の違いを区別できる。根拠を示し、自分の考えを構築している。発表や質疑応答の場面で、自分の意見のある程度根拠に基づいて説明できる。
1	移民問題について、情報を事実と意見の違いに気がつくことができる。自分の主張に関して根拠が不十分である。発表や質疑応答で、自分なりに考えを述べているが根拠が不十分である。
3 テーマおよび調査目的の設定	
4	先行研究の課題を踏まえたうえで、適切で明確なテーマを設定しており、独創性がある。それについての自分で考えた仮説および調査項目がわかりやすく整理されて示されている。
3	先行研究の課題を踏まえたうえで、適切で実現可能なテーマを設定している。それについての自分で考えた仮説や調査項目が整理されて示されている。
2	実現可能なテーマを設定しているが、先行研究から導かれる課題が示されておらず、独創性は十分とはいえない。テーマについての自分で考えた仮説や調査項目が示されている。
1	問題の設定があいまいで、実現可能なテーマとはいえない。テーマについて、一般的な仮説や調査項目しか示されていない。
4 分析	
4	調査した内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・重要な型(パターン化)の発見など、すべての観点から検討している。
3	調査した内容をわかりやすくまとめ、類似点・相違点・重要な型(パターン化)の発見など、複数の観点から検討している。
2	調査した内容をまとめ、類似点・相違点・重要な型(パターン化)など何らかの法則性を検討している。
1	調査で得られた情報をまとめることに終始している。
5 創造的思考力	
4	複数の資料や自らの調査結果を検討した上で、自分なりに課題を設定する。その課題の論点(論争になる点、容易に解決できない点)を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。
3	指導を受けながら、資料や調査結果を検討した上で、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や自らの調査結果などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。
2	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。資料に基づいて解決策を自分なりに選択できる。
1	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。
[発表者へのアドバイス]	

【資料11】論文発表会評価票 (兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ルーブリック2019年度版) 集計結果



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

4) 「移民マップ」課題研究活動の評価

評価対象

1 年次生 120 人

調査日

「移民マップ」発表会 2020 年 1 月 20 日(月)

経緯

一昨年の SGH 校内推進委員会において、生徒の「移民マップ」の考察について一部に論理の飛躍がみられ、これは 3 年次において「提案日本の選択」で生徒が作成した論文についても同様の論理の飛躍が見られるという意見が出された。そこで昨年度より論文の作成に向けて、基本的な資質や能力を 1 年次から身につけるように取り組むこととした。具体的には、「移民マップ」作成の目的を、(a)情報を的確に理解し効果的に表現する力、(b)社会的事象について資料に基づき考察する力、(c)日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力、という 3 つの力を育成することを目的とした。昨年度からクラスごとに「移民マップ」をポスターにまとめる形式をとった。結果、表現力および多面的理解の力の向上が見られた。今年度は、論理性の向上を目標に「移民マップ」課題研究活動に取り組んだ。

評価

「移民マップ」発表会を行い、【資料 12】で示したとおり、兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「移民マップ」評価シート 2019 年版を使用し、(ア)表現力、(イ)多面的理解、(ウ)論理性、という 3 つの観点について 4 段階で生徒による評価を行った。

分析

【資料 13】のとおり、それぞれの観点について 14 回生(2016 年度)、15 回生(2017 年度)、16 回生(2018 年度)、17 回生(2019 年度)の評価を比較した。(ア)表現力については、14 回生 61.6%、15 回生 85.9%、16 回生 89.7%、17 回生 96.3%であった。(イ)多面的理解については、14 回生 86.5%、15 回生 93%、16 回生 94%、17 回生 96.9%であった。(ウ)論理性については、14 回生 87.2%、15 回生 94.9%、16 回生 90.9%、17 回生 92%であった。つまり、すべての観点で昨年度よりスコアが向上した。

ここで特筆すべきことが 2 点ある。1 点目は、表現力と多面的理解がこの 4 年間で最高のスコアとなったことである。これは昨年度より、「移民マップ」をポスターにまとめ、特に人の移動をグラフと図、そして人の移動をプル要因とプッシュ要因に分けて表現する作成方法を取り入れたことによる。2 点目は、論理性が昨年度より向上したことである。これは、今年度は「移民マップ」の対象国を日本とブラジルに焦点をしばり、この二国間における 120 年間の人の移動の歴史を 3 つの時代に分け 3 つの「移民マップ」を作成し、3 つの作品が一つのストーリーとして完結することを目的に作成に取り組んだことによる。つまり、生徒が人の移動を一つのストーリーとして理解することができたことが論理性の向上につながったといえる。

兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール「移民マップ」2019 年度評価シート

[評価者] 1 年 組 番(名前) _____

[評価の観点 1] 表現力

4	図・マップのいずれについても、年代ごとに 2 つ以上の要素を表示しており、複数の情報を 1 つの図・マップの中で表現する工夫が施されている。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現から、何を伝えたいのかという点が明確で、非常に見やすく理解しやすい図とマップである。
3	図・マップのいずれかに、年代ごとに 2 つ以上の要素を表示しており、複数の情報を 1 つの図またはマップの中で表現する工夫が施されている。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現を工夫している図とマップになっている。
2	図・マップのいずれについても、年代ごとに 1 つの要素を表示しており、1 つの情報を 1 つの図およびマップの中で表現している。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現を工夫しようとしている。
1	図・マップのいずれかに、情報を 1 つの図およびマップの中で表現しているが、凡例が明示されていないなど表記に不備があり、または色分け、線の太さなどの表現が不十分なところがある。

[評価の観点 2] 多面的理解

4	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化など現実の枠組みを意識して、合わせて 3 つ以上の視点から述べられている。
3	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化など現実の枠組みを意識して、2 つの視点から述べられている。
2	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化のうち 2 つの視点から述べているが、要因の根拠としては不十分なところがある。
1	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化のうち 1 つの視点のみしか言及していない。

[評価の観点 3] 論理性

4	考察が移出および移入の要因からの確に導き出されており、論理の飛躍がなく筋が通っており誰もが納得できるものになっている。
3	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしており、論理の飛躍がなく納得できるものになっている。
2	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしているが、論理に飛躍が感じられる。
1	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしておらず、論理が飛躍している。

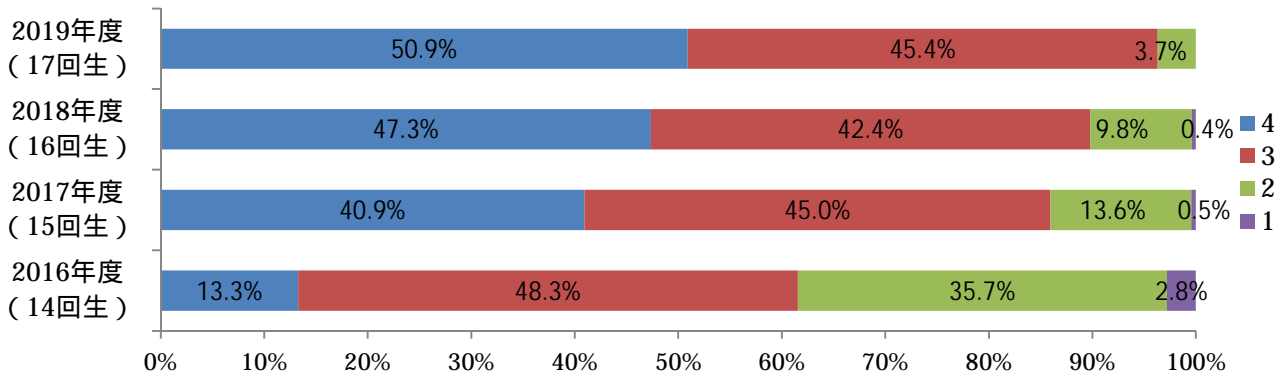
【資料13】「移民マップ」の評価結果

2016年度 (14回生)・2017年度 (15回生)・2018年度 (16回生)・2019年度 (17回生) 比較

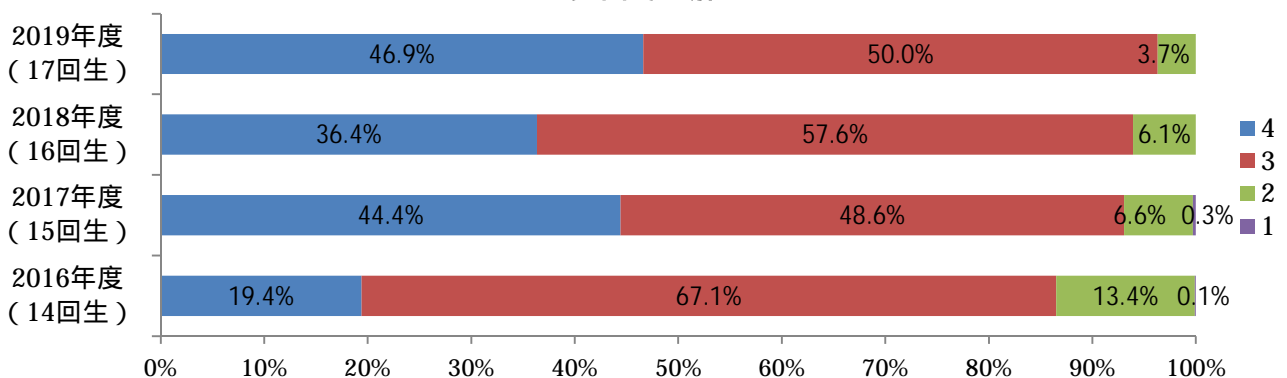
(14回生: 2016年12月15日(木)、15回生: 2017年9月11日(月)、16回生: 2018年12月20日(木)、

17回生: 2020年1月20日実施分)

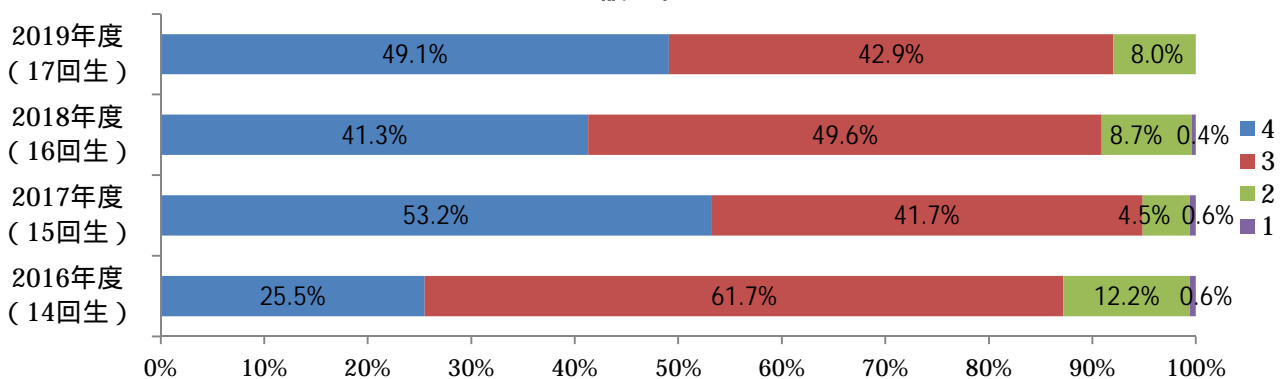
表現力



多面的理解



論理性



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

5) ディベート課題研究活動の評価

評価対象

1 年次生 121 人 留学生 1 人を含む

調査日

ディベート大会予選 2019 年 6 月 17 日(月)

ディベート大会決勝 2019 年 6 月 24 日(月)

経緯

2016 年度のディベート決勝において審査員の大学教員より「応答力」および「論理的思考力」の育成の必要性が指摘された。そこで、2017 年度より「応答力」の育成を目指してディベートに取り組んだ結果、ルーブリック評価では 2017 年度そして 2018 年度と「応答力」の向上が見られ、相手の論理に則したディベートができようになった。そこで、2019 年度は「論理的思考力」のさらなる向上を目指して取り組むことにした。

評価

予選および決勝も、評価には【資料 14】「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ディベート大会評価シート」を使用し、(a)調査力、(b)応答力、(c)プレゼンテーション力、(d)協力(チームワーク)、という 4 つの観点について 4 段階で生徒が評価を行った。

分析

【資料 15】で示したとおり、ディベート大会決勝では、ジャッジによる評価が最も高かったのは(d)協力(チームワーク)で、スコア 4 をつけた生徒は 44.7%であった。一方、ジャッジによる評価が最も低かったのは(c)プレゼンテーションでスコア 4 をつけた生徒は 14.5%であった。これは、昨年度も同じ傾向であった。一昨年度より C.C.C.(総合的な学習の時間)が週に 1 時間から 2 時間に増えたことで生徒の協働が深まったことにより協力(チームワーク)のスコアが高くなったといえる。

次に 14 回生、15 回生、16 回生、17 回生の比較を行った。【資料 15】で示すとおり、14 回生と 17 回生を比較すると(a)調査力、(b)応答、(c)プレゼン、(d)協力すべての項目でスコア 4 をつけた生徒は増加した。最も向上したのは(a)調査力で、スコア 4 をつけた生徒は 14 回生 8%に対して 17 回生は 40.8%で 32.8%向上した。4 年間を通してみると、すべての項目でスコア 4 をつけた生徒が多かったのは 16 回生であった。これは 15 回生と同じテーマで、しかも倍の時間をかけて取り組んだ結果といえる。17 回生は 16 回生と比べて、すべての項目でスコア 4 をつけた生徒が減少した。これは、17 回生のテーマを「日本はアメリカ合衆国よりフランスの移民政策を取り入れるべきである」として、肯定側はフランスの移民政策を、否定側はアメリカの移民政策を取り上げ課題研究活動に取り組んだが、生徒にとっては難しいテーマであったことがその原因と考える。そのなかで、最もスコアの減少が少なかったのが(a)調査力で、スコア 4 をつけた生徒は 16 回生 45.1%に対して、17 回生は 40.8%で 4.3%の減少にとどまった。これは、難しいテーマながらも生徒がフランスやアメリカの移民政策に関する資料を主体的に調べた結果であったといえる。十分な調査により説得力のある根拠を提示でき、論理的なディベートが展開できたと考える。

【資料 14】兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ディベート大会評価シート

17 回生(2019 年度版) 兵庫県立国際高等学校 SGH ディベート大会決勝 評価シート

1 調査力：準備・予想・非認知スキル

4	<p>【文献】5つ以上の文献を参照し、立論や想定される質問への応答を準備できている。どの資料も筆者の背景や立場を調べたうえで、例えば、法的に定められているのか、筆者の願望なのか、といった信頼できる情報源か否か、最新の情報が否かといった点について自分たちで判断し、批判的に吟味して用いることができている。</p> <p>【用語】自分たちが用いる用語（在留資格など）について、類似する用語との違いを調べ、定義をわかりやすく述べた後、正確に使用している。</p> <p>【論理】立論の論理は明確で、聞き手にとってわかりやすい。政治・経済・治安・福祉など現実の枠組みを意識して、3つ以上の視点から立論できている。その工夫として、引用や図・グラフが示されているフリップなどの資料を用意している。どの主張・資料にも対応する出典を明記したうえで、聞き手が見やすいように配慮されている。十分に説得力のある立論となっている。</p>
3	<p>【文献】3つ以上の文献を参照し、立論や想定される質問への応答を一部準備できている。情報の妥当性について考慮しながら用いることができている。</p> <p>【用語】自分たちが用いる用語（在留資格など）について、定義をわかりやすく述べた後、ほぼ正確に使用している。</p> <p>【論理】立論の論理はわかりやすい。主張・資料にも対応する資料が一部用意されている。一定の説得力のある立論となっている。</p>
2	<p>【文献】情報の妥当性についての考慮は不十分ながら、複数の文献を参照し、立論を準備できている。質問を想定しても、少しい外れである。</p> <p>【用語】用語（在留資格など）を使用できているが、発表後にさらなる調査が必要である。</p> <p>【論理】立論では資料に基づいて述べることができている。</p>
1	<p>【文献】与えられた文献を参照しながら、立論は準備できている。相手の質問は想定できていない。</p> <p>【用語】用語（在留資格など）の使用が正しくなく、誤解を招く。</p> <p>【論理】資料は参照できているが、論理を裏付ける効果的な資料とはいえない。</p>

2 応答：即興性

4	<p>【質問】相手の論理を的確に理解したうえで、論点に関して効果的な質問を3つ以上できている。相手の文献の信頼性等を見極めながら、質問等で論理の不備や説明を避けた点を指摘することができる。</p> <p>【反論】質問では予測の有無にかかわらず、応答できている。反論では、相手の質問に効果的に応答しながら、事前に想定した点は資料を効果的に用いながら応じ、想定していないものについても、客観的に反論することができる。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しながらも、ディベート全体の議論を踏まえたうえで、資料を参照しながら妥当な結論を導いている。十分に説得力のある結論となっている。</p>
3	<p>【質問】論点に関して効果的な質問を1つ以上できている。質問等で論理の不備を指摘することができる。</p> <p>【反論】質問では応答できている。反論では、相手の質問に応答しながら、客観的に反論することができる。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しながらも、ディベートの議論を一部踏まえたうえで妥当な結論を導いている。一定の説得力のある結論となっている。</p>
2	<p>【質問】論点に関して少々ずれているが、質問を複数用意できている。</p> <p>【反論】質問では応答できている。反論では、一部相手の主張をくみ取れないところもあるが、何とかできている。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しつつ、ある程度妥当な結論を導いている。議論をもう少し踏まえられとよいか。</p>
1	<p>【質問】質問は用意できた。</p> <p>【反論】応答に課題が見られる。</p> <p>【最終弁論】結論は言えているが、論理的ではない、あるいは、立論と代り映えしない。</p>

3 プレゼン：演出

4	<p>【発表】自分が相手からどのようにみられているかという点に自覚的で、顔を上げて、聞き手を見ながら、適切な声量で発表・応答することができている。準備の有無にかかわらず、相手に弱さを見せずに反論をすることができている。</p> <p>【言葉遣い】議論全体が円滑かつ気持ちの良いものとなるように、質問・反論であっても、相手や様々な立場を配慮した言葉遣いができている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論のいずれにおいても、伝えたいことを時間内に収めるとともに、制限時間前5秒よりも早く終わり、待つことがない。</p>
3	<p>【発表】メモに目を落としながらも、適切な声量で発表・反論をすることができている。</p> <p>【言葉遣い】妥当な言葉遣いで議論が進められている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論の少なくとも2つ以上で、伝えたいことを時間内に収めるとともに、制限時間前15秒よりも早く終わり、待つことは少ない。</p>
2	<p>【発表】メモを読みながら、発表・反論をすることができている。聞き取りやすい声量で発表できるのが望ましいという印象を受けた。</p> <p>【言葉遣い】妥当な言葉遣いで議論が進められている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論において、制限時間を超える場面や、時間内に収まっても30秒程度間があるのなど、時間を効果的に用いられるとよいと思われる。</p>
1	<p>【発表】メモを読み上げるだけで、聞き取りにくい。</p> <p>【言葉遣い】不適切な言葉遣いが見られる。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論において、制限時間を大幅に超える場面や、時間内に収まっても1分以上秒程度間があるのなど、時間を効果的に用いられていない。</p>

4 協力：チームワーク・非認知スキル

4	<p>【役割】準備・発表時点のいずれにおいても、班全体の動きの中での自分の役割を検討し、前に出る、サポートに回るといったいずれの役割でもチームの一員として活躍できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、チームの一員として取り組んでいる。班全体での話し合い、小グループなど戦略的に作戦タイムを使うことができている。</p>
3	<p>【役割】自分の役割をきちんと遂行できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、チームの一員として取り組んでいる。</p>
2	<p>【役割】自分の役割に不満を感じながらも、遂行できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、一部の生徒としかかかわれていないため、チーム全体に意見を反映することに課題が見られる。</p>
1	<p>【役割】自分の役割に不満を感じ、意欲が見られない。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、話し合わない、あるいは、一部の生徒と関係のない話をする場面も見られる。</p>

評価は下に記載し、合計点を書くこと

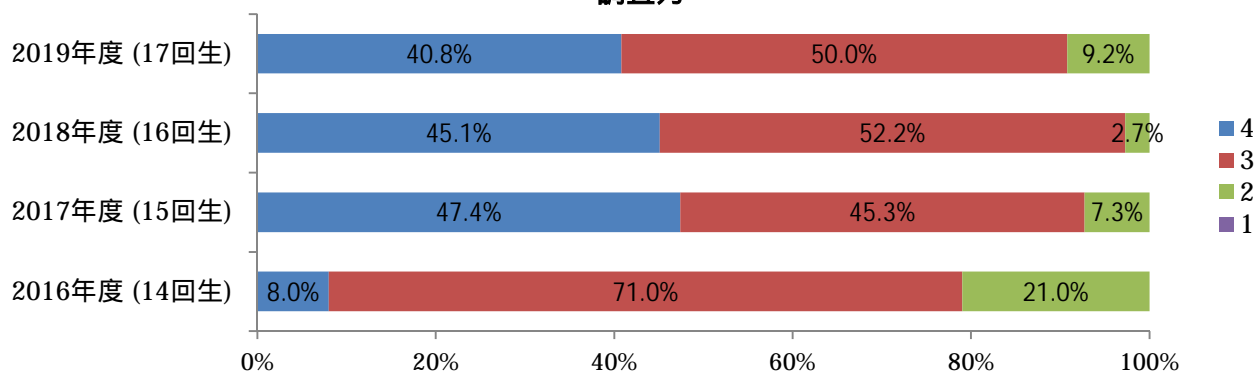
	肯定側 (組 班)	否定側 (組 班)
1 調査力：準備・予想・非認知スキル	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
2 応答：即興性	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
3 プレゼン：演出	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
4 協力：チームワーク・非認知スキル	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
【合計点】	点	点

【講評】

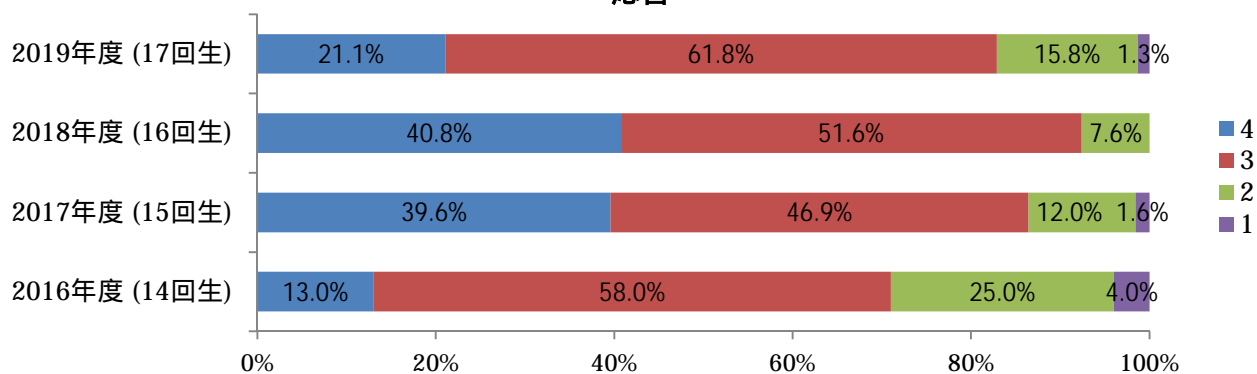
【資料15】ディベート大会決勝の評価

2016年度 (14回生)・2017年度 (15回生)・2018年度 (16回生)・2019年度(17回生) 比較

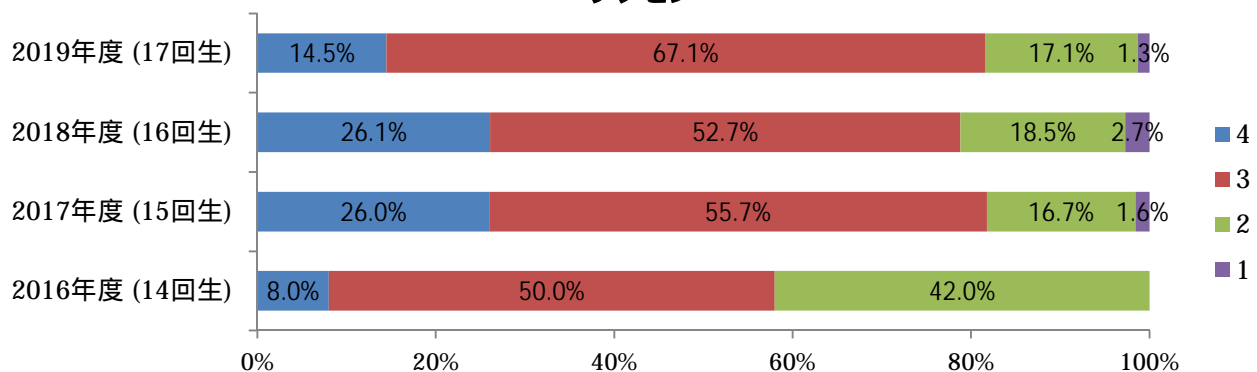
調査力



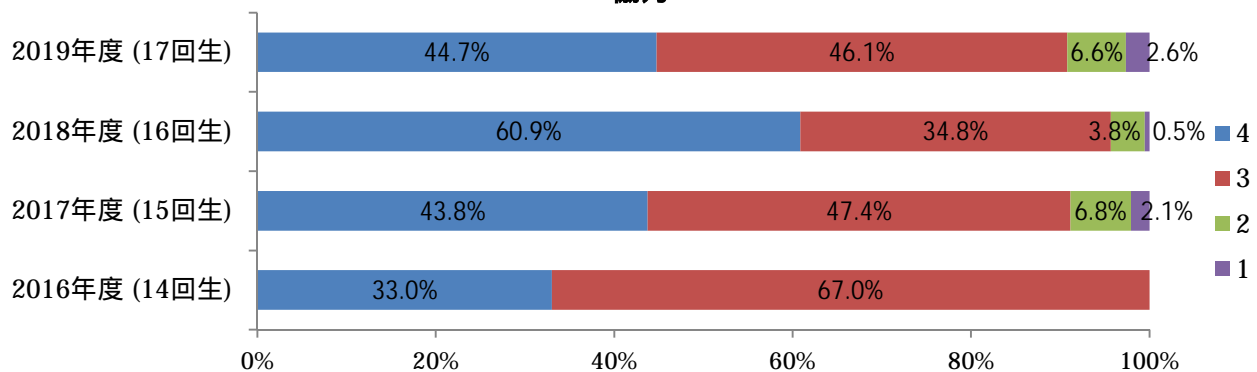
応答



プレゼン



協力



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

6) 最終発表会における評価

評価対象

1 年次生 6 人、2 年次生 7 人、3 年次生 3 人 すべて発表者

調査日

最終発表会 2019 年 12 月 18 日(水)

評価

最終発表会で発表を担当した 1 年次生 6 人、2 年次生 7 人、3 年次生 3 人に自己評価を行った。評価には【資料 16】兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「最終発表会」自己評価シート 2019 年版を使用した。(a)プレゼンテーション力、(b)上達感、という 2 つの観点について 4 段階で評価を行った。また、今回の発表会で「何ができたか、または何ができなかったか」を自由記述で答えさせた。あわせて、外部支援員および保護者・一般来場者による評価を行った。評価票は本校の SGH ルーブリック【資料 1】をもとに、(ア)プレゼン:演出力、(イ)批判的思考力および論理的思考力、(ウ)分析、(エ)創造的思考力、という 4 つの観点について 4 段階の評価を行っていただいた。また、感想もあわせて書いていただいた。

分析

【資料 17】のとおり、それぞれの観点について、スコア 4 をつけた生徒の割合の差について今年度における年次間の比較してみた。(a)プレゼン:演出力においては、3 年次生 33.3%、2 年次生 28.6%、1 年次生 16.7%であった。(b)上達感については、3 年次生 33.3%、2 年次生 42.9%、1 年次生 0%であった。プレゼンテーションに関しては、1 年次生より 2 年次生が、2 年次生より 3 年次生がスコアが高くなる傾向となった。一方、上達感に関しては、2 年次生が 3 年次生より上達したと感じていることがわかった。これは【資料 18】における 3 年次生の「もう少しゆっくり話すことでできれば、よりよい発表になったのではないかと思う。」というコメントから、この 3 年次生は自己を振り返り冷静に分析できていると判断できる。1 年次生の「これからもっと上手くなれると思う。」や「改善すべきポイントはいくつもあり、課題が多く見つかった。」というコメントから、1 年次生も経験をつむことで将来、達成感が得られることが予見できる。一方、外部支援員および保護者・一般来場者の「特に 3 年次の発表者は伝え方が上手で、引き込まれるような発表だった。」というコメントから、3 年次生は他の年次生より素晴らしいパフォーマンスをしていたことがわかる。経験により、自信が付き、達成感が得られ、自尊感情が深まることがわかる。課題研究活動は継続し努力を重ね、経験をつむことが重要であることがわかった。

兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「最終発表会」自己評価シート 2019 年度版

1 プレゼン：演出力

あなたのこの最終発表会のプレゼンテーションについて、客観的(感情的ではなく)に評価をしてください。

4	【発表】自分が相手からどのようにみられているかという点に自覚的で、顔を上げて、聞き手を見ながら、適切な声量で発表することができた。 【言葉遣い・読み・発音】発表会全体が円滑かつ気持ちの良いものとなるように、相手や様々な立場を配慮した言葉遣いができた。また、用語の読み方や発音を事前に調べ、正しい読み方および発音が出来た。
3	【発表】メモに目を落としながらも、適切な声量で発表をすることができた。 【言葉遣い・読み・発音】妥当な言葉遣いで説明が進めることができた。用語について正しい読み方および発音が出来た。
2	【発表】メモを読みながら、発表をすることができた。発表の声量は十分ではなかった。 【言葉遣い・読み・発音】妥当な言葉遣いで説明が進めることができた。用語について読み方や発音を事前に調べるなどの準備が不十分であった。
1	【発表】メモを読み上げるだけで聞き手のことを考えることができなかった。 【言葉遣い・読み・発音】不適切な言葉遣いがあったと思う。用語について正しくない読み方や正しくない発音があった。

2 プレゼン:上達感

あなたの最終発表会のプレゼンテーションに関して、これまでの発表会と比較した気持ちを表してください。

4	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンよりも、自覚的に顔を上げたり、聞き手を見たり、適切な声量で発表することができた。 【達成感】自分が思った通りのプレゼンをすることができた。
3	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンよりも、自覚的に顔を上げたり、聞き手を見たり、適切な声量で発表するように努力はできた。 【達成感】十分とは言えないが自分の思うようなプレゼンができた。
2	【過去のプレゼンとの比較】自覚的に努力をしようとしたが、これまで行った発表におけるプレゼンと同じようにメモを読みながらの発表になってしまった。 【達成感】努力していれば、もう少し良いプレゼンができた。
1	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンと同じようにメモを読みながらの発表になってしまった。 【達成感】満足できるプレゼンができなかった。

3 プレゼンテーションで大切なのはあなたが伝えたことが聴衆にどれだけ届いたということです。あなたのプレゼンテーションは聴衆に十分に伝わったと思いますか。あなたができたこと、および何ができなかったということを具体的に文章で書いてください。

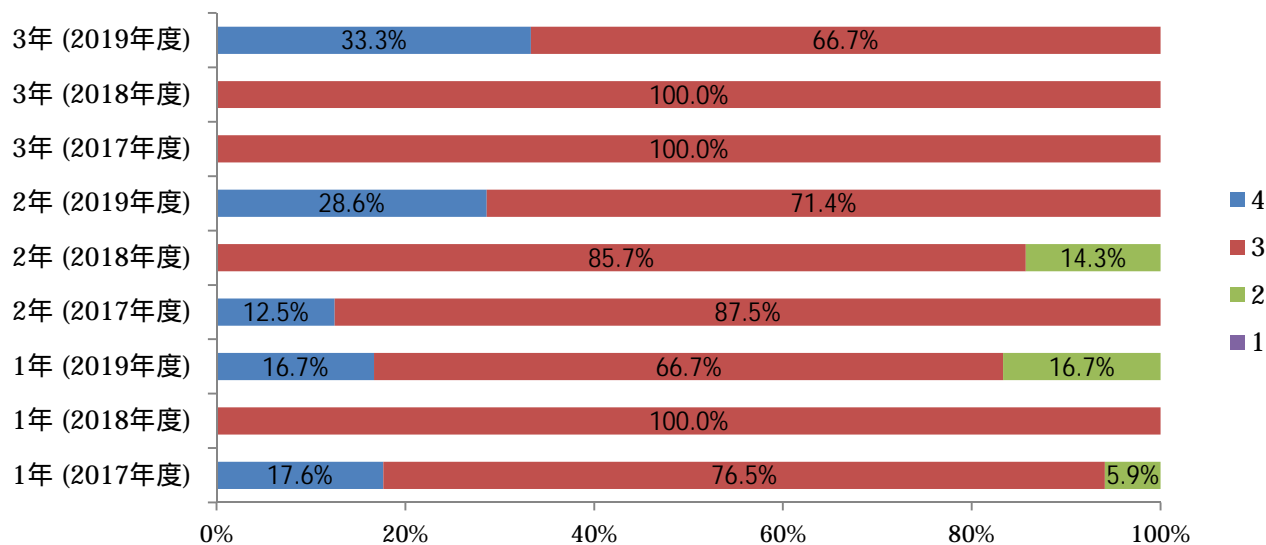
上記 1 と 2 の評価は下に記載し、合計点を書くこと

	自己評価
1 プレゼン:演出力	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
2 プレゼン：上達感	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
【合計点】	点

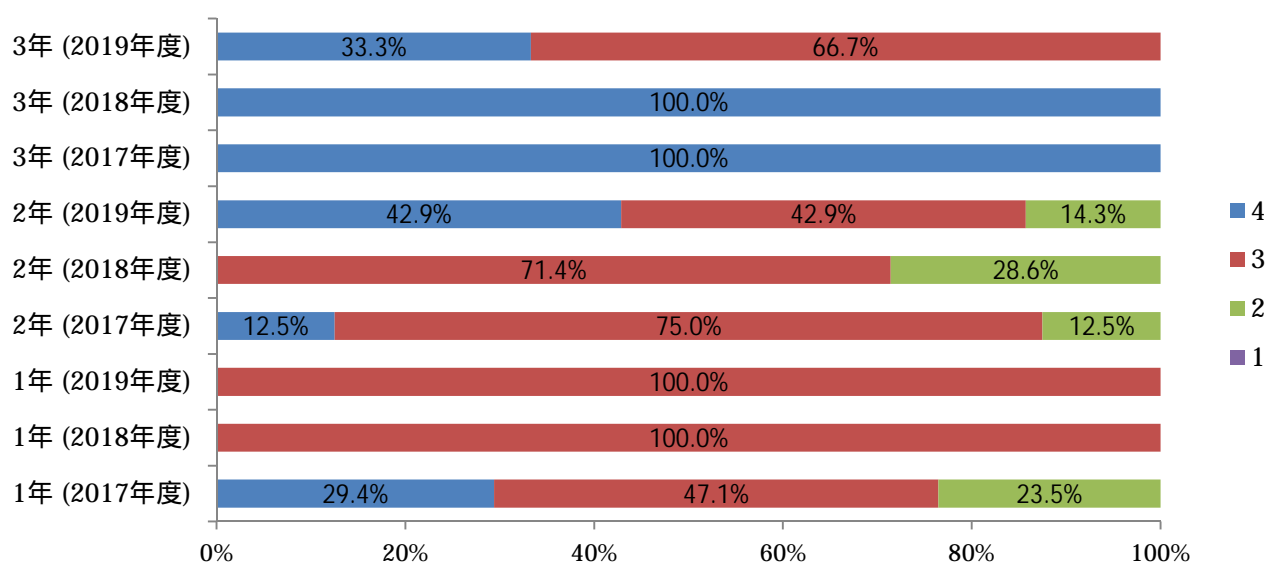
評価者 _____ 年 _____ 組 _____ 番(氏名) _____

【資料17】最終発表会の評価結果(2017.12.19./2018.12.19./2019.12.18実施分)

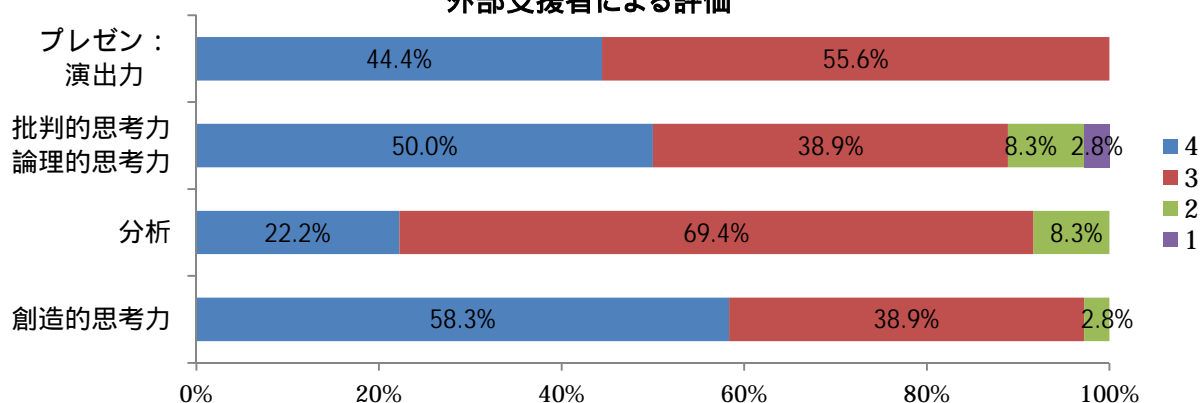
プレゼン: 演出力



プレゼン: 上達感



外部支援者による評価



3 プレゼンテーションで大切なのはあなたが伝えなかった事が聴衆にどれだけ届いたということです。あなたのプレゼンテーションは聴衆に十分に伝わったと思いますか。あなたができたこと、および何ができなかったということを具体的に文章で書いてください。

1年次

- ・想像以上にスムーズに読むことができた。これからもっと上手くなれると思う。
- ・聴衆に響かせることはできなかったように感じた。原稿を覚えたりなど、改善すべきポイントはいくつもあり、課題が多く見つかった。

2年次

- ・シンプルで分かりやすいスライドを作ることができたと思う。
- ・前回より聴いている人を意識して自分なりに工夫して読むことができた。
- ・国際高校では気軽に民族衣装を着ることができ環境であるということ、劇を通してうまく伝えられたと思う。

3年次

- ・聴衆が前のめりになって聞いてくれたり、うなずいてくれたりしていたので、内容は十分に伝えることができたと思う。
- ・もう少しゆっくり話すことでできれば、よりよい発表になったのではないかと思う。
- ・緊張したが、納得のいく発表にできた。

外部支援者および保護者・一般来場者

- ・全体として着眼点が深まったと感じる。とても勉強になった。
- ・全体として良かったが、発声のはっきりしない人もいて聞き取りにくい部分があったのは残念。
- ・既存の文献だけに頼らず、フィールドワーク調査結果を踏まえた発表になっていて素晴らしいかった。特に3年次の発表者は伝え方が上手で、引き込まれるような発表だった。
- ・全体を通してしっかり問題意識を持ち、問題提起し、結論を伝えていた。中学生にとって大変良い刺激になると感じた。ぜひ来年度も来ていただきたい。
- ・海外でアウトリーチしたり、経年比較ができたりする点は、SGH 指定校ならではの利点が表れていると感じた。グローバルな視点で課題を考えることや、研究の手法を学ぶことは生徒にとって大変価値のあることだと思う。
- ・よくフィールドワークをされ、調査結果をまとめられていた。ただ、なぜ今、移民研究をテーマにしているのかについての発表があるとなおよかったと思う。
- ・分析に関して、もう少し分母を増やすといい。色々な立場の人から考えを集める方法を工夫してほしい。
- ・調査対象が高校生と大学生という点が、調査結果に影響していないかと気になった。

関係資料

1 平成 31 年度実施教育課程表

全日制の課程 本校

国際科

兵庫県立国際高等学校 平成 31 年度実施教育課程表

兵庫県立国際高等学校

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
L																																
H																																
R																																

1 年次 17 回生 (平成 31 年度入学生)

C.C.C. Communication, Cultural Understanding, Contribution
(総合的な探究の時間)

2 年次 16 回生 (平成 30 年度入学生)

		科目選択群																																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	

3 年次 15 回生 (平成 29 年度入学生)

		科目選択群																																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	

ゴシック斜体 : 国際科の専門科目

5年間のSGH事業を振り返って

この5年間、本校のSGH事業に多大なるご支援ご協力を賜りました国内外の皆様にご心より御礼申し上げます。5年前、SGH指定の報告を受けこの事業の担当に指名されたとき、「本当に実現できるのか」と不安で一杯でした。しかし、ここまで本校SGH事業を推進できたのは、多くの方々のご支援のおかげと感謝申し上げます。

一部ではございますが、お世話になりましたの方々のお名前をあげさせていただきます。

関西学院大学の長友淳先生、志甫啓先生、鳥羽美鈴先生、そして高大接続センターの皆様にご感謝申し上げます。本校SGH課題研究活動を開始した当初から、特にディベート課題研究活動やスタディツアーでお世話になりました。移民政策学会前会長の駒井洋先生、現会長の近藤敦先生、滝澤三郎先生、宮島喬先生、鈴木江理子先生、塩原良和先生、池上重弘先生、津田守先生、佐藤由利子先生、明石純一先生、山脇啓造先生、石川えり先生、ゴロウィナ・クセーニヤ先生をはじめ多くの先生にお世話になりました。特に本校SGH企画推進委員としてご支援いただきました佐野敦子先生には、当初より本校生をご指導いただき、時には生徒の相談にも応じていただきました。本校生に学会で研究成果の報告の場を設けていただき心より感謝申し上げます。アジア協会アジア友の会の横山浩平様には海外のフィールドワークでお世話になりました。海外で移出労働経験者に聞き取り調査を実施できたのもアジア協会アジア友の会のご支援と現地スタッフの皆様のおかげです。そして姫路経営者協会の村瀬利浩様には播磨地域の企業におけるフィールドワークでお世話になりました。日本で働く外国人労働者に対する聞き取り調査を実施にあたり、ご協力いただきました企業関係者の皆様にも感謝申し上げます。池田さつき会特別養護老人ホーム「ポブラ」理事長の伊丹谷五郎様、萩野雅人様、谷久美様にはフィールドワークでお世話になりました。聞き取り調査に応じていただきました多くのインターナショナルケアワーカーの皆様にも感謝申し上げます。そして、神戸松蔭女子大学の太下卓司先生、兵庫教育大学の奥村好美先生には本校SGHループブリックの開発・運営でご支援いただきました。日本国際交流センターの毛受敏浩様、日本紛争予防センターの瀬谷ルミ子様、神戸大学の小川啓一先生、他にも多くの方々にご支援をいただきました。重ねてお礼を申し上げます。

本校のSGH課題研究のテーマは「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」です。かつて本校で勤務していたALTが移民をテーマに授業をしていたのがテーマ設定のきっかけと聞きました。しかし、当初は本校の誰も移民研究についての知識も見識もありませんでした。まさに暗中模索でSGH事業が始まりました。

移民政策学会に初めて参加したとき、ある生徒が「私も学会で発表したい」と言ってきました。その一言が本校SGH事業を大きく推進させるきっかけとなりました。SGH課題研究活動の主体は生徒です。この難解な課題に向き合い共に歩んできた生徒に感謝します。今ではSGH課題研究活動を経験し卒業した生徒が移民政策学会に入会して学会に参加しています。

生徒には「これからの日本を作るのは君たちだ」と訴えてきました。このSGH課題研究活動を経験した生徒が近い将来グローバルなリーダーとして活躍することを祈っています。

SGH 校内推進委員長
前川 裕史

平成 27 年度指定スーパーグローバルハイスクール研究報告集 第 5 年次

2020 年(令和 2 年)3 月 31 日 発行

発行者 兵庫県立国際高等学校

〒659-0031 芦屋市新浜町 1-2

電話 0797-35-5931

FAX 0797-35-5932

兵庫県立国際高等学校

〒659-0031 兵庫県芦屋市新浜町1-2

TEL. 0797-35-5931 FAX. 0797-35-5932

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~kokusai-hs/>